
皇道の艦隊

橘花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皇道の艦隊

【Nコード】

N1607Q

【作者名】

橘花

【あらすじ】

昭和18年4月18日 一人の海軍大将、山本五十六はブーゲンビル島で戦死した。だが、山本は死んでいなかった。山本は後世日本へ転生し、山本は同じ境遇の人間を密かに集めて、日米開戦の回避、もし開戦してもより良い負け方をすべく奔走する。

山本、後世へ

昭和18年 4月 18日 ブーゲンビル島上空

ダダダダ

突然響き渡る機銃音。零戦と一式陸上攻撃機、P-38と接敵して、空戦になっていた。だが、P-38は一式陸上攻撃機に攻撃を集中していて零戦には目もくれていなかった。

「後方に敵機！」

ダダダダ

機銃を操縦席に受けて、配線が切れて落ちてきた。

「頼むぞ護衛機。しっかり俺達を守りきってくれ。」

零戦は奮戦するが、P-38はやはり零戦には目もくれない。ひたすら1式陸上攻撃機に攻撃を続ける。

「左エンジンに被弾！」

「火は出たか？」

「いえ、今のところは。」

だが、暫くしてエンジンから火が出た。それと同時に機体が制御がし難くなり、降下を始めた。

「機首を上げろ。このままではジャングルに墜落するぞ。」

機長である小谷立飛行兵曹長は必死で体制を立て直そうとするが、機体の降下は止まらない。

「長かーん！ん！！。」

零戦の隊長である森崎武は爆発する一式陸上攻撃機を見ながら叫んだ。だが、山本は既に背中に機銃を浴びて戦死していた。……のはずだった

「高・少・・・生。 高野少尉候補生。」

「高野？ 私は山本五十六だ。」

山本は目を覚ました。だが、ここは機内ではなかった。

「こゝ、ここは？」

「装甲巡洋艦『日進』の艦内です。それよりも、大勝利です！。我々はあのバルチック艦隊を壊滅させました。」

「日本海海戦なのか？」

山本はそんな筈はないと思い、念のため軍医に確認する。

「軍医、私はどこをやられたのだ？」

「はい、胸部に12インチ(約30cm)弾の破片を受けました。」

「それだけなのか？」

「はい、一応内地にて検査と療養を取って頂きます」

(そんな筈は無い、この海戦で私は左の中指とクスリ指を失い、右足も負傷した筈だ。どういうことなんだ？私は後世に転生して、前世と違う歴史を歩んでいるのだろうか？それとも、私は黄泉の国で夢でも見ているのだろうか？)

しかし、之は夢ではなかった。日露戦争は前世と同様に日本の大勝利で終わった。しかし、全てが前世と同じではなく、山本が故郷に帰っても両親や知人、親戚などが話しかけてくるが魂の入れ替わった山本にとって全てが見知らぬ人物ばかりであった。

(私は前世と同じ人生を歩んでいるのか？もし歩んでいるのなら、迫り来る対米戦をなんとしても回避しなければならない。その為にも、私が昔から考えていた艦隊を後世日本で完成させなくては。)

高野の新戦略は前世の航空機とそれに伴う空母ではなかった。航空戦艦及び、潜水艦による新戦略思考を考えていた。前世での航空戦艦は登場時期と中途半端の改装で力を発揮できなかったが、高野は初めから航空戦艦として建造する事で補うつもりだった。

だが、レイテ沖を取られた日本軍が資源を枯渇していた中で中途半端の改装が航空戦艦としての力を発揮した。なんと空の航空機用格納庫に石油などの貴重な戦略物資を載せて日本本土に戻る「北号作戦」を見事に成功させた。これは敗戦続く日本軍にとって事実上最

後の作戦成功を収めた作戦でもあった。

（その為にも、ドイツから第一次世界大戦後に潜水艦を提供してもらわなければ。）

第一次、第二次世界大戦でのドイツの潜水艦の性能はすばらしいことは高野も知っており、なんとしてもドイツの潜水艦を手に入れようと考えた。

時に1905年 6月1日のことである。

山本、後世へ（後書き）

少し話を加えました。

紺碧会の計画（前書き）

前回からかなり話が飛びます。ざっと20年くらい

紺碧会の計画

1926年 12月 15日

高野は艦政局にある2つの新艦隊編成を艦政局局長に持ちかけた。それは予想される太平洋戦争を起こさない抑止力にすべく、極秘で建造することだった。

「しかし、今の我が国でこれだけの艦艇を建造するのは難しいのではないか？」

「いえ、可能です。但し、今の技術では難しいです。なので、10年掛けて建造をします。」

「10年だと！。そんなにゆっくりしては他の艦が建造できないではないか。」

「中国にドックを建設してそこで造ればいいです。中国の広大な領土を利用するんです。」

「しかし、今の中国がそれを許可するはずがない。」

「現地人を雇って経済援助をさせればいいです。」

「それでは極秘の意味がないだろう。」

「中国とは友好条約を締結するように今の内閣に働きかけています。陛下も納得していますし、内閣も陛下の命令とあれば断ることもできませんでしょう。」

「確かに友好条約を結ぶとなると可能だが、．．．分かった。許可しよう。」

艦政局の許可が下りた。そのため、高野は急いで建造案を提出した。

艦隊名 皇道の艦隊

編成 戦艦4隻

航空戦艦 6隻（艦載機1隻あたり 300機）

空母 8隻（内、2隻が軽空母）（搭載機数は正規空母平均120機 軽空母50機）

重巡洋艦 10隻

防空巡洋艦 6隻

軽巡洋艦 5隻

防空軽巡洋艦 4隻

駆逐艦 18隻

防空駆逐艦 12隻

重雷装駆逐艦 10隻

潜水艦 20隻

計 103隻

艦隊名 紺碧の艦隊

編成 潜水艦 5隻 (どれも潜水空母) (水上機を2〜4機搭載)

補給潜水艦 2隻 (燃料、弾薬を補給する。
水偵 2機を搭載。)

雷装砲撃潜水艦 4隻 (30cm連装主砲を前後に
搭載。 水偵 3機搭載)

計 11隻

これらを10年で建造、編成する。

時は流れて 1936年 7月 9日

第二次ロンドン海軍軍縮条約を破棄した日本は中国とさらに輸出品目締結条約を結び、中国から鉄鉱石や石油などの天然資源輸入を

本格化して高野の唱える2つの艦隊の仕上げに入っていた。

そして、第一次世界大戦の中で高野は密かに自分の同じ境遇の人間を集めて「紺碧会」を結成している。そして、今日はその会合の日だった。

「諸君、遅くなってすまない。出がけに軍人会の連中が押しかけてきてな。」

「しかし、連中をはじめ右翼や議員、愛国婦人会や開戦派は異口同音でアメリカを討てと唱えていますよ。」

「奴等は革命が起きても国は滅びないが、開戦すれば国が滅びるということが分からないのだ。」

「しかし閣下、このままでは前世の二の舞になりますぞ。中国から石油などは輸入していますが、これにも限界がいつか来ますぞ。」

「確かにな。資源がない以上、開戦は避けたい。」

「ですが、南條英機が内閣総理大臣に任命されたら必ず開戦しますぞ。」

「うーむ、諸君、計画実現の時は迫っている。もはや国中が開戦の熱病にかかっている。私と諸君等も知ってのとおりこの世界は前世を繰り返している。」

「運命の開戦。歴史どおり避けられなかったか。」

「開戦は避けられなくとも、破滅の道は回避できる。そのためにも諸君等の力を貸していただきたい。」

「それについては電探や通信装置などの開発には成功しています。後は精度向上の改良を加えて完成です。それに特殊な電子計算機を試作しております。」

「どのような物なのかね？」

「ここに開発責任者の久保誠一郎君がいますので説明させます。」

「はい。簡単に言えば鉱石ラジオを高性能にした物です。敵側の解読を防ぐだけでなく、敵の如何なる暗号も解読できます。恐らく昭和14年には開発が終わって配備できると思います。」

「分かった。それで航空機の方は？」

「泰山航空工業で開発を進めていますが、一部は開戦には間に合わないと思います。恐らく、開戦時には前世と同じ機体が主力になると思います。」

「どの機体が間に合うのかね？」

「一応電子偵察機「星電」は試作機が出来ております。後は生産を開始するだけです。他は艦上戦闘機「電征」はエンジンを完成させて試作機を作りますので開戦には少し間に合いません。局地戦闘機の「蒼來」は1942年の初めあたりに試作機が完成します。」

「分かった。それでは私はこれで。」

高野は立ち上がって料亭「たくみ」から出ると、

「高野閣下でありますか？」

「そうだが。」

だが、後ろからナイフを持った男が襲ってきた。

「馬鹿者が！」

高野はナイフを持った男に背負い投げをして男からナイフを取り上げる。だが

ズガアァン！

突然銃声がして高野の左手に命中する。見ると、先ほどの男が銃を構えて立っていた。

「馬鹿者が！こんなことをして何になる？」

高野は男に問うが、男は答えずにその場から逃走した。

「閣下！」

先ほどの銃声を聞いて、紺碧会のメンバーが飛び出てきた。高野はそれを確認すると意識を失った。

大高弥三郎の計画

高野は一時、療養と称して横須賀海軍病院に入院していた。そして、その間に高野の新戦術構想で建造していた紺碧の艦隊、皇道の艦隊が完成した。

だが、この艦隊は、特に紺碧の艦隊は極秘であるため、海軍の極一部の人間しか知らない。

昭和14年に独ソ不可侵条約をモスクワで締結する。これに呼応する形で日本は一気にドイツに近づいた。

そんな中、高野の元に意外な人物から会食の要請を受ける。相手は陸軍でありながら対米戦争反対派の大高弥三郎陸軍中将であった。

夜9時 料理「清風屋」

女将に案内されて、高野は大高の待つ部屋へと着いた。

「御足労おかけしました。ま、どうぞ。」

「どうも、高野です。」

「大高です。」

そう言って大高は少し笑みを浮かべて

「前世では山本さんとお見受けしますが。」

高野は驚いたが、陸軍にも自分と同じ境遇の者が居てもおかしくな
いと思い

「いやー、あなたもでしたか。」

「私は高野さんの日頃の言動でお仲間だと思っていました。。紺碧
会の事も耳にしています。実は私も陸軍で組織した「青風会」をつ
くり、同士を集めていました。我々も日米開戦をするとまず負ける
と言う事がわかっています。」

「では、あなた方は負ける戦いはしないと？」

「当初はそうでした。しかし、アメリカの腹は蒋政権と結び中国を
市場化することです。いかに我々が譲歩しようと、アメリカは戦い
を仕掛けてきます。ですが、前世の記憶どおり我々は開戦をすれば
必ず負けます。」

「同意見です。ですので、私はある2つの艦隊を編成しました。」

「そう、そこです。我々には前世の記憶があります。それを生かし
て新技術を導入してまともな戦いを挑めば、勝機はあります。しか
し、いまの体制で勝っても、我々の将来の為にはならないでしょう。
」

「確かに。今の軍令部を含めた軍人は暴走するでしょう。」

「そこで答えはひとつ。貴方を信用して打ち明けます。クーデター
を起こす他ありません。貴方の尽力のお陰で現在は中国と友好的関

係を持っていますが、南條英機が総理になると危ない。」

「では、そのクーデターに我々も参加します。そこで大高さん、私はクーデター成功後に軍令部総長に就任させてください。貴方が総理を務めればいいので。」

「わかりました。勿論、独逸との同盟も破棄します。あの男と組むといういろいろ面倒な事にもなりかねないので。」

「同意見です。」

こうして、二人は国家改革の為のクーデターを計画した

そして、史実どおり1939年9月1日、秋の訪れを待っていたかのように独逸はポーランドに侵攻した。独逸はこの後も快進撃を続けて、1940年6月14日にパリへと入城した。9月27日に日独伊三国軍事同盟締結。いよいよ開戦へと進み始めた。

それと同時に高野と大高は決起の日付を昭和16年12月1日に決定した。

昭和16年8月に対日石油輸出禁止。10月18日に南下政策を押し進める南條内閣を組織された。11月26日高杉英作中将指揮の航空機動部隊が択捉島、単冠湾を密かに出撃した。11月27日ハルノートを日本は受け取り驚愕した。

12月1日 御前会議

「もはや、アメリカとの交渉を打ち切る。」

「そうだ、我々はこの内容を受け入れられない。」

「開戦やむなし。」

もはや、政府をはじめとする国民感情は爆発寸前であつた。そして夜間、ついに青風会と紺碧会の決起が始まつた。

開戦への序曲迫る

月下、車団を連ねて陸軍「青風会」は陸軍省と軍令部を制圧した。これに呼応する形で海軍「紺碧会」も決起、海軍省と警視庁を制圧する。そして、二つの同盟は首相官邸にもなだれ込み内閣総理大臣である南條英機を拘束した。

直ちに帝都を含む各地に戒厳令を敷き、夜間外出禁止令を出した。

国会議事堂

「大高中将にお伺いします。声明文の中に高野長官の名前がありました。決起には海軍も参加しているんですか？」

「はい。我々の目的は暴走する軍部を抑えるためのものです。」

「それでは日米開戦は行わないと？」

「皆さん、誤解しているようですがハル・ノートは我々の受け入れられない要求を出してアメリカが挑発しているものです。むしろ、開戦したがつているのはアメリカの方だと理解していただきたい。」

大高は一呼吸をして

「では、記者諸君には今後とも絶大な協力をしていただきたい。さすれば、我々は諸君らの取材活動を妨害しないと約束します。」

「では、検閲の撤廃をなさるということですか？」

「そのとおりです。」

記者たちはこの知らせに大いに喜んだ。そして、翌朝には新聞社の発行した新聞が号外として日本全国に配られた。その後、世界中に新政府樹立を通告して、アメリカにハル・ノートの確固たる回答を通告した。

・米英蘭仏のアジア全域から撤退を確認したうえでハル・ノートを受諾する。なお、回答期限は日本時間12月7日午前0時までとする。

これを見た米国大統領、ヘンリー・ルーズベルトは

「この大高とは一体何者だ？」

「クーデターの首謀者でして、我々には全くの未知の人間です。」

「しかし、この大高という人物はうまくハル・ノートを投げ返して来ましたね。」

「我々としては予想外です。まさか日本にこれだけのことをできる人物が居たなんて想像していませんでした。」

「とにかく、日本への回答は無視だ。念のため、各方面の司令官には伝えておけ。」

そして、日本時間12月6日 午後7時

そのころワシントンでは日本大使が記者会見にて日本政府の声明文を読み始めた。

「開戦まであと数時間になりました。我が帝國は数世紀に渡る世界の非白人民族の悲惨な惨状を大いに憂い、我等日本民族は全世界の非白人民族解放の為にここに開戦を決意しました。」

このビッグニュースはアメリカのみならず、全世界にまで普及していった。

「何てことだ！。大使発表と同文の声明文が南米各地に届いている。」

ルーズベルトは焦った表情で情報部の持ってきた書類を見る。

「それだけではありません。インドやフィリピン、アフリカ、中東各地にも発信されています。」

「手をこまねいていますと、世界中に民族独立の火の手が上がりま

すぞ。」

ルーズベルトの側近たちは慌ててルーズベルトに訴えるが、ルーズベルトは無視したまま

「これでは、日本が正義の味方で、我々が悪者にされてしまう。」

そのとおりである。

そのころ、高杉航空機動部隊はハワイ北方230海里に到達して、攻撃隊発艦準備に入っていた。

開戦への序曲迫る（後書き）

感想はここで書いても構いませんし、直接メールで送ってくれても構いません。

ハワイ諸島を占領せよ（前編）

高杉航空機動部隊は予定通り攻撃隊発艦準備に入っている。

「戦務参謀、予定通り進んでおるか？」

「はい。もうじき攻撃隊が飛びたてるでしょう。」

高杉航空機動部隊旗艦の比叡では空母から入ってくる連絡の処理に忙しくなっていた。

「攻撃隊の準備完了とのことですよ。」

「うむ、」

―赤城―

「甲板灯付け！」

航空参謀の指示で空母の飛行甲板がライトで明るくなる。

「発動機回せ。」

甲板に並べられた航空機が一斉に発動機を回し、発艦体制に入る。

「攻撃隊、発艦始め！」

この指示を合図に各空母から第一次攻撃隊が発艦し始めた。編成は殆どが前世と同じだが、大きく違うのは攻撃隊の中に前世では無かった電子偵察機「星電」が居る事だった。そして、星電は完璧に攻撃隊をハワイオアフ島まで誘導することができた。

オアフ島の山岳地帯を抜けて制空隊と爆撃隊がホイラー飛行場を視認する。それと同時に制空隊は発光弾を上げて目標を見えやすくして攻撃に移った。

ダダダダダ、ゼロ戦の20mm機銃が地上に駐機されている航空機や逃げ惑う兵士を容赦なく倒していき、一部の兵士は地上で応戦しようとするが、空を高速で動く目標に対して小銃程度の兵器では役に立たない。結果、ホイラー飛行場の稼動機は殆ど残らず、残っているのも戦闘に支障なく参加できる機体はなくなっていた。

同じ頃 ヒツカム飛行場も空襲を受けて稼動機がいなくなる

「やはり敵艦はおらんか？」

パールハーバー海軍基地の上空を飛ぶ97式艦功のパイロットはここまで来たのに目標がない為がっかりする。

「機長、ドック内に入渠中の大型艦1。」

「了解。」

パイロットは機体を海面スレスレまで降下して魚雷を投下する。魚雷は目標に直撃しなかったが、修理用の台座から崩れ落ち、竜骨が折れて船体が支えを失い崩れ去る。

第二次攻撃隊も予定通り突入して、オアフ島の軍事施設は殆どが使用不可能になった。ただ一箇所、燃料集積基地を除いて

その頃、キンメル太平洋艦隊司令長官は日本の南方輸送を阻害すべく、レインボー五号計画に沿ってマリアナ沖方面を目指して艦隊を進めていた。だが、突然参謀からの報告に驚きを表す。

「何！。ハワイが日本軍に爆撃されただ！？」

「はい。港湾施設、飛行場もやられていて復旧は現在の備蓄資源だけでは足りません。」

「それで、敵の位置は？」

「はっ、まだ正確な場所は分かりませんがオアフ島の1000km以内に居る筈です。」

「長官。敵の艦載機は出計らっています。反撃するなら今しかありません。反転して敵を追撃すべきです。」

「……いや、ハルゼーと合流してからでも遅くはない。」

キンメルは電話を掴んで、オアフ島の西にいるハルゼー機動部隊に連絡を入れた。

「ハルゼー、ハワイが航空攻撃をされた。我々はこのまま任務を続行すべきなのか？」

「何を馬鹿なことを言っている！？あんたは直ちに引き返して反撃すべきだ。」

何時になくハルゼーはお怒り気味です。

「分かった。帰等中のレキシントンと合流しだい帰等する。」

「まだそんな事を言っているのか！？日本艦隊を洋上で撃滅するチャンスではないか。黄色猿共に太平洋の潮水をたらふく飲ませてやる。」

「待て、我々が合流するまで待てんのか？」

「そんなものを待って・・・ちょっと待ってくれ、今私の偵察隊が敵機と接敵したらしい。」

「それで落としたんだろうな？」

「いや、恐ろしく足が速いらしく北西に逃げた。」

「北西に？」

「ああ、だがこれであんたより私のほうにツキがあるらしい。獲物は私の隊の方が近いらしいから、カウアイ海峡を抜けて敵を追撃する。」

「待て！。見込みで追撃するつもりか！？合流するまで待てんのか？」

「航空戦、いや、勝負はどっちが先に見つけるか。賭けてみるさ。」

そう言ってハルゼーは電話を切った。一方的に切られたキンメルは直ちにオアフ島方面に偵察機を飛ばし、自身の艦隊も反転させた。だが、この二人の長電話は「星電」が傍受していて、2機以上の三角測定で両艦隊の居場所が突き止められた。

「母艦および旗艦に打電『我、機動部隊および主力部隊を発見。』」

完璧に両艦隊の居場所が分かった高杉は

「前原潜水戦隊に位置を知らせて攻撃させよ。」

この指令を受けた前原は直ちに僚艦4隻を率いて機動部隊に向かった。同時刻に高杉艦隊からも攻撃隊が飛び立った。

「よし、エィタープライズ視認。雷撃準備」

前原の潜水戦隊は機動部隊を発見して雷撃準備に入った。その頃エィタープライズでは偵察機の発艦体制に入っていた。

「何？陸軍の馬鹿共がか？構わん。味方だろうと敵だろうと我々を攻撃するものは皆敵だ！。容赦なく爆弾を叩きつけろ！」

自分の偵察隊をオアフ島の対空陣地に撃ち落されてハルゼーは怒り狂っている。それが、思わぬ油断に繋がっているとも知らないで。

「魚雷発射！」

前原の乗艦は前部魚雷を一斉に放った。そして、エィタープライズ

の右舷に命中した。

「何事だ？」

「雷撃です。」

突然の出来事にハルゼーは動揺する。だが、甲板が火災に包まれていき、もはや発艦は不可能になっていた。ハルゼーは何とか艦橋を出れたが、艦の至る所で火災が発生しており脱出はできなかった。程なくしてエンタープライズは大爆発と共に1人の生存者も残さずに沈んだ。

「ハルゼーが戦死した！？」

キンメルは持っていたコーヒーの入ったカップを床に落として驚いた。

「はい。連絡ではエンタープライズと運命を共にしたそうです。後、残存艦隊も日本の航空攻撃で戦闘不能な程戦力を消耗しました。」

「ハルゼーがか？」

キンメルは今だに驚いているが

「長官、大変です！ミッドウェー沖にて空母「レキシントン」が爆沈との報告を受けました。」

「何？どういうことだ？」

「詳細は分かりませんが、潜水艦からと思われる雷撃を受けて船体が三つに折れ曲がったの轟沈だそうです。」

「しっ、信じられん。我が合衆国最大の航空母艦が船体を三つに折れるなんて、そんなことがあってよいのか？」

「敵は我々の知らない新兵器を保有しているのでは？」

「くだらない妄想はやめたまえ。」

キンメルは怒った表情で言うが、内心は同意していた。だが、司令官たるもの部下に余計な動揺を与えないように努めて厳しい表情になる。

「だが、我々はこれで相手に砲撃戦を挑む以外に選択肢はなくなつた。これより敵を索敵し、発見しだい我々、太平洋艦隊の誇る戦艦部隊が敵を撃滅する。」

こうして両国の艦隊がぶつかり合う決戦が幕を開けた。だが、このときハワイを目指して航海を続ける複数の艦隊が存在した。

ハワイ諸島を占領せよ（後編）

キンメル太平洋艦隊が高杉航空機動部隊の攻撃を決定したとき、高杉航空機動部隊は「赤城」を除く空母を駆逐艦の護衛の下で西に離脱した。

「敵は誘いに乗ってきますかね？」

「乗ってこなければ困る。その為に空母を離脱させたのだから。尤も、空母を引き離したのは艦隊決戦の被害を受けない為だが。」

しばらく会話をしていると、通信参謀が艦橋に入って来て

「指令、星電から敵が輪形陣を組んでハワイ諸島に向かっているとのことです。」

「来ましたね。」

「よし、敵をこちらに誘導する。ハワイに針路をとれ。」

高杉艦隊はハワイ・オアフ島に向けて転舵をする。その頃、キンメル艦隊の水上偵察機が高杉艦隊を捉えた

「敵艦隊発見！。戦艦2、空母1、巡洋艦3、駆逐艦2、以上です。」

キンメル艦隊旗艦 ウェスト・バージニア

「敵は戦艦が僅か2隻だけです。我々8隻の戦艦で立ち向かえば撃

沈も可能です。」

「長官。ハワイの敵を取りましょう。」

「確かに艦隊決戦に持ち込めば負けるはずが無いが。……よし、カウアイ海峡に進出して敵を迎え撃つ！」

参謀らの言うとおりキンメル艦隊には戦艦8隻の他に巡洋艦8隻に駆逐艦とその他小艦艇を合わせると85隻にも上る。性能は兎も角、数だけで見るなら正しく太平洋の王者に名の恥じない艦隊編成である。

しかし、高杉艦隊とは別の艦隊がハワイ諸島を目指して驀進してきている事は彼らには知る由もなかった。

高杉艦隊旗艦 比叡

「航海参謀、速力はこのままでよいのか？ 時間あわせがこの作戦の重要な要だぞ。」

「概ね28ノットまで落としましょう。そうすれば丁度良いかと。」

ハワイ諸島のオアフ島とカウアイ島の間をカウアイ海峡と呼ばれており、長い海峡から艦隊を展開させても何の支障も無い事から太平洋艦隊の洋上訓練もよくこの海峡で行われている。この海峡で歴史上稀に見る艦隊決戦が行われようとしていた。

「敵艦隊発見！」

最初に日本の艦隊が太平洋艦隊を見つけて

「各艦艇、戦艦以外の敵艦艇を攻撃せよ。いいか、絶対に戦艦には当てるな！」

高杉のこの命令の真意は後ほど判明する。

最初に先頭に行く重巡洋艦に命中弾があり、重巡洋艦は何の抵抗もできずに海中に沈んだ。これを合図にキンメル艦隊も砲撃を開始した。だが、日本艦隊は一旦引いていて命中弾は無く、キンメル艦隊が体制を立て直そうとすると近づいて来て砲撃をするのであった。これにはキンメルも対応できなくなり、組織立った反撃は行えずに逢えなく沈み行く艦艇を見ることができなかった。

「何故だ？連中は何故主力艦である戦艦を狙わないんだ？」

キンメルが気づいたときには、既に砲弾を撃ち尽くして無念に浮かんでいる戦艦8隻だけであった。あれほどの艦艇を日本艦隊は僅か4時間で全滅させており、驚くべきことに損害艦は1隻も無い状態であった。

「分かりませんが、我々は護衛艦を全て失い、今では相手の駆逐艦にすら沈められる状態です。」

「降伏しろと言うのか？私が日本軍にか？嫌だ！、私は降伏など絶対に認めない。」

「しかし、我々は丸裸です。反撃など行えません。」

「提督、闇に紛れて離脱しましょう。」

「確かに再起を期すのも一つの手だが。」

「だが、私は嫌だ。合衆国軍人の栄光を汚してはならん。全艦突撃しろ！」

だが、その時オクラホマが突然、砲撃を受けて轟沈した。

「ああ、オクラホマが。一体何が起きたんだ？」

「提督、日本艦隊の後方を。」

日本艦隊の後方には巨大な戦艦が進んできた。それは総排水量15万トンを誇る世界最大の戦艦であり、皇道の艦隊旗艦の「神武」であった。日本書紀に登場する初代天皇の名を受け継ぐその戦艦は正に日本の象徴であり誇りであった。

「なんていう巨大な戦艦なんだ。あんな物を日本人が。」

高杉航空機動部隊旗艦 比叡

「高杉さん、遅くなりましたかな？」

「いえいえ、佐藤さん。時間丁度でしたよ。」

皇道の艦隊司令官 佐藤 佳樹元帥は紺碧会に所属しており前世では戦艦金剛と運命を共にした人物であり（もちろん架空の話）後世日本で初めに高野と接触した人物である。

キンメル艦隊はその後逃げられないと判断して降伏旗を上げ降伏した。

それと同時に坂本龍馬中将指揮の戦艦部隊が上陸部隊を引き連れて到着し、ハワイに残っている僅かな戦力を完全に排除して、ハワイ諸島全域を占領した。

時に1941年 12月11日のことである。

ニューヨーク砲撃作戦

1941年12月12日

占領早々のハワイから4隻の雷装砲撃潜水艦が出撃した。

「艦長。ハワイから入電『貴艦隊はニューヨークへと進出、自由の女神とロングアイランド、エンパイア・ステート・ビルを砲撃せよ』との事です。」

「全く、警戒嚴重の中をニューヨークまで進出するとはかなり難しいぞ。」

「しかし、我々には新式の推進機関があります。スクリー音が無いので探知はされないと思います。」

「だからと言って絶対安全では無いだろう？まあ、確かに探知はされないだろうけど。」

12月18日ホーン岬を回り太平洋へと入った。本来はパナマ運河を入れて進むほうが近いのだが、アメリカと交戦状態の為にそうもいかない。

「艦長、敵駆逐艦が接近しています。どうしましょう？」

「ここに居る事を知られてはならないからな。攻撃はするな。」

「了解。敵駆逐艦の真下を抜けます。」

4隻の潜水艦は敵の、しかも天敵である駆逐艦の真下を探知されること無く通過した。

「艦長。これでは我々は無事に着いたも当然ですね。」

「分からんぞ。ニューヨークを攻撃することは1日前にアメリカに通達するのだから。」

「えっ、何故そんなことを。」

軍が攻撃目標をわざわざ相手に知らせるのは前代未聞であり、そんなことをする意味も無い

「我々は戦争をしている。そして、戦争にも確りとしたルールがある。我々は無警告で一般市民を殺さない。それは本戦争で我々が守るべき最低限のルールだ。」

「分かりました。あくまでも一般市民を殺さない。了解です」

前世大戦でもアメリカ軍は初めは軍事施設を狙った爆撃だったが、司令官が変わり、民間住宅等の爆撃を行うように変わっていった。これが太平洋戦争で民間人が大勢亡くなった原因でもある。

12月21日

順調に4隻の潜水艦はバミューダ海域に侵入する。

「艦長。敵の空母、恐らくレンジャー級が接近しています。」

「仕方が無い。空母なら話は別だ。魚雷装填！」

艦長の命令で先頭に行く「伊201」魚雷を装填する

「魚雷発射深度良し、準備完了です。」

「発射！」

放たれた八本の魚雷はその内の四本がレンジャーの左舷に直撃した。排水量が少なく、防御の薄いレンジャーは一瞬にして爆発、炎上をして船体を大西洋に沈み始めた。

「レンジャー沈没！」

「よし、このままの針路で向かえ。」

レンジャーを沈めた「伊201」は何事も無かったかのようにニューヨーク目指して進んだ。

その頃 ワシントンD.C ホワイトハウス

「大統領。大変です！日本軍がニューヨークへの攻撃を宣言しました。」

「何だと！。一体どうやってハワイからニューヨークを狙えると言うんだ？」

「分かりませんが砲撃をすると宣言しています。」

「大統領、至急ニューヨークに避難勧告を出すべきです。」

「ならん。もしニューヨークを攻撃してみる。これを種に民間人を攻撃したとして国民は奴等への憎悪に燃えてくれる。そうすれば、私は次の選挙でも勝てるのだ。」

正しく自分勝手な大統領である。自らの保身の為なら国民さえも犠牲にするという。しかし、日本軍はそれを読んで、ニューヨークの官庁舎へも同文の宣言を出していた。

これを受け、ニューヨーク知事のハーバート・レーマンは直ちにニューヨークからの避難勧告を出した。大統領も思惑が外れて海軍の艦隊をニューヨークに派遣する。

12月23日

潜水艦はニューヨークへと潜入に成功した。そして、リバティアーランドに近づき

「艦長。自由の女神を射程に捉えました。」

「よし、メン・イン・タンクブロー」

潜水艦から空気が漏れ出し、海面に浮上した。

「主砲弾込め。」

後部に装備されている30cmの主砲が自由の女神に向けられ、前部に装備している主砲は周辺警戒を行う。

「全艦一斉射撃！」

4隻の潜水艦の連装30cm主砲は一斉に放たれて、自由の女神の中央部に命中して崩壊した。

「『伊203』と『伊204』はエンパイア・ステート。ビルを、『伊202』は本艦と共にロングアイランドを砲撃する」

艦隊は分かれて別々の目標を目指して移動を始める

「ロングアイランド視認、砲撃始め！」

2隻の潜水艦の砲撃がロングアイランドを襲い、避難を拒否していたアメリカ人共々吹き飛ばした。

「攻撃成功。帰還の任に就く。」

「僚艦から入電『我、ビルに砲撃を行う。崩壊を確認。』だそうです。」

こうして、アメリカ人の油断をついた奇襲作戦は完全に成功する。だが、この時よりもさらに過酷な任務がこの後待っていることを彼らは知らなかった。

ニューヨーク砲撃作戦（後書き）

ニューヨークの護衛が少ないことも気になりますが、あまり沈めすぎると後で困るので申し訳ありません。

ご意見、ご感想をお待ちしています。

パナマ運河完全封鎖作戦

一帝都 東京一 大高の自宅

「ニューヨーク砲撃作戦は完全に成功したといえます。アメリカ国民は知っていながら攻撃を防げなかった政府を非難を浴び続けます。」

「やはり本土攻撃は効果がありましたか。」

史実の日本潜水戦隊はアメリカ本土を砲撃したり、水上機による本土空襲を成功させており、これはアメリカ国民の戦意を挫く結果に終わっている。ただ、この攻撃が当時の大統領のフランクリン・デラノ・ルーズベルトが造った日系人の強制収容所を各州に容認させる結果になってしまったが。

「それに前世大戦での大本営発表は酷いものでしたしな」

「はい。ミッドウェーでの結果も相手の空母2隻を沈め、我が方は1隻沈没という捏造戦果を国民に発表しましたからな。」

「それに高野さんは知らないだろうが、台湾沖航空戦での我がほうの戦果は空母11隻撃沈というとてもない戦果発表を行っておりまして、これにはさすがに参りました。」

実際に台湾沖航空戦は発生しているが、アメリカ艦隊は1隻も沈没していなかった。ただ、これは前線の兵の戦果報告や司令部の戦果判断にも問題があり、必ずしも大本営の発表が悪いとはいえない。でも、確認を取れていない戦果報告を行う意味では軍令部に問題が

ある。

「あとは、計画通りパナマ運河を完全に封鎖するだけです。」

「完全って、全ての閘門を壊すということですか？」

「はい。3つの閘門を破壊すれば、いくら工業大国のアメリカでも復旧には1年近く掛かると思います。」

「では、いよいよ本命の通商破壊戦に立ち返ったわけですね。」

「はい。我々は前世にて潜水艦の使い方を誤りました。Uボートの例があるにも関わらず、戦艦ばかりを狙い、駆逐艦への警戒を疎かにして撃沈されています。」

ドイツはカール・デーニッツの群狼作戦で戦果を上げているが、戦艦を狙った潜水艦はたちまち駆逐艦に撃沈される事が起きており、日本はさらに酷く、艦隊決戦にも運用していて、撃沈される潜水艦がいた。

「ところで、拿捕したキンメル艦隊の戦艦の改装は進んでいますか？」

「はい。目下機関を換装して速力を上げることに重点を置き、水上爆撃機等の大型機の運用を出来るように改装させており、恐らく半年位で終わると思います。そしてこの艦隊を基幹とする紅玉艦隊を編成したいと思います。」

「紅玉艦隊ですか！」

「はい。これでインド洋を制圧する予定であります。」

高野と大高は酒を飲みながら話を続ける。

「この艦隊でインド洋を制圧してアフリカ沿岸等への移動も行う予定でして、既に司令長官も決定しています。」

「ですが、先ずはパナマ運河を封鎖しないことには始まりませんね。」

「それについては心配ありません。恐らく、前原ならやってくれるでしょう。」

一昭和17年 1月1日ー パナマ沖

潜望鏡を覗く紺碧の艦隊司令の前原一征少将が上り行く朝日を見ていて

（南太平洋で見る初日の出も美しい。）

潜望鏡から目を離して素直な感想を心の中でつぶやく

「艦長。そろそろ目標海域に到達する。準備を急がしてくれ。」

「はい。既にニューヨーク砲撃艦隊は準備を終えて出撃命令を待っています。」

先の作戦で任務を行った紺碧の艦隊砲撃戦隊は大西洋方面にて前原

の出撃命令を待つて海面に鎮座していた。

30分後

「目標海域に到達しました。各艦艇浮上を開始。」

紺碧の艦隊は海面に浮上を終えて

「格納庫。ハッチ開け！」

前部にある格納庫には旗艦である富嶽号には雷洋らいようを2機、水神号
快竜号 爽海号には春嵐はるあらし（OVA版ではしゅんらん）が3機、乙姫
号には星電の水上機版の星電改が2機搭載されている。

ちなみにニューヨーク砲撃艦隊は旗艦である清竜号せいりゅうには雷洋が3機、
神竜号 空竜号には草連そうれん（水上爆撃機）が3機、雷竜号には星電改
が2機と草連が1機搭載されている。

総大将は富嶽航空隊の大竹馬太朗大尉（正確には特務大尉）が指揮
するパナマ運河攻撃隊が出撃準備に入る。

その頃、大西洋に居る紺碧の艦隊も前原から命令で出撃準備を始めた。

「発動機回せー！」

整備員の言葉に雷洋1番機の発動機が回り始める。

「主翼展開良し。」

しばらく機体の発動機を回したところで機体がカタパルトで射出された。続き2番機も射出され、上空にて編隊を組み、星電改に誘導されながら目的地に向かった。

—ガトウ— 閘門 —

「目標を視認。全機攻撃態勢！」

閘門上空に達した清竜攻撃隊は僚機と共にそれぞれの目標目指して攻撃を開始した。

「ジャップの航空機が飛んでいるぞ！」

パナマ守備隊は突然の来襲に驚き、大混乱に陥った。

「くそ、撃ち落してやる。」

水兵の一人が機銃に着いて発射しようとするが、

「待て！、これは演習かもしれん。確認するまで撃つな！」

だが、次の瞬間には近くに爆弾が落ちて二人は吹き飛ばされた。

「早いところ片付けよう。」

雷洋3機の内2機は編隊を組んで閘門の反対側へと周り、旋回して運河を目指した。

「魚雷投下準備良し。……………投下！」

雷洋から放たれた1本の魚雷は閘門に直撃する。暫くして反対の閘門にも命中するが、反応が無い

「失敗か？」

だが、亀裂が走る音が少し聞こえたかと思うと、水が勢い良く流れ出し、閘門を破壊した。

ーペドロ・ミゲル閘門　ミラ・フロレス閘門ー

「春嵐の攻撃成功！後は魚雷で止めをさすだけです。」

「よし。一気に決めるぞ。」

既にペドロ・ミゲル閘門は爆撃で破壊できっており、残すのはミラ・フロレス閘門だけである。

「投下！」

此方も破壊に成功して、帰還任務に就いた。

ーアメリカ合衆国　首都　ワシントンD・C．　ホワイトハウスー

「何！？、どういふことなのだそれは？」

ルーズベルトはパナマ守備隊司令部からの報告に驚愕した

「何故敵は航空攻撃が出来るのだ？ ハワイから届くはずが無いだろう。」

「しかし、敵はフロートをつけていまして、水上機かと思われます。」

「なお更だ。なぜ航続距離の短い水上機で航空攻撃が出来る？」

「それが、付近には潜水艦らしき艦影を見たという輸送船がおりまして、その潜水艦から発進したのかと」

「潜水空母だとしても言うのか？ そんな高度な潜水艦が我々に劣る日本人に出来るはずがない。」

「しかし、」

「とにかく、復旧にはどの位掛かるというのだ？」

「はい。およそ1年位は使用不能かと。なにせ3閘門全て破壊されました。」

「復旧を急がせろ！」

そう言ってルーズベルトは電話を切った。それと同時に机の上にある日本の書類を全て床にぶち撒いた。

「黄色猿めが！。絶対にこの借りを返してやる。」

このパナマ運河破壊はアメリカの新聞社が先のニューヨーク砲撃と合わせて大々的に載せ、アメリカ国民は次はロサンゼルスが攻撃されるや、再びニューヨークが砲撃される等の噂が一人歩きしていき、厭戦気分になっていった。

蒼葉よ、帝都を守れ

―ハワイ オアフ島― 日本海軍ハワイ方面司令部

「佐藤さん。パナマ運河閉鎖は完全に成功しており、アメリカの艦艇は現在南周りで太平洋入りをしています。」

「今、太平洋に主力艦が居ないのは閣下の作戦のおかげですよ。」

「いえいえ、あれは佐藤さんが時間通りに到着してくれたおかげです。」

「時間には煩い者でして。」

「それで、高野長官から一度内地へと帰還してほしいそうです。もうじき2式大艇が到着しますので、それでミッドウェー経由で帝都へと向かってください。」

ミッドウェーは皇道の艦隊第二艦隊によって敵を殲滅されており、現在は日本軍が補給基地を築いている。

昼過ぎに2式大艇が到着して、佐藤元帥はそれに乗り、ミッドウェー経由で帝都へと向かった。

―2式大艇― 機内

「元帥閣下、あと2時間程で横須賀へと到着します。」

「分かった。安全飛行で行ってくれよ。これでも飛行機に酔い易いんだ。」

（それにしても、アメリカで厭戦気分が広まってくれたことは感謝だな。いくら大国アメリカと言えど、国民の支持なしに国は成り立たない。このままいけば早期講和への道が開けるな。だが、高野長官が言うには、アメリカには影の政府があり、これが大国アメリカを動かしている。これを何とかしなければ講和など望めないか。）

「弱ったな。」

佐藤はただ一人そう呟いた。

—アメリカ合衆国　ワシントンD・C—　ホワイトハウス

「マンハッタン計画はどうなっておるんだ!？」

「はい大統領。順調に進んでおります。」

「その返事はもう聞き飽きた。いい加減に成果は出ないのか？」

ルーズベルトは度重なる日本軍の作戦を止められずにいるうえに、なかなか研究の成果が出ないことにかなりの怒りを示す。

「はっ、申し訳ありません。しかし、例の高高度重爆撃機は完成しました。既に各航空会社に量産態勢を確立しており、すでに30機が中国に作戦機として投入しております。」

「おお！ついにXB—30が完成したのか。」

XB-30とは前世で言うB-29の事である

「はい。これでかねてからの作戦行動に入る事ができます。」

ルーズベルトの怒りは収まり、さらによい知らせが入る

「それに6万トン級の超航空母艦も2隻と新鋭戦艦2隻を基幹とする北太平洋艦隊も作戦行動に入っております。」

北太平洋艦隊とはアリユシャン列島の防衛を任されている艦隊だが、主力の太平洋艦隊が壊滅させられており、現在はこの艦隊が太平洋での主力艦隊である。ちなみに、母港はアリユシャン列島のダッチハーバーである。

「これで我々が勝利すれば、国民の厭戦気分は一気に吹っ飛び、我々を支持するものが増えるでしょう。」

度重なる損害にアメリカ国民は厭戦気分が広まっており、予算としても軍事関係の予算が獲得し難くなっている、軍事的にも不利益が続いてなかなか反撃に出る事が出来なくなっており、ここでの作戦を成功させて国民の支持を得ようと大統領を含む閣僚は考えていた。

「そうあってほしいものだ。ところで、その艦隊の指揮官は誰かね？」

「ロナルド・ダック・リーガン提督ですが。」

「あの男か・・・氣にくわない奴だが、この際仕方が無い。マンハッタン計画の完成も急がせろ。」

マンハッタン計画とは原子爆弾開発計画の事であり、史実でのドイツの開発、イギリスの開発情報を知り、急遽計画された開発計画である。なお、およそ20億ドル（当時の日本円で86億円、現在で1391兆6434億円）という莫大な資金と高レベルの開発環境を与えられたアメリカだけが戦争中に開発が成功している。

一帝都 東京ー 千代田区内幸町 帝国ホテル

「はい佐藤ですが。高野長官ですね？・・・・・・はい分かりました。幽霊と合流後に日比谷の公園で待っています。」

佐藤はホテルのロビーで幽霊事 とみたけ 富嶽 たろう 太郎（前原一征の国内での呼び名）と合流して日比谷公園で待っていた。

「佐藤さん富嶽さん。お待ちせして申し訳ない。総長はあちらでお待ちです。」

日向中佐が二人を迎えに来て、総長の乗る車まで案内された

「今日はいいい日だ。大きな戦争が起こっている事を忘れさせられるよ。」

「ははは、前世とは違ってあんな無意味な防空演習を行っていないからでしょう。」

「確かにな。ただ、本土防空は重大な課題だ。竹槍なんかでは低速の民間機でも落とせないからな。」

「私も前世でB-29の爆撃を経験して日本が近代戦を竹槍思想で戦っていたなんて驚きです。」

「そういえば、今日は前世にて帝都を含む日本本土初空襲のあった日か。」

そう。現在は昭和17年4月18日、前世の昭和17年4月18日はドーリトル中佐指揮のB-25で編成された爆撃部隊が日本を世界で初めて爆撃した日である。帝都には1機たりとも侵入させないと言っていた軍部の面子は丸つぶれを喰らい、山本五十六は真珠湾で逃がした米空母を撃滅すべくミッドウェー作戦を計画。結果日本、いや、世界最強の空母機動部隊を失い結果に終わった。

—泰山航空工業—

「東野社長。我々の艦隊に配備予定の艦載機は完成しましたか？」

「確かに完成しましたが佐藤さん。今日はその用件ではないでしょう？」

「はは、そうでしたね。我が国を守る防空戦闘機を見に来ましたね。」

「ええ、これがその機体です。」

近くに黒いシートに隠された機体があり、それを社長が取り除いた。

「おお、これが蒼菜か！」

姿を見せたのは、エンテ型（前進翼機のこと）という当時としては奇怪な機体がそこにあった。

「前世では高高度を飛ぶB-29に有効な打撃を与える事が出来なかった。その悔しさを胸にわが社が総力を挙げて生産に励んでおり、他にも中島飛行機と九州飛行機がライセンス生産にを行っております。」

「すばらしいな。この機体はどのくらいの性能を持っているんだ？」

「はい。15分程で成層圏まで上がります。大出力の排気タービン過給機は東武梅発動機を搭載して、リーダーも搭載した為全天候での迎撃が可能です。おまけに武装は57ミリ砲を機首に搭載されており、厚い装甲を持つ爆撃機でも簡単に撃墜可能です。」

「これならどんな機体で来ようとお帰り願えるって訳ですね。」

佐藤の冗談に皆が笑う

「だが、あながち冗談でもないでしょう。ただ、いくら総力を挙げると言っても予算が無い為なかなか大量生産は出来ません。」

「それについては今日の会議で何とかします。」

一軍令部一

「我が国は北東から南東へと伸びる島国であり、この長い島国を防御するのは容易な事ではない。一応は前世に習って少なからずの民

間船舶を徴用して海上、空の警戒に当たらせているが、それにも限界がある。そのため、早急なるレーダーの配備と防空戦闘機の生産に入る必要がある。」

会議は前世と違い、白熱した意見のぶつかり相だった。その理由は前世では精神論を言う者がおり、やたらとこの精神論に頼って結果が出せない事が多々あった。会議の内容はさらにダッチハーバーで発見された敵機動部隊の対応へと変わっていった。

「情報部では敵の司令長官が判明しております。」

「ほー、一体誰かね？」

「は、ロナルド・リーガン少将だそうです。」

「どういう人物かは不明ですが。かなりの戦略家との情報があります。」

（用心しなくては、前世のミッドウェーなど御免だ。）

高野がそう思ったその時

ウウウウウウウ

「空襲警報！」

「ばかな！誤報ではないのか？」

（やはり来たか。）

直ちに侵入機を迎撃すべく、迎撃の為の零戦が飛び立ったとの報告を受ける。

「敵の発進基地は麗水リーシュイのようです。」

（逆コースから来たか）

麗水とは中国の中部海岸側の折江省せつこうの中の一つの市である

「敵は北九州工業地帯を爆撃し、半分は列島に沿ってこちらに向かって来ます。」

北九州工業地帯は鉄鋼業が主に盛んな工業地帯である。（当時）

「それなら理屈が通る。陸軍にも応援を頼んで迎撃させろ。」

「総長。敵は新型爆撃機で、此方が近づくと12000まで上昇して寄せ付けないそうです。」

「！。迎撃に上がったのはゼロ戦か？」

「はい。」

（まさかB-29。なるほど、兵器の進歩の速さは日本だけではなかったか）

すぐに高野は軍令部の自室にて大高に連絡を入れる

「侵入機はB-30という事ですか？」

「はい。それに帝都空襲もありえます。」

「なんとしても阻止してほしい。もし皇居なんかには爆弾が落ちたら、陸軍の強硬派が息を吹き返すかもしれない。」

「ご心配なく。我に蒼菜あり。」

迎撃命令を受けて、土浦から首都防空飛行団が蒼菜に乗って上昇を始めた

「敵が見えてきましたね。」

いつの間にか高野の隣に佐藤が居た

「閣下、どうしてここに？」

「あなたこそ退避しなくていいんですか？」

「私は大丈夫だ。それよりも君が退避すべきではないのか？」

「ははは、もしアメリカが原子爆弾を完成させているのなら、どこに隠れても無駄ですよ。」

「確かに。それに私は信じている。蒼菜の力を」

「高度13000。各機、水平飛行に入り、機関砲の試射を行え。」
隊長の命令で各機が試射を行った。

「全機異常なし。」

「左に敵編隊確認。」

米爆撃隊が編隊を組んで帝都を目指して飛行しているのを発見し

「行くぞ！。日ごろの猛訓練の成果を見せてやれ。」

蒼葉は機体を急降下させて爆撃機に迎撃態勢をとる

「機長、上空に敵機がいます。」

「何を寝ぼけている。こんな所に戦闘機が・・・！、ノー、日本^{ジャップ}の新型機だ」

直ぐに副操縦士が確認をするが、既に機関砲の発射は行われていた。
ガガガガ、直ぐに別の機が発射して爆撃機を八つ裂きにする。

「助けくれ。死にたかない！」

次々と爆撃機が撃墜されていく、

「編隊を組みなおせ。離脱するぞ。」

爆撃隊は反転し始めるが、鈍足な爆撃機が戦闘機から逃れられるわ

けが無く。全機が撃墜された。

「どうやら、米国はまだ原爆を完成させていないようですね。」

「ああ、とりあえず帝都への爆撃は阻止できてよかった。」

この高高度迎撃は成功を収め、蒼菜の大量生産が決まった。それと同時に、陸軍と海軍陸戦隊が麗水飛行場を襲撃し、これを占拠した。

蒼葉よ、帝都を守れ（後書き）

少し、アメリカの現地視察に行く為、次回は金曜日になると思います。

リーガン提督と高杉、佐藤提督（前書き）

視察に行ってきた資料が思ったよりも早く完成した為、投稿しました。

リーガン提督と高杉、佐藤提督

一帝都 東京一 軍令部 合同作戦会議室

日本初空襲から2日後の4月20日に大高を含む陸海軍軍令部所属将官は合同会議を行っていた。

「我が帝國は前世と違い、領土は必要としない。ただ資源だけである。その資源の安全な運搬の為に東、南シナ海の海上交通網の確保である。そして、その一番の障害は、ここにあるフィリピンである。」

大高は地図からフィリピンを指して言う。

「現在そこは、我が皇道の艦隊第4艦隊と坂本艦隊が進出しており、いつでもフィリピンを攻撃できます。」

「我々陸軍は中国大陆から撤退した第3個師団を投入できます。海軍の航空支援を約束してくださるなら、我々陸軍が敵を全滅させましょう。」

「それはいいが、あくまでも独立をさせて資源を援助させるだけに留めて下さい。前世のような軍政を引かず、独立させ次第、撤退させる方針でお願いします。」

「うむ、それと海軍の船団護衛の方は？」

「は、航空支援は蒼葉が増産されれば十分ですし、各艦隊は対空武装強化、並びに高性能なレーダーを搭載が完了しており、護衛の方

は十分かと思ひます。」

「分かりました。それでは、各方面で敵の侵入を許さぬよう十分な警戒を行うように。」

大高は會議を終わらせて、元總理 ここのえ 九重の自宅へと赴いた。

「公爵、お願いがあつて参りました。」

九重は大高に気づくと、その隣に居た尾方某は

「それでは公爵、私はこれで」

「ああ、尾方君。君にも関係のある話だから一緒に聞いてもらいたい。」

そして、大高總理は九重、尾方に自らの理想、仕舞いには原子爆弾の威力や日本がそれを作る技術を持っている事を言う。だが、これはコミンテルンの尾崎某への反感の計であつた。

そうとは知らずに、尾方某からソ連、そしてアメリカにも伝わった。

「そんな馬鹿な！？我々と同じ白人のドイツ人なら有り得るが、日本人に作れるはずがない。」

「閣下、彼らは恐るべき海中艦隊を保有しており、キンメル提督からの報告では巨大な戦艦を確認しています。」

「合衆国の恥の名前を口にするな。」

「しかし閣下、先日、東京空襲に向かったB-30が全機撃墜されているのです。彼らの技術力を侮ってはいけません。」

「ぬぬ、情報源の確度は高いのか？」

「モスクワが日本の中枢に潜入させたスパイからの報告です。しかも、大高総理から直接聞いたという情報です。」

「分かった。更なる情報が入り次第、私に報告してくれ。」

ルーズベルトは椅子から立ち上がって窓の所へと行く。因みに、後世のルーズベルトは前世と違い、車椅子生活を送っていなかった。

「君はこのワシントンが原爆攻撃を受けると思うか？」

「その質問は私ではなく軍のお偉いさん方に言って下さい。ただ、私は受けると思います。彼らは警戒厳重のニューヨークを砲撃して、あろう事かパナマ運河まで完全に破壊したほです。」

「長官、私は非常に不愉快だ！」

「いえ、言わせていただきます。彼らは日米交渉で最大限の譲歩を重ねてきました。だが、あなたは挑発し、交渉をはぐらかして引き延ばした。そして、開戦の準備が整うとハル・ノート突きつけて開戦へと引きずり込んだ。」

国務長官は一呼吸を置き

「口では正義と自由と言っておきながら、民主を唱え合衆国を良くしようとした。だが、裏で戦争を画策。あなたは二重人格者だ！！」。史上最低の汚い大統領として後世まで歴史に名を刻まれるでしょう。」

「もういい、下がれ！」

そう言うのと國務長官は話すをやめ、部屋から出て行った。そして、ルーズベルトはマンハッタン計画の責任者をホワイトハウスに呼んだ

「な、なに？ 今、簡単にと言ったか？」

「はい。率直に言ってアトミック爆弾（原子爆弾の事）はウランニウムさえあれば普通の学生でも作れます。」

「なら何故？ それを造るのに膨大な予算と時間が必要になる？」

「制御が難しいんです。下手をすると合衆国内で爆発し、消滅することさえ考えられます。」

当時は実験が行われるまで地球を消滅させる威力や小型爆弾程度の威力しかないと言った意見に分かれていた。

「それに本来原子力は人類の幸福の為に使うべきであり、決して兵器に使うものではありません。これは平和を願う科学者の良心です。」

「もうよい。下がりました。」

ルーズベルトはこの時、国内にも自分の敵が大勢居る事を知った。

その頃、日本海軍はダッチハーバーに立て籠もるリーガン艦隊を何とかする為、天元作戦を発動した。

高杉艦隊、皇道の艦隊第1、第2艦隊がハワイから出撃する。目標はサンフランシスコと偽暗号を打電。これに米国防総省は釣られて、ダッチハーバーに居るリーガン艦隊に出撃命令を下した。

皇道の艦隊第1艦隊は主に戦艦を中心とした艦隊であり、第2艦隊は主に空母と航空戦艦を中心とした航空艦隊である。

一米国 北太平洋艦隊旗艦 空母 スペリオル

（敵は本当にサンフランシスコを狙っているのだろうか？もし俺が高杉の立場ならまだサンフランシスコを狙わない。まだ、俺の艦隊が太平洋に居る時には。・・・・・・もしか、連中の狙っているのは俺の艦隊なのでは？）

さすがは1艦隊を指揮できる人間である。この時、高杉艦隊はダッチハーバーに向けて、皇道の艦隊は決戦の場であるカナダ沿岸部から西2600キロ地点に移動し、特に意味の無い無電を艦艇同士連絡しあう。

「米艦隊発見と幽霊艦隊から暗号がありました。」

「よし、まずは正解だな。引き続き交信を行え。」

佐藤元帥は大胆にも自分を囷にして作戦を成功させる計画だった。

なお、それぞれの目的

皇道の艦隊 リーガン艦隊を足止めし、ダッチハーバー攻撃成功まで持ちこたえる。

高杉艦隊 ダッチハーバー攻撃を成功させ、港湾機能を奪う

リーガン艦隊 高杉艦隊、皇道の艦隊からサンフランシスコを守る

そして、夜明けと同時に皇道の艦隊、リーガン艦隊から索敵1号機が朝焼けの空へと上り、敵艦隊を発見する為に索敵を始める。

そして、初めに発見したのはリーガン艦隊であった。

「敵艦隊発見。戦艦4隻・・・あれは？艦種不明の巨大艦が2隻、駆逐艦22隻です。」

なお、この時艦種不明艦は航空戦艦の事であり、米パイロットは見た事も無い形の為艦種が不明であった。しかも、お約束のボケまでかましてくれた。この時駆逐艦は8隻であり、重巡4隻、軽巡5隻、防空重巡5隻を戦艦との比較から駆逐艦（もしくはそれ以下の小型艦艇）に見間違えたのである。

だが、洋上の目標比較物の無い所で正確な艦種を伝える事は困難であり、決して米軍の索敵技術が低いわけではない。事実、米軍は大和と長門と一緒に航行しているところを戦艦1、巡洋艦1と報告している。

「直ちに攻撃隊を飛ばして先制攻撃を行え。」

リーガンの命令で第一次攻撃隊が空母から飛び立つ。だが、この時皇道の艦隊から飛び立った星電がリーガン艦隊を発見した。

一皇道の艦隊　総旗艦　戦艦「神武」一

「敵航空隊が飛び立ったとの報告がありました。直ちに迎撃隊を編成し、防空を開始します。」

空母から電征が、航空戦艦から龍戦が飛び立つ。龍戦とは、泰山航空工業と三菱重工業が共同開発をし、この2社に合わせて中島飛行機が生産を行っている艦上戦闘機である。

「敵編隊接近。雷撃機です。」

「よし、全機かれー!」

戦闘機が一斉に降下をして敵の上方から襲った。半分以上が落とされたが、突破した雷撃隊が待っていたものは

「全艦、対空戦闘用意良し。一斉射撃始め!」

全艦から放たれる無数の弾幕であった。雷撃隊はレーダー連動砲の前に成す術も無く撃墜される。

だが、この攻撃隊に護衛機が居なかったのは、雷撃隊が焦り、爆撃隊と離れてしまった為、戦闘機では護衛し切れなかったからである。

「敵の爆撃機と戦闘機を視認。今度は戦闘機がいるから注意せよ。」

再び空中戦が展開される。だが、落ちていくのは米軍機だけであり、日本機はまるで訓練飛行でもしているかのごとく敵機を撃墜する。

「提督。我が第一次攻撃隊が全滅しました。敵に一切の損害も与えておりません。」

「全滅だ?!? 間違いないのか?」

「はい。もうそろそろ燃料が切れる頃なのに1機を帰って来ていないことを見ると、恐らく。」

「信じられん。第二次攻撃隊の準備は?」

「既に終えており、何時でも行けます。」

「発艦始め。敵に損害を与えてくるんだ。」

第二次攻撃隊がスペリオンとヒューロンから発艦し、皇道の艦隊目指して飛行する。

「敵第二陣が接近中。」

伝令兵の報告に佐藤元帥は

「戦闘機隊を収容、新三八弾を試す時が来たな。」

「砲術長、聞こえたか？」

「はい。レーダー連動射撃用意よし。」

神武の主砲が敵編隊の方角を指す。

「各員、空を絶対に見るな！。撃――」

神武と、同型艦の安寧が同時に発射する。それは大爆発と共に航空機は破片一つ残さず消滅した。

「凄いな。これが新三八弾の威力か。」

「はい。米兵でなくてよかったです。」

その頃、高杉航空機動部隊は

「ダッチハーバー攻撃成功ですね。」

「ああ、これで北太平洋艦隊は港を失った。任務完了です。」

「航空隊の収容を急がせろ！」

だが、この時飛行場をやられる寸前に飛び立った1機のドーントレスが

「ジャップめ、好い気になるな！」

急降下に入り、空母部隊の先頭に行く赤城に爆弾を落とす。

「まずい、赤城が。」

爆弾を飛行甲板に受け、使用不能になった。

「司令、赤城が使用不能です。」

「分かっておる。それよりも残っている赤城航空隊は？」

「は、残り49機でして、他の空母では賄えません。」

「うーむ、空母の艦載機を入れ替えて補給し、なんとか飛び続ける。皇道の艦隊と合流するまで持ちこたえろ。」

―皇道の艦隊総旗艦 神武―

「高杉艦隊が空母の飛行甲板をやられて、こちらに救援を求めています。」

「こちらも一杯だ。こうなれば、敵の機動部隊に降伏を勧告して収容させよう。」

皇道の艦隊はリーガン艦隊に降伏を要求する為、接近を図った。

―リーガン艦隊旗艦 スペリオン―

「提督、ダッチハーバーがやられ、航空隊も数機の偵察機を残し全滅しました。おまけに敵艦隊がこちらに向かっております。」

「くそ、日本軍に負けるなどあってはならない事だ。神は世界の指導者とすべく我々白人を創ったのではないか？」

一種の暴言とも言うべき言葉を言うリーガンだが、内心は不安と恐怖で一杯だった。

「敵艦隊発見！。大艦隊です。」

艦橋にその言葉が聞こえ、リーガンは敵を確認する。

「敵から発光信号。『我、貴艦隊司令長官と交渉の用意あり、旗艦への乗艦を許可されたし。』です。」

「仕方が無い。乗艦を許可しろ。」

スペリオンから発光信号を受け、神武単艦で近づく。そして、内火艇でスペリオンへと佐藤元帥一人で乗艦した。

「私が皇道の艦隊司令長官、佐藤佳樹元帥である。そちらの司令長官と交渉をする為に乗艦した。」

早速、リーガン提督の待つ士官室に案内された。

「あなたがあの艦隊の司令長官ですね。私はこの艦隊の司令長官のリーガンです。」

「よろしく。」

佐藤元帥はリーガンの目の前の椅子に座り

「武人同士率直に言います。私は貴艦隊に降伏を勧告に参りました。」

「！、出来ません。我々は祖国の為に最後まで戦います。確かに搭載機を失いましたが、まだ此方には新鋭戦艦2隻がいます。」

「そうですか、では証拠をお見せする必要がありますね。」

そう言って、リーガンをデッキまで連れて行った。発光信号銃を取り出し。

「あの戦艦の乗組員に退艦命令を出してください。」

リーガンは最初は何の事か分からなかったが、もう一度言われて退艦命令を出した。

5分後、発光信号を上げた。それと同時に戦艦神武から主砲弾が放たれた。それはアパラチアに命中し、一撃で轟沈した。

「見てのとおり、我々の艦隊は貴方の艦隊を全滅させる力を持っています。優秀な乗組員を失わないためにも降伏してください。」

「これは脅迫ですか？」

「いいえ、警告です。」

「要求は？」

「ダッチハーバー攻撃部隊の空母が飛行甲板を破壊され、着艦不能です。この空母でホノルルまで送っていただきたい。」

「宜しい。我々だけで一時休戦といきましょう。」

あっさり交渉成立。その後、高杉自らが率いてスペリオンに着艦し、ハワイホノルル目指して向かった。

—スペリオン 長官室—

ここに佐藤元帥と高杉中将をリーガンが招き3人でコーヒーを飲んでいた。

（総攻撃をすれば、一瞬で我が艦隊を全滅させる事が出来たのに。我々を助けると言い、交渉してきた。こんな人とアメリカが戦っているのか。）

「リーガン提督。我々は1日でも早く戦争が終わってもらいたい。戦争をして喜ぶのは一部の特権階級の人間だけ。そんな人間の為に貴方達は命を捨てて戦っている。貴方はこの戦争を望んでいないと私は信じています。」

佐藤元帥の言葉にリーガンは静かに頷く、

（この男は嘘を言っていない。今まで日本人を不気味な民族と思っていたが、改める必要があるな。）

ほかの場所でも、先ほどまで戦ってた事が嘘のように笑いあい、話し合っていた。この戦争は誰も望んでいない。戦争はしたいのは国

のトップの人間であり、この艦隊の乗組員も戦争を望んでいなかった。

リーガン艦隊は高杉艦隊と皇道の艦隊に護衛され、一路ホノルル目指して向かった。

「リーガン提督、国防総省からお電話です。」

「はい。『リーガン、貴様気でも狂ったのか？』俺は正気だ。『だったら、そこに居る2人の提督を捕虜にするんだ！』この無能な指導者が！捕虜になっているのは俺だ！！』

そう言って電話を切ると、しばらく海を眺めていた。

豪州封鎖作戦 前編（前書き）

ここから皇道の艦隊を皇道艦隊と書きます。

豪州封鎖作戦 前編

開戦初期に日本軍はマレー、フィリピンへの上陸に成功。イギリス東洋艦隊を前世同様に航空機で撃沈。フィリピンでも日本軍の前進に障害は無く、占領に成功した。だが、前世同様マッカーサーはオーストラリアに脱出してしまった。だが、当初の作戦通り南方資源獲得には成功する。

そこで日本軍は豪州封鎖作戦を計画、豪州にいるモルガン艦隊とフレッチャー艦隊を撃滅する為の作戦を立て始めた。

その前哨戦として紺碧艦隊に潜高中伊101から105が配備され、それと同時に上陸作戦専門部隊を高野長官の命で編成されており、その部隊がサモアへと上陸し、攻略する為に出撃した。

潜水補給艦伊900型潜水輸送艦に乗艦した上陸部隊は紺碧艦隊護衛の下でサモアへと目指して行き、この間タラワ島周辺にいる米潜を探知すべく、水艇が対潜哨戒を行っている。

後世では高性能対潜ソナーの開発に成功しており、これを搭載した専用の対潜哨戒機 仙空^{せんくう}の生産も始まっている。それを各基地に数機単位で配備し、対潜哨戒を行っている。

「磁気探知器に反応あり。敵潜水艦と認む。」

「対専用ゝ意。」

仙空の機体下部が開く。そこには対潜用魚雷と爆雷が装備されてお

り、発見次第撃沈できるようになっている。

「不明艦はジグザグ航行中。遠ざかるように移動しています。」

「分かった。爆雷投下！」

仙空から爆雷が三つ投下され、その爆雷が海中にて爆発し、水柱が上る。

「敵潜の反応消失。撃沈を確認。」

海面ではオイルや内蔵物が浮かび上がっており、撃沈を意味していた。

そして夜間。計画通りサモア島に上陸を行い、ほとんど無防備の沿岸部と沿岸基地に紺碧艦隊の砲撃雷装潜水艦から砲撃を行って現地守備隊を降伏に追い込んだ。そして逃げようとする輸送艦や軽巡を待機していた前原率いる潜水艦が

「敵が出てきたぞ。魚雷放て！」

雷撃によって輸送艦と軽巡を撃沈する。そして、現地守備隊も各方面で降伏を行い、サモア島を日本軍は完全攻略し、占領した。なお、現地守備隊を送還するため、一隻だけ残っていた輸送艦を与えて本国へと強制送還した。そして、タラワ島の自治を資源提供と飛行場の租借を条件に許可した。

タラワには翌日もくゼロセンに木零戦が配備される。木零戦とは普通航空機には

超々ジェラルミンを使うが、こちらは材木を使って生産する。そして木製の為米軍のレーダーに探知されにくい事からあるいみでは世界初のステルス戦闘機である。そして木零戦は偵察の為に飛来する航空機に対して効果を発揮し、撃墜を成功させ続けた。

ついにマッカーサーはタラワ奪還を諦め、日本軍がソロモン諸島のどこかに飛行場を建設していると聞き、こちらの奪取を計画した。そしてソロモン諸島、ガダルカナル島に向かったB-17が撮影した写真を見てマッカーサーは驚いた。

「日本軍はブルドーザーを持っているのか？」

「はい、この写真を見る限りは。」

その写真には飛行場建設を行う工事の風景であり、その中にブルドーザーらしき物が移っていた。

「見た限りでは中型戦車を改造したようです。」

前世ではブルドーザーの開発が出来ず、全て手作業で設営を行ったため、飛行場を建設するのにかなりの時間が掛かった。もしブルドーザーが出来ていたら、ガダルカナルも早期に機能していたと言われている。

「ここに造られると厄介だな。ここに停泊している全ての艦艇とオーストラリア軍、イギリス軍と協力してなんとか占領しよう。」

マッカーサーはしばらくフィリピンは諦め、まずはこの孤立したオーストラリアから脱出したかった。

だが、この時ハワイから補給を終えた皇道艦隊と本土から合流してきた坂本艦隊が豪州に残った敵艦隊を撃滅すべく出撃した。

「敵は豪州にいますんでしょうか？」

「大丈夫だ。敵に警戒心を与える為にガダルカナルに飛行場を建設したんだ。これで敵は空襲を恐れて出てこれないさ。」

皇道艦隊は第一艦隊だけで出撃を行ったため、空母や航空戦艦がない。坂本艦隊も空母を訓練の為に一時引き抜かれた為、航空戦力は存在しなかった。だが、新三八弾あるから航空兵力を恐れることが無かった。

「本当に大丈夫なんですか？」

「偵察に向かった飛行艇からも敵が停泊している事は分かっている。大丈夫だ。」

だが、この時モルガン艦隊は輸送船団を護衛しながらガダルカナルへと向かっていた。フレッチャー機動部隊もワस्प、サラトガを入れた立派な機動部隊として支援へと向かった。

だが、モルガンは航空支援の受けられる朝まで待たず、夜の内に上陸を開始してしまった。日本軍は突然奇襲に慌てて山の中に退避した。それと同時に高野の提案した情報通信網を使って敵上陸を伝えた。

これに残存艦隊撃滅に向かっていた皇道艦隊と坂本艦隊は驚いた。

「敵は想定外な事をしてくれました。まさか奇襲上陸をするなど。」

「ですが、報告では敵に空母はいません。ここは戦力差で勝ちでしょう。」

だが、だんだん近づいて行き、偵察を行っていると信じられない報告が入った。

「敵機動部隊確認。珊瑚海に敵機動部隊あり。空母2隻」

「何だと！」

（どうする？戦力を危険を省みずに二分するか？）

暫く悩んでいて、坂本龍馬中將から連絡があった。

「佐藤さん。此方でも報告を聞きました。どうしますか？」

「やはりここは艦隊を二分して攻めるほうがいいでしょうが、それは少し難しい。」

「はい。戦力を分けると撃滅できないかもしれません。」

「そこでいい案があるのだが。」

「え？」

暫く佐藤元帥は坂本中將に自分の計画を話す。そして艦隊は坂本艦隊と分かれて機動部隊の方に向かった。

豪州封鎖作戦 後編

坂本艦隊と別れた皇道艦隊はアーノルド・フレッチャー中将指揮の機動部隊を撃滅すべく、珊瑚海へと突入した。

「坂本艦隊はモルガン艦隊を撃滅する為にガダルカナルへと向かいました。軍令部からは『輸送船は拿捕せよ』との命令を受けた模様です。」

「敵さんの物資を奪う気か。資源は不足しないだろうが、相手の資源を奪うことは重要だな。」

そう言って佐藤元帥は参謀の輝政中佐てるまさに向き直り

「我々是我々の任務を全力でこなす事だ。こんな危険な策に出たのだから損害は有り得るが、前世の弱気な指揮官は御免だ。」

普通参謀には大佐クラスを置くのが普通だが、佐藤元帥は優れた者は階級に関係なく選ぶ人物であり、部下からの信頼も厚い人物でもある。それと弱気な指揮官の事だが、前世では損害や責任を恐れて敵泊地や敵艦隊への突入をしなかった事が幾つもある。第一次ソロモン海戦やレイテ沖海戦がいい例である。

「しかし、もう一つの艦隊は大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だ。指揮官は信頼できる。」

すると、伝令兵が来て

「索敵1号機と2号機から敵機動部隊確認。空母3隻（ワस्प、サ
ラトガ、ホーネット）、戦艦2隻（メキシコ、ノースカロライナ）
を含むとの事」

もう一人の伝令兵が入ってきて

「坂本艦隊は敵と交戦中。重巡2隻を撃沈。更なる戦果を期待され
たし。」

「坂本艦隊はこれで勝てますね。」

「ああ。此方も向かうぞ。」

戦艦「神武」の艦長である鈴木大佐が来て

「司令、兵は早く敵と決着を付けたがっています。」

「分かっている。艦長、取り舵だ」

「とーりかーじ」

普通は航海長が言うが、現在航海長は高熱のため自室で寝ている。

「まるでミッドウェー海戦前の源田だな」

事実、ミッドウェー海戦前に源田中佐は高熱を出して自室で休んで
いる。

皇道艦隊は一斉に取り舵を取り、敵艦隊を目指して航行を開始した。

「フレッチャー艦隊旗艦 サラトガ」

「提督、日本艦隊がモルガン艦隊を攻撃、損害多数だそうです。」

「全く、独断で上陸を開始した挙句に損害まで出すとは。」

そこへ通信参謀が入ってきて

「提督、敵艦隊を発見。巨大戦艦2隻を含む艦隊。恐らく例の皇道艦隊だと思います。」

「2隻とはどういうことだ？敵は4隻の巨大戦艦で編成されているはずだぞ。」

そう、出撃したときに戦艦は4隻居た。残りの2隻の居場所は後ほど判明する。

「とにかく、位置が分かったのだ。攻撃隊を発進させろ！」

フレッチャーの命令で攻撃隊が飛び立っていく。

「皇道艦隊旗艦 神武」

「電探に感あり。敵機接近中。」

「早いな。もうじき敵艦隊を視認できる。」

「艦長、対空戦闘用意。」

「了解。対空戦闘用意！」

全艦の対空兵装が敵の編隊を捉える。

「前世の大和と本艦は違う事を見せてやる。」

前世の大和は誤射を控える為、機銃の旋回範囲を大幅に制限してしまふ。それが原因で急降下爆撃に対応できず、峰の岬沖海戦で対空能力を奪われ、雷撃を許してしまった。その反省から後世の艦艇はその制限を無くし、あらゆる方位を防御できるようになっている。

「あれが、日本の戦艦^{ジャップ}か。だが、戦艦が時代遅れだということ教えてやる。」

アメリカ軍は情報統制の為、リーガン艦隊の航空隊が戦艦によって全滅された事をパイロットは知らされていなかった。その情報統制がさらなる悲劇を呼ぶとも知らずに

「新三八弾装填完了。撃——！」

放たれた新三八弾は先の海戦と同様に航空機をなぎ払った。だが、何機は運よく災難を逃れて

「なんだ今のは？残りの編隊はどうした？」

攻撃隊のドーントレスのパイロットが後部座席にいる無線手を見た

が、既に破片を頭や体に浴び、死んでいた。

「畜生。敵を取ってやる！！」

怒りに任せて残ったドントレス3機を率いて突入を開始した。

「敵接近。対空防御開始。」

全ての艦艇から凄まじい対空砲火を浴び、たった4機では攻撃分散が出来ず、あっという間に火達磨になった。

「敵機全滅。敵艦隊も視認しました。いつでもいけます。」

「よし、砲撃開始。戦艦と空母を優先して撃滅しろ。」

各艦艇から一斉に砲撃が始まる。

その砲撃は凄まじく、特に神武型戦艦の「神武」と「安寧」あんねいは61cm砲という破格の威力を持つ主砲を4連装4基備えており、戦艦でも一発で轟沈させてしまう威力である。

「ワスプ炎上中。」

「水雷戦隊は前進し、雷撃を行え。」

水雷戦隊指揮の今岡少将は第四、第五水雷戦隊に左舷からの雷撃命令を下し、第二、第三水雷戦隊は右舷から雷撃を命じる

「艦長、魚雷発射準備よし。僚艦も準備完了。」

第二水雷戦隊の旗艦軽巡「赤石」^{あかいし}は魚雷を発射、続く後続艦も魚雷を放つ。

「魚雷命中。ワスは傾斜増大。ホーネットは健在なるも大破と判断。」

次々と入ってくる戦果報告を聞き、佐藤元帥は

「メキシコに照準あわせ。一発で仕留めろ!!!。」

電探射撃を行えるように改装したため、命中させる事は容易いが、一発は難しい注文である。だが、佐藤元帥は猛訓練で培った経験と技量、それと勘を信じてこれを命令した。部下も司令の期待に答えようと

「敵距離1万4百。訓練と同じだ。」

「了解、発射。」

主砲は放物線を少し描き、メキシコの中央部に見事に命中した。

「メキシコに命中。艦橋が消滅。」

沈んでいくメキシコの艦橋は跡形も無く消えていた。それは砲弾の威力を示すには十分であり、サラトガを含む艦艇に降伏旗が昇った。

「敵は降伏しました。戦時条約を守ってくれるなら投降も言っています。」

「分かった。ホーネットは曳航が必要だな。第二重巡部隊で曳航し、

トラック諸島まで頼む。後は応急修理をして本国にて完全修復をする。指揮は参謀、君が執ってくれるか？」

「はっ、その任、確かに受けました。」

そこへ通信兵が入って来て

「坂本艦隊は敵を撃滅。逃げる輸送船団を取り逃がしたようですが、それは我が皇道艦隊から分離した2隻の戦艦が抑えました。」

「良くやった。その輸送船も本国へ向かわせて、残る問題は。」

「ガダルカナルに上陸した米軍ですか？」

「ああ、だがこれは我が皇道艦隊が引き受けよう。坂本艦隊は輸送船とこの艦隊の護衛を任せろ。」

「了解しました。それでは私はこれで。」

輝政は曳航等の指揮の為、第二重巡部隊旗艦「御嶽」に乗艦すべく艦橋を後にした。

残りの艦艇をハワイに向かわせ、皇道艦隊は戦艦2隻と先ほど輸送船を拿捕した戦艦2隻と共にガダルカナルへと向かった。

「ガダルカナル沿岸部には戦車が居るという情報がある。だが、戦車の主砲なんかで本艦を沈める事は出来ない。」

実際、戦車なんかで戦艦を沈められれば列強の笑いものである。

「ガダルカナル視認。沿岸砲塔や戦車が居ます。」

「分かった。全艦、左90度一斉転舵。あられだん 霰弾込め。」

霰弾とは拡散弾をより強力にしたものであり榴弾程ではないが大和の主砲より少し小さい威力を持っている。だが、塹壕や戦車を吹き飛ばすには十分である。

「一斉射撃開始」

4隻の戦艦から合計64発の霰弾が放たれ、その中には6個の子爆弾が入っており計384発の砲弾が空から降ってきて、米軍が日本軍から奪って完成させた飛行場を破壊し、残っている米軍を次々になぎ払った。

ジャップ
「日本の砲撃だ！」

「畜生、輸送船団を撤退してしまうし。どうすればいいんだよ？」

降って来る霰弾の中を無我夢中で逃げ惑う米軍兵は無意識の内にジヤングルへと逃げ込んでいく。だが、着弾観測の為に飛行場上空にいた偵察機が

「敵はジャングルに逃げ込んでいる。砲撃を。」

この報告は直ちに実行に移され、ジャングルの中にも砲撃を浴びせる。暫く砲撃を続け、砲撃を一時中断した後佐藤元帥自らが高音響艦外連絡用マイクを持って

「米軍兵士たちに告ぐ、既に支援艦隊は全滅し、輸送船団も我々が

拿捕した。貴君らに待つ運命は餓死するか、病気に繋って死ぬかだ。我々は捕虜には丁重に扱い、希望するならアメリカ本国へと返す用意がある。降伏を受け入れるならば、海岸線に白旗を持って整列するように。」

マイクを置いた佐藤元帥は暫く目を閉じた

—アメリカ軍—

「おい、聞いたかよ。奴らは希望すれば本国に返してくれるだぞ。」

「馬鹿。これは謀略だ。そんな事があるか。」

「でもよ、もし本当だったら。俺は早く家族の下に帰りたいんだよ。」

」

「待っていてもこのまま死ぬだけだ。いつその事降伏しましょう。」

生き残った指揮官は反対するが、このままでは敵ではなく部下に殺されると判断し

「分かった。白旗を持っていこう。」

暫くして生き残った米軍は海岸線に整列する

これを見て佐藤元帥自らが護衛の兵と共にガダルカナルへと上陸する。そして、生き残ったアメリカ軍兵を戦艦4隻に分乗させ、日本軍守備隊の生き残った兵らをジャングルで見つけ出し、飛行場再建を頼んで戦艦を出撃させた。

だが、この時大国アメリカは巨人機を完成させ、出撃させている事に日本軍は知らなかった。

クリスマス島 攻略

豪州封鎖作戦が完了した日本軍は次なる目標をクリスマス島攻略であった。だが、豪州封鎖作戦の最中にアメリカから巨人機がニューカレドニアに集結していた。辛うじて日本軍は哨戒中であつた潜水艦の報告で軍令部は巨人機が存在を知っていた。

—東京 軍令部—

「彼らは巨人機をニューカレドニアに集結させている。しかも、長い航続距離を持っており、とても危険な存在です。塔作戦は中止すべきかと。」

「しかし、クリスマス島を攻略しない事にはマッカーサーが豪州から脱出する恐れがあります。ここを抑えれば連中は完全に逃げ場を失い、降伏するでしょう。」

佐藤元帥は中止すべきと言うが、他の者は賛成しない。

「私は嫌な予感がします。クリスマス島攻略の最中にこの巨人機が襲ってくる気がします。いくら補充艦が充実しているとはいいい、相手は大量生産国です。我々など簡単に追い越されてしまいます。」

そこで今まで目を閉じていた高野は目を開いて

「まあ、佐藤元帥の言う事も尤もだ。ここは現場指揮の高杉君に独自で判断をさせればよからう。」

「長官がそう仰るなら。」

一応階級的には佐藤佳樹の方が上だが、高野の事を尊敬する佐藤佳樹にとって従うべき存在であった。

なお、何故佐藤元帥がここに居るかというと、新たに皇道艦隊に電子作戦艦が配属される事になりそれを受け取りに佐藤元帥自らが出向いた。電子作戦艦は高性能なレーダーや対潜ソナー、それと暗号傍受及び解読さらには航空管制等電子関係の全てをこれで賄える優秀な艦である。なお、初歩的ながら妨害電波等も出せる為、相手のレーダーや無線を妨害する事ができる。

一 高杉航空機動部隊旗艦 比叡一

「諸君、豪州に居る艦隊が撃滅できた以上、もはや太平洋に米戦艦と空母はおらん。いまや太平洋の制海権は我々にある。よって、残るはクリスマス島唯一つ。」

「皇道艦隊と秘匿艦隊のお陰で我々は開戦以来殆ど損害を被ってありません。艦隊の練度はいまや世界最強です。」

「ふう、しかしこの部屋は暑くて堪らん。」

「申し訳ありません。あいにく空調機が故障してしまいました。」

「なあに、ちょっと風に当たれば大丈夫だよ。」

そう言って高杉は会議室から出て、防空指揮所に上った。

「涼しいな。」

「はい。」

「制海権は既に我々にあり、クリスマス島を攻略すれば太平洋の脅威は一時的に無くなる。それを踏まえて大高首相は講和を持ちかけようとするらしい。」

「その意味でも我々の責任は大きいですな。はやく平和な世の中になりたいです。」

「だがなあ参謀長。平和とは待っていても訪れるものではない。血を流し、戦い、死を乗り越えて平和への門を一つ一つ開けていくものだよ。」

「はい。仏の世界でも戦う神はいます。平和の神だけでは世の中は成り立ちません。」

「確かに。だが、我々は恒久世界平和のために戦っておる。その気持ちだけは無くしてはならんぞ。」

「はい。」

そこへ通信参謀が入ってきて

「長官、軍令部から電文です。」

高杉はその電文に目を凝らす

（ニューカレドニアにて米巨人機集結中。作戦中の来襲に注意されたし。なお、続行不可能となればハワイに帰還せよ。）

「長官、何が書いてあるんですか？」

「いや、大した事ではない。」

そこへ突然警報が鳴った。

「敵機接近中！総員戦闘配置！！」

「何事か！？」

「は、敵機が接近中。恐らくは哨戒機かと。」

参謀は瑞鶴を見て

「長官。瑞鶴より電征迎撃隊が向かいます。」

参謀の言うとおり、瑞鶴から2機の電征が発艦する。

「敵はB-17。クリスマス島方面に逃走中。」

電征からの報告を聞き、高杉は

「参謀長、敵に発見された。直ちに攻撃隊の準備に入れ！」

高杉に命を受け瑞鶴と翔鶴から電征が、飛龍と蒼龍からは新型艦上攻撃機「海山」が発艦し、加賀からは誘導の為の星電が発艦した。

「長官。霧島は予定通り北方へ退避すると発光信号を受けました。」

「よし、この艦隊はクリスマス島に向けて最大戦速。」

霧島は駆逐艦8隻と瑞鶴、翔鶴、飛龍、蒼龍を率いて北方へと離脱した。

だが、この時既に例の巨人機は出撃しており、その中のマジソン大佐指揮のルシファー隊はハワイ上空へと到達していた。

ーハワイ上空ー

「爆撃針路良し。爆弾庫開け」

「全機準備良し。投下！」

B-32フライング・デビルは大国アメリカが造った超巨大爆撃機であり、長大な航続距離と大量の爆弾を腹に抱えても高度1万2千メートルを時速690キロで飛行できる爆撃機である。

（フッフ、こんな楽な任務は他に無いだろう。なんせ対空砲の届かない高度から天候にも左右されないレーダー爆撃。おまけに帰還すれば英雄。最高の任務だぜ）

爆撃隊指揮のマジソン大佐は一人笑みを浮かべていた。まだハワイには蒼葉が配備されておらず、この高度を飛ぶ航空機をハワイに配備された戦闘機で迎撃するなど不可能であった。結果、真珠湾の港湾施設は甚大な被害を被り、暫くは港湾としての機能は失った。だが、皇道艦隊は運よく外洋にて訓練を行っており被害は受けなかった。

そのころクリスマス島攻撃隊は

「敵航空隊接近。瑞鶴制空隊が向かいます。」

敵機を見つけた航空部隊は護衛から電征を一部引き抜いて迎撃に向かわせた。

「見つけた。B－17の編隊です。」

「了解。かれー！」

電征は迎撃の為敵機に飛び込んでいく。だが、それは後方への注意を疎かにした。

太陽を背に急降下したP－51（史実ほどの性能はまだ無い）が電征を1機仕留める。

「しまった。護衛機がいたのか。」

互いに空戦を展開するが前回ほど敵機を圧倒することは出来ず、両者互角の戦闘を行う。

「畜生。これじゃあB－17どころじゃないぞ！」

B－17を取り逃がした電征はP－51との戦闘を続けた。

－高杉航空機動部隊旗艦 比叡－

「敵はB－17を此方に差し向けました。」

「しかし、なぜB－17なんだ？」

「敵の真意は分かりませんが、脅威であることに違いはありません。」

確かに水平爆撃では風に流されて思うように攻撃できない為、艦艇攻撃に水平爆撃は有効とはいえない。

「直援の電征が向かいます。」

「よし、我々はこのまま突っ込む。」

電征を発艦させた加賀は対空艦4隻に守られて離脱した。

その頃日本攻撃部隊はクリスマス島に攻撃を仕掛けていた。

電征は防衛のために離陸したP-51と交戦し、海山は対空砲や滑走路などの地上目標に500kg爆弾2個を投下する。

「これでも喰らいやがれ」

海山から投下された爆弾が燃料タンクに命中し、大爆発を起こして炎上。他のタンクも誘爆を起こして炎上する。

「攻撃隊は成功したようです。飛行場は破壊され、使用不能です。」

「残るは接近して来たB-17だな。見たところ近づいてくる様子はない。」

「はい。やはり新型対空砲を脅威と見ているのでしょう。」

「ああ、新三八弾は十分に抑止力になってくれているようだな。」

リーガン艦隊やフレッチャー艦隊との戦闘で十分新三八弾の威力を見せている為、敵も容易には近づいて来なかった。

「ん？」

突然B-17から大量に何かが投下された。

「敵が爆弾を投下します。」

「あんな所に落として爆撃を諦めたのか？」

かなり艦隊から離れた所に投下されている為安心したような顔に参謀等はなったが、高杉は敵の行動に疑問を抱き

「いや、あれは」

海面に着水した物を良く見ると機雷であった

「あれは機雷です！」

「取り舵一杯。速度20ノットに下げ。」

速度を落として旋回するが、これが仇となり敵機が急降下をして爆弾を投下した。

「4番砲塔被弾。3名戦死。被害軽症なるも使用不能。」

「敵も子供だましな手を使ってくるな。」

だが、突然思いもよらない報告が入る

「左舷後方より10機以上の大型機接近!!」

「何だと!?!」

そう、それは真珠湾を攻撃したルシファール隊と途中で別れて高杉航空機動部隊に向かっていたもう一つの部隊「デビル隊」である。

「全砲塔に新三八弾込め!」

「敵超重爆撃機接近。数15」

「三番砲塔は最大仰角のまま照準が合いません。」

滅びの足音の様なエンジン音を轟かせてなおもB-32が接近する。

「1、2番砲塔は左90度で待機。3番は右90度で待機。」

高杉の命令で砲塔が旋回する。

—B-32 デビル隊指揮官機—

「日本艦隊発見。全機爆弾倉開放。」

デビル隊の爆弾倉には対艦攻撃用ロケット弾が満載されていた。

「ファイアー。」

先頭の指揮官機がロケット弾を放ち、先頭に行く比叡に攻撃を加えた。

「うおおお。」

「総員退避。」

比叡の艦橋は穴だらけになり甲板や防空指揮所でも多数の犠牲者が出る。だが、運よく艦橋に居た者はガラスで怪我をしたものは居るが、全員無事であった。

「新三八弾発射！！」

1機通り過ぎた所で新三八弾が放たれ、接近していた残りの14機と通り過ぎた1機を仕留める。

「間一髪でしたね。」

「ああ。」

「報告します。重巡筑摩被弾し戦闘不能。艦長以下艦橋に居たものは全員戦死。利根は磁気機雷で浸水発生。鳥海は健在で僚艦の乗組員を救助中。」

だが、先に離脱させた加賀も餌食にされていた。

「長官、加賀がやられました。沈んではいませんが、航行不能で大

火災発生中。」

高杉は電話を変わり

「高杉だ。総員退艦命令は出したのか？」

「はい。申し訳ありません。」

加賀の艦長は既に退艦命令を出していた

「言っておくが艦と運命を共にしようなどと馬鹿な考えを持つな。前世では海軍の美徳だったが後世では犬死と心得よ。」

「はっ、分かっております。」

「聞くが、巨人機は全て落としたのか？」

「はい。対空艦が全機撃墜しました。」

「よくやった。敵潜に注意して脱出を。」

そう言って電話を切った。

— 加賀護衛隊 駆逐艦「秋風」 —

「救助を急がせろ。まだアメリカ軍には潜水艦が幾つもいるのだから。」

「艦長、聞きなれない推進音を探知しました。」

「なに!？」

「9時方向に浮上してきます。」

「対潜用」

ここまで言って命令をやめた。なぜなら浮上してきた潜水艦は味方であり、しかも先ほど撃墜したはずの巨人機を船体に乗せていた。

「あれは味方です。救助を手伝うといっています。」

「『貴官の申し出に感謝するも必要なし。貴官の任務を続行されたし。』と返事しろ。」

「しかし、あれは先ほど我々が撃墜した機ではないか。」

潜補1003号の艦長の機転で波間に漂っていたB-32の回収に成功した。すなわち、アメリカの最高軍事機密を入手したのである。

—高杉航空機動部隊旗艦 比叡—

「長官、ホノルルから緊急入電。真珠湾が攻撃されたようです。」

「なに!?!。敵はまだ空母を持っていたのか?」

「いえ、巨人機が爆撃したようです。」

「被害は?」

「港湾施設に攻撃が集中しており、港湾機能は暫く使用不能かと。運よく皇道艦隊は外洋にて訓練していた為無事です。」

「そうか。その重爆、どこへ去ったと思う？」

「タヒチかクリスマス島かと思います。仮にタヒチまでだと航続距離は1万2千以上の化け物です。クリスマス島なら9千前後かと。」

戦務参謀は地図を見て

「南に行ったと言ったよな？・・・クリスマス島？長官、クリスマス島への航空攻撃は完了していますよね？」

「ああ、今会合点に。！、なるほど。今頃奴さん等は滑走路の修復に大忙しだろう。ここは鳥海に任せてクリスマス島を砲撃する。」

—クリスマス島 アメリカ軍飛行場—

高杉の読み通りアメリカはそのタフな機械力に物を言わせて簡易滑走路を造っていた。フォークリフトで鉄板を運び、ブルドーザーで邪魔な破片や破壊された航空機を退かすのに精一杯であり、だれも比叡が近づいている事を気に留めていなかった。

「なんとか間に合ったな。これで英雄等を迎えられる。」

休みなしに働いて工兵部隊はクタクタであった。そこへB—32が到着する。

—B—32 マジソン機—

「着陸態勢に入ります。」

「ああ、ようやく足を下ろせるな。」

「その時から大佐は英雄ですね。」

「ははは、英雄も悪くないがな。デビル隊も日本の空母1隻と重巡
2隻を血祭り上げている。戦況は今日を境に一気に変わるぞ。」

機を地面に着地させ、減速に入る。だが、この時比叡から必殺の一撃を喰らう。滑走路に突然撃ち込まれた砲弾でB—32はバランスを崩し左の車輪が折れる。

「なんだ？ どうしたんだ？」

滑走路の脇の林にマジソン大佐乗機のB—32が突っ込む。マジソンは何とか乗機から這い出して来て

「一体何が？」

だが、目の前の現実がまるで夢のように見えてくる

「滑走路が・・・降りる場所を失った我がルシファー隊は全滅！ お、俺の夢が・・・」

その時マジソンの近くに比叡から放たれた時雨弾が落ち、マジソン大佐は戦死した。なお、この後2階級特進でマジソン中将である。

—高杉航空機動部隊旗艦　比叡—

「時雨弾は確実に威力を発揮しておる。」

時雨弾とは先の皇道艦隊によるガダルカナル砲撃で使用された霰弾を少し威力を下げたバージョンである。尤も、時雨弾は元々滑走路や塹壕破壊用に開発されたのだが

「連中、70機以上の新型超重爆撃機を一気に失うわけですね。」

「敵影消失。最終確認地点は右舷の島影」

電探室からの報告を受けて高杉は右舷を見る。

「クック島か。艦長、もう一度使えるとは思えんが、念のためだ。」

「はっ、1，2番。撃——！」

クック島に不時着したB—32目掛けても時雨弾を放ち、全機を確実に葬った。

「作戦終了。ハワイへ向かって最大戦速。」

損害らしい損害を受けるも、高杉航空機動部隊は見事に作戦を完遂。この後、陸軍上陸部隊を連れた皇道艦隊第三艦隊が島を再攻撃、これを占領した。

クリスマス島 攻略（後書き）

新作も書きたいので少し更新が遅くなりますが、しっかり更新はします。

故郷

皇道艦隊に電子作戦艦が配属され、当初の予定通り航空戦艦に300機の艦載機を搭載する事になった。

その為、佐藤元帥自らが本土の訓練基地に出向いていた

一岩国訓練飛行場―

「元帥閣下自らがお越し下さるとは以外ですね。」

「これから私の部下になるのだ。人選は私がやらなければならない。」

「ええ、ここには優秀な人材ばかりですよ。特に鈴木二等飛行兵は腕が確かです。」

「その人物を呼んでくれないか？話がしたい。」

「はっ、ただちに。」

そう言って基地司令の早乙女中佐は出て行った。暫くして問題の鈴木二等飛行兵が入ってきた。

「失礼いたします。自分は鈴木武彦二等飛行兵です。閣下の活躍は聞いており、自分も貴方の艦隊の飛行隊に所属したいと思っています。」

それを聞いて佐藤元帥は笑顔になり

「なら話は早い。君の配属命令書だ。」

そう言って佐藤元帥は鈴木二等飛行兵に手渡した。

「拝見します。」

そう言って鈴木は命令書を読む。

「では自分は閣下の部隊に？」

「ああ、航空戦艦「天照」あまてらすに配属を命じる。これを以って貴官は特命で上等飛行兵に任命し、明日ここを発ってもらう。」

「はい。全身全霊閣下に尽くします。」

鈴木は佐藤元帥に敬礼をする。

「では明日の昼に横須賀で。」

そう言って佐藤元帥は岩国訓練飛行場を発った。その後も各訓練飛行場を回って優秀なパイロットを集めた。

一軍令部一

「高野さん。我々は当初の予定通り航空戦艦に300機を搭載するようにはしましたが、作戦が無ければ意味がありません。今一度本土攻撃を。」

「分かっております。そこで貴方方の艦隊にお願いがあります。後日我々は原爆工場を破壊する為に攻撃を仕掛けます。その時閣下の艦隊にサンフランシスコ海軍基地を攻撃していただきたい。」

「サンフランシスコを？」

「はい。閣下の艦隊は原爆工場を破壊するまで耐えていただきたい。もちろん囹ですが、囹と気づかないぐらい徹底的に破壊していただきたい。」

今サンフランシスコにはリーガン艦隊の生き残りである戦艦1隻と空母2隻が停泊しており、この3隻は絶対に沈めるとというのが高野の狙いである。

その後佐藤元帥は実家の静岡県浜松市の西の端であり江戸時代あたりから漁業で栄えている舞阪に帰ってきた。

「久しぶりの故郷だな。」

佐藤元帥は懐かしい潮の香りを嗅いでそう思った。太平洋で嗅ぐ潮の香りとはまた違う匂いである。前世の佐藤元帥の家系は先祖代々漁師であり、彼も漁師になろうとしたが、何時しか海軍を志すようになった。

海軍の制服（しかも元帥の階級章付き）で道を歩いている為、会う人は皆頭を下げている。前世では当たり前前の事だが、後世では軍国主義は撤廃されている為別に頭を下げる必要は無い。

（頭を下げているという事は噂が流れている事だな。）

佐藤元帥はそう思った。

家の前に着き、3年ぶりに実家の扉を開けた。すると家族が門の中で出迎えてくれた。

「立派になったんだねー。」

「どうも御袋。」

「海軍では米艦隊を次々撃破しているそうじゃないか。最初は海軍を志す言ったから三日で死ぬと思っていたよ。」

「相変わらずきつい一言だね兄さん。」

「それはそうと。何故突然帰ってきたんだ？」

「いやー、また直ぐ出撃するんで、少し家族に逢って置きたかったから。」

とりあえず部屋に入った。やはり出征する時と部屋は変わっていなかった。

暫く布団に入っていると兄が部屋に入ってきた。

「兄さん何の用？」

「お前、人が変わったな。」

「え？」

「軍に入る前は虫も殺せない奴だったのに。今ではアメリカ軍を一番大勢殺している。」

確かに開戦から主要な作戦は殆ど参加しており、自覚はしていなかったがその通りである。

「確かにそうかもしれない。でも、今は戦時であり、相手を殺さなければいけない。それは仕方の無いことだ。」

「それは違う。だれが望んでこんな戦争をしているんだ？確かに戦時ではある。だが、だからと言って人を殺していいという理屈にはならない！！」

兄は怒った表情で言う。

「兄さん。」

「だが。」

「え？」

「お前は民間人は殺してはいない。戦争では民間人が死ぬかも知れない。でも、それをしていないだけ立派だ。」

「ああ。」

民間人は一般的に航空機が出現したときから犠牲者が出始めたといわれている。だが、日本軍は攻撃を予告し、避難を促した上で攻撃に出ており、犠牲者は未だ10人も満たない。

「民間人を殺さないように作戦を立てているんだ。それは難しい事であり、それが出来るお前は凄いよ。」

そう言って兄は部屋から出て行った。夕食は実家で取り、朝に浜松の飛行場に行った。そこは陸軍の飛行場であるが、後世では陸海軍共同飛行場になっており、そこに待機していた物資運搬任務を受けている零式輸送機に便乗させてもらい木更津飛行場に飛び、そこから横須賀まで車で送ってもらった。

米太平洋主力艦隊撃滅 前編

横須賀に到着した佐藤元帥は早速待っていた訓練兵をそれぞれ10機の二式大艇に分乗させた。

横須賀を飛び立ってミッドウェーにて給油、無事ハワイへと到着した。

―日本海軍　ハワイ方面艦隊司令部―

「我々は予定通りロスアラモス原爆工場を破壊する。その為、各自自分の決められた事を必ず達成するように。」

ハワイ方面艦隊司令の高杉中将は閣僚全員の前で本作戦を説明した。なお、何故中将の高杉が司令かというと、佐藤元帥と比べて事務関係も得意だからである。

「では、無線連絡を頻繁に行い、合衆国全艦隊を皇道艦隊に向かわせる。その間に我が艦隊は再度パナマ運河を破壊する。紅玉艦隊はサンディエゴ攻撃と特殊爆撃機「爆龍」で工場を爆撃する。」

「分かりました。」

各艦隊司令は早速準備に入り始めた。

「アトランティック・シティ沖」

「艦長、予定の海域に到着しました。」

航海長の指示を聞き、清竜号艦長の足利^{あしかが}義正大佐^{よしまさ}は

「浮上せよ。海面へ浮上しだい、航空機の準備にかかれ。」

浮上した雷装砲撃潜水艦は直ちに航空機の発艦準備に入る。

「射出機結合良し。雷洋1番機発艦！」

射出機に固定された雷洋1番機が撃ち出される。他の潜水艦も1番機を上げ、2番機の準備に入っている。

「すばらしい。5分も掛かっていないぞ。」

全機射出完了まで5分も掛かっていない。航空隊は雷洋3機はワシントンD・C・へ、草連6機はニューヨークとボストン目指して飛行を開始した。

一米合衆国首都　ワシントンD・C・　—

「山下兵曹。準備はいいか？」

「いつでもいいです。」

雷洋隊指揮の島本大尉は乗機を降下させ、ビル郡の中を突っ切る。

「ビラを投下せよ。」

雷洋3機からビラが撒かれる。それは文字が書かれておらず、代わりに桜とハナミズキが書かれていた。

「こっ、これは友好の証の記念樹。」

そう、史実で1912年3月27日に日米友好の証として当時の東京市長で軍部の圧力に抵抗していた尾崎愕堂事、尾崎行雄が送った物である。現在でも憲政の神様や議会政治の父として有名な人物である。

ーホワイトハウスー

「なに？日本軍機が！？」

知らせを聞いたルーズベルトが慌てて庭へ出る。そこへ島本大尉の雷洋が降下して

「喰らいやがれ！」

爆弾を投下する。

「わああ！」

ルーズベルトは突然の爆撃に驚くが、その爆弾は爆発せずにホワイトハウスの庭に突き刺さった。

「だっ、大統領！。直ぐに避難を。」

「不発弾か？」

「時限式かもしれません。さあ、早く！。」

側近が大統領を安全なところへと連れて行く。

「ははは、ルーズベルトめ。度肝を抜かれただろう。」

ホワイトハウスに爆弾を落とした島本大尉はご機嫌だった。

「では尾崎さん。そろそろ準備を。」

「もう出来てます。いつでもどうぞ。」

「尾翼には気をつけて下さい。」

「訓練済みですよ。ではまた。」

そう言って雷洋の偵察員席からパラシュートを持って降下した。

「任務完了だ。長居は無用だな、引き上げるぞ。」

「了解。」

島本大尉は僚機を率いて母艦へと離脱を始める。

ーワシントンD・C. ダウンタウンー

「ふう。」

尾崎はダウンタウンの裏路地に運よく着地していた。そこへホームレス風の男が来て

「やあ。」

尾崎はそう挨拶をし、内ポケットから10ドル札を5枚程出してその男に渡す。

「あんたは天使かい？」

「いいや、強いて言うなら平和への使者かな。これからワシントン・ポスト社に行きたいのだが・・・」

「それならこっちですぜ。」

ワシントン・ポスト社とは全米で知らない者が居ないほどの有名新聞社であり、発行数は他と比べて多いとは言えないが、アメリカで1, 2位を争う有力紙である。

ファンファン。

突然パトカーのサイレンの音がして尾崎は警戒しながら男を見るが

「心配いらねえ。あっしはポリ公が大嫌いだね。旦那、こっちです

ぜ。」

そう言って男に案内されながら路地を抜ける。

「ほら、あれがワシントン・ポスト社の本社だ。」

「ありがとう。」

尾崎は男と握手をして、路地から抜けてワシントン・ポスト社に入る。

—ワシントン・ポスト社 社内—

「すまないが私は日本からの平和の使者だ。すまないが、編集長と話をさせてくれないか？」

突然言われて対応に出た男は焦ったが、新聞社は戦争に関係ない。ましてや、敵側の人間がなぜ来たのかを知りたい好奇心から編集長に電話を入れる。

「編集長、ビックニュースです。はい。実は今日本から平和の使者と名乗るものがあります。ええ、」

受話器から耳を離して

「ハリマン編集長から貴方と直接話しを聞きたいそうです。」

尾崎は受話器を受け取ると、なめらかな英語で

「はろー、ハリマン編集長。私は日本の新聞社の尾崎という者です。」

我が日本政府は貴社がローカル紙にもかかわらず最も権威のある正義の新聞社だと信じています。政府議員などの有名人も貴社の新聞を読んで大きな影響を受けている事も知っています。そこで我々のメッセージを伝えるべくやって来たのです。」

「貴方の話は良く分かりました。いいですか、私が行くまでそこから1歩も動かずに待っていてください。」

そう言ってハリマン編集長は電話を切り

「日本機がワシントンにビラを撒く事だけでも考えられないのに。日本人ジャーナリストが降下したなど信じられん。」

ハリマン編集長はコートを着て編集長室から出て、日本人記者の待つ所へと向かった。

「お待たせしました。編集長のハリマンです。」

「尾崎英雄です。よろしく」

「早速ですが詳しいお話をお聞きたい。」

尾崎は内ポケットから封筒を取り出し、ハリマンに渡す

「これは？」

「大高首相より預かった平和を望む合衆国国民へのメッセージです。」

ハリマンは中身を一通り読み、助手を呼んで

「輸転機を全て止めろ。朝刊も全て刷り直しだ！これを整理して載せる、無論トップ記事扱いでだ。」

「あの一、見出しは？」

「ジャパン平和の使者天下るとかなんとかにしろ。急げ。」

それから暫くして

「臨時ニュースを申し上げます。本日未明に日本軍機が東部三都市を爆撃されました。」

さらに暫くして

「先ほどのニュースは誤りでした。申し訳ございません。日本軍機は三都市にビラを撒きました。その中の首都では日本人ジャーナリストが降下し、現在はワシントン・ポスト社にて記者会見を行うようです。」

テレビ放送は戦後のイメージが強いが、実際は1929年に英国で実験的に放送が始まり、1935年にはベルリンオリンピックの内容も中継している。日本では1939年5月13日にNHKで公開実験を行い、1940年4月13日には日本初のテレビドラマ「夕餉前」^{うげまえ}を放送している。米国では1941年にテレビ放送が始まっている。

— ホワイトハウス —

「空襲機から降下した日本人はワシントン・ポスト社に逃げ込んだらしく、ラジオ局とテレビ局が駆けつけているようです。」

側近からの知らせにルーズベルトは顔を真っ青にして

「何！？そ奴を直ぐに逮捕するのだ！。絶対に何も喋らせるな！！」

「閣下、冷静にお願いします。相手はインタビュが終わるまで引渡しには応じないと言ってきています。」

「黙れ！！。これは大統領命令だ。」

「閣下、我が国は言論の自由の国でありまして、ジャーナリズムを誘導して世論を動かす事は可能ですが、その命令を行いますと合衆国中のジャーナリストを敵に回す羽目になります。」

「そんな事は分かっている。だが、下手に喋らせて事の真相が国民に伝われば、我々の首が飛ぶぞ。」

「そんな事は分かっています。しかし、敵もかなり巧妙です。戦争はスポーツ精神に則って行い、正々堂々戦うものである。よって、原子爆弾による民間人の大量虐殺はもはや戦争ではなく一種の殺人である。」

戦争をスポーツと言うかどうかは分からないが、ルールがある以上スポーツの形容もできる。民間人の虐殺は戦時条約で禁止されており、これを行うと戦争犯罪人として裁かれるのが基本である。だが、史実において日本軍や独逸軍の枢軸国は裁かれたが、アメリカやイギリスの民間都市空襲やソ連のベルリンでの民間人虐殺は一切裁か

れなかった。

「これは我が国民に受けますな。」

「補佐官。君まで敵の肩を持つと言うのかね？」

「アメリカ国民にとって、閣下のアピールより大高の訴えの方が受けると言ったのです。我々はこれまで日本の和平交渉を無視し続けてきました。だから、大高は政府を相手にしないで直接国民に訴えたでしょう。国民の望まぬこの戦争に誰が引きずり込んだ元凶が誰なのか！？それを国民に気付かせようとしているのです。」

「そんな事が連中に分かっているはずがなからう。」

「今ラジオでは原爆開発中止を訴えるよう国民に呼びかけています。先に落とした模擬弾は警告であるとも言っています。」

「騙されるな！。連中は科学力も資源も無いのだぞ。」

「彼等は独逸から入手できるとほのめかしています。それに閣下もご存知でしょうが議員の中にもワシントン・ポスト社の新聞を愛読している者が居ります。知識人らも愛読しており、この戦争の真実を知ろうとする動きが生じますと、我々が長年計画していた新政府樹立も実現しなくなります。」

暫く間が空き

「恐らく大高は気づいているでしょう。この戦争を我々が仕組み、行われている事を。大高は恐るべき知識人です。」

「それがどうしたと言うのかね？」

「まだ分からないのですか？ 彼等はこの戦争の影に潜む連中も見えています。それに大高はこうも言っております。世界には様々な宗教や考えがあり、その上で成り立つ政府があると。それを我々はどうして認めることができないのかを。」

「それは我々の神が世界の如何なる神よりも優れているからだ。」

「では閣下は原爆を使用すると？」

「それが神の意思ならば仕方が無い。」

「その為に新政府樹立を行うこの世界が滅びてもですか？」

その瞬間、ルーズベルトの脳内では黙示録の予言と、灰になったワシントン D・C. が思い浮かんだ。

—アトランティック・シティ沖—

（大高首相のメッセージは無事に届いたか。あとは国民がどう出るかだな。）

航空隊を収容し終え、潜行した潜水艦は米国のラジオを傍受して内容を知った。そして、南アフリカ周りでスエズ運河を封鎖し、帰還の任に就いた。

―首相官邸―

「やはり何も言ってきませんでしたか。できれば攻撃はしたくなかったのですが。」

「閣下のお気持ちは分かります。東機関の報告からこの件は珍事として片付けられたようです。」

東機関とは潜入調査や情報入手等を専門にする特殊情報局である。

「では高野さん。攻撃命令をハワイに伝えてください。」

「分かりました。」

この命令は直ちにハワイに伝わり

―ハワイ 日本海軍ハワイ方面司令部―

「攻撃命令が下った。先ほどの指示通り、各艦隊は任務に従事して必ず帰還するように。」

高杉の訓示で各艦隊は出撃する。皇道艦隊は巨体艦が多い為、予め湾外に出ている事で他の艦艇を効率よく湾外に出せるようにしていた。

―皇道艦隊旗艦 戦艦神武―

「いよいよ米本土攻撃ですね。」

「ああ、できれば私も行いたくなかったが、仕方が無い。」

「もうじき戦闘位置に達します。そうしたら攻撃隊を出してサンフランシスコを攻撃します。」

「絶対に目標以外に命中させないよう攻撃隊に厳命しておけ。」

「分かっております。」

第一次攻撃隊の任務はサンフランシスコ海軍基地を攻撃とサンフランシスコに架かる4本の橋を破壊することである。敵制空隊は電子作戦艦「葛城^{かつしろ}」でレーダーを無力化し、破壊する事である。

「攻撃隊発艦位置に到達、各空母から準備良しの連絡も来ています。」

輝政中佐の報告を受け、佐藤元帥は

「攻撃隊発艦始め！」

第一次攻撃隊 戦闘機120機 爆撃機90機 雷撃機40機が出撃した。

—サンフランシスコ—

ウウウウウ

「空襲警報発令！！空襲警報発令！！」

「そんな！？再度本土が攻撃されるなんて」

サンフランシスコ市民は空襲警報を聞いて飛び起きて外にでる

サイレンの後、市庁舎からの警報が流れ、夜の闇にサーチライトが灯る。

「これは歓迎してくれていますな。」

第一次攻撃隊は予定通り到着した。レーダーを葛城が無力化したお陰で発見されずに本土まで飛行できた事は言うまでもない。

機体を降下させて4本の橋を先ず狙う。真っ先に狙われたのはゴールデンゲートブリッジであり、サンフランシスコの象徴は中央と支柱、両端に爆弾を受けると、橋を支えるロープが切れ、橋を支えきれなくなった支柱は根元から折れ曲がり、中央が沈み、両端も沈むという結果になった。他の橋も同様に破壊された。

ーサンフランシスコ 海軍基地ー

「ジャップめ、こんな所まで空襲に来るなんて。」

生き残ったリーガン艦隊を現在指揮しているトーマス・ジェファースン中将は寝室から空襲警報を聞き、直ぐに軍服に着替えて艦橋に姿を現した。

「提督、釜は完全ではありませんが出撃できます。」

「分かった。碇を上げて出撃。狭い湾内で沈むのは真っ平御免だ。」

トーマス艦隊は戦艦1隻、空母2隻と駆逐艦10隻を率いて湾内脱出をすべく出撃した。だが、この時トーマス艦隊は既に皇道艦隊の思惑通りに動いている事を司令長官は知る由もなかった。

米太平洋主力艦隊撃滅 前編（後書き）

ご都合で前後編に分けました。申し訳ありません。

米太平洋主力艦隊撃滅 後編

一皇道艦隊戦艦 神武一

「第一攻撃隊は予定通り攻撃を完了した模様。現在、第二次攻撃隊の発艦作業中と発光信号を受けました。」

「急がせろ。敵も空母を持っているから上空警戒も疎かにするなよ。」

佐藤元帥は何時に無く焦っている。なぜなら、敵の空母から攻撃隊が発艦している様子は無いが、それでも基地航空隊の来襲は十分に考えられる。

そこへ艦橋に伝令が来て

「天照より入電。『我攻撃隊発艦完了。これより第一次攻撃隊の収容作業を行う。』とのこと。第一攻撃隊は順次母艦へと着艦しており、未帰還機は26機だそうでう。」

「26機とは少ないな。」

「大方、奇襲に成功して反撃を受けなかったんでしょう。だが、今度は動く目標であり、濃密な対空火器も保有している艦艇です。損害はかなり出る事も覚悟しなければなりません。」

「参謀、多少の損害を恐れて如何する？。精神論は嫌いだが、必勝精神の大和魂は忘れてはならない。」

「閣下、確かにそうですが、撃滅した後にサンフランシスコを砲撃するのは早すぎませんか？」

佐藤元帥は念に念を押し、撃滅した後にサンフランシスコを艦砲射撃をして市内を完全に破壊するつもりであった。市民は橋が落とされる前にサンフランシスコから脱出しているため被害は出ないが、それでもまだ早い気がする。

「確かに早いかもしれないが、サンフランシスコの海軍基地と市内を破壊すればそちらに政府は復興資金を提供しなければならない。だからアメリカ政府を経済的に圧迫してやるんだよ。」

「そこまではしなくても。」

「無論、他に早期講和への道があるならばやっているさ。無い以上はやるしかない。分かってくれ輝政。」

輝政は暫く考え込んだが、

「閣下がそう言うなら依存はありません。」

「さて、そろそろ攻撃隊が敵艦隊の上空にたどり着く頃だろう。」

佐藤元帥は腕時計を見ながら言った。

「トーマス艦隊 上空」

「敵艦隊を視認。上空には戦闘機40機を確認。雷撃隊は降下して魚雷を投下せよ。」

第二次攻撃隊隊長の内山中佐はテキパキと各隊に指示を出す。

「直援機は任せろ。その代わり撃滅を頼むぞ。」

そう言って制空隊隊長の石塚大尉は僚機を率いて敵直援機に向かう。

「左舷より敵雷撃機海面スレスレで接近中！」

見張りの声を聞いてトーマスは

「敵機を落とせ！。水柱だ、水柱を作れ！！」

命令を聞いて機銃手は敵機と海面に向かって放つが、日本軍機は一切怯まずに真っ直ぐ向かっていく。

「敵空母を射程に捉えた。魚雷発射用意……撃！」

まず、八岐大蛇の艦上攻撃機「風海」と紫龍しりゅうの艦上攻撃機「蒼山」が空母「スペリオン」に目掛けて魚雷を計6本投下する。

「面舵一杯！！。」

トーマスの命令でスペリオンは右に舵を切るが、巨体であるが故に幾ら速力があるとはいえ旋回は遅い。数秒後に3本の魚雷を船体中央に1本、艦首に2本受ける。

「被害は？」

「左舷に3本命中。内、1本が機関室に命中した為機関が1つ停止しました。」

「影響は？」

「速力が少し下がりますが、戦闘には影響なし。」

巨体である為、装甲はかなりのものである。

「左舷より雷撃機3機、右舷より雷撃機4機。あつ、後方からも雷撃機2機が接近しています！」

「くそ、戦闘機は一体何をやっている？」

「そつ、それが、敵機発見の報の後から応答ありません！」

「なっ、何だと!？」

既に戦闘機は全滅させられていた。何せ3倍の戦闘機に襲われては勝てという方が無茶である。

「魚雷発射！」

各方位から時間差で魚雷を投下する。

「面舵一杯。急げ！」

だが、スペリオンの奮戦虚しく魚雷7本が命中して艦内各所で火災

が発生。

「艦内各所で火災の報告。被害は甚大で、機関は完全に停止。格納庫にも火が発生しており、誘爆は時間の問題です。」

「あつ、敵急降下!!」

「何!!?」

チャンスと見た急降下爆撃隊は半身不随のスペリオンに急降下爆撃を開始した。

「高度500。投下!」

艦上爆撃機の「銀星」が1t爆弾を合計6個投下する。それは火災を起こしている飛行甲板を易々と貫通し、消火作業中の乗員諸共格納庫を吹き飛ばす。間髪いれず、中にあった爆弾や魚雷に引火、大爆発を起こし、沈み始めた。

「格納庫で爆発。もはや本艦は持ちません!。」

「分かった。君達は退艦しろ。」

「え? 司令は?」

「私は残る。どうせ帰っても左遷されるか不名誉除隊だからな。」

「では、何か形見を。」

トーマスは被っている海軍帽と階級章を外して参謀に渡す。

「長官。それでは」

参謀を含む艦橋に居た者は全員トーマスに敬礼をする。トーマスもそれに答礼し、長官室に籠った。

一大型空母スペリオン　格納庫誘爆により爆沈。トーマス・ジェフ
アーソン中将戦死一

「空母1撃沈。もう1隻も魚雷を受けて中破と判断。」

「了解。止めを刺すぞ。」

次に日本軍機が狙ったのは雷撃で中破したヒューロンである。

3機の雷撃機が降下し

「魚雷発射!!」

3本の魚雷はヒューロンに命中し、ヒューロンは停船する。

「急降下爆撃隊は止めを。」

命令で急降下を始める爆撃隊

「投下!!」

天照航空隊の艦上攻撃機が爆弾を投下する。

「爆弾落下中!!。」

ヒューロンの飛行甲板は落下して来る爆弾をみて混乱に陥っている。
飛行甲板に3発、艦橋直撃2発。

「ヒューロンは傾斜中。推定艦傾斜角20度。」

もはや復旧は絶望的である。艦長も艦橋に居た為戦死。乗組員は自分の判断で退艦を始める始末である。

一ヒューロン 爆撃による飛行甲板の破壊。それによる艦の重量バランスの変化で沈没。艦長以下艦橋に居た者は戦死一

「戦艦が沈みます。」

別の航空機が戦艦に止めを刺して沈没していく光景が他の搭乗員と米残存艦艇の乗組員は目撃する。

一戦艦ロッキー 魚雷で艦艇下部から浸水。復旧できずに沈没一

残存艦艇はバラバラになって逃げ惑うが、残った爆弾や魚雷を投下する為に攻撃してきた機により重巡洋艦3隻沈没、2隻大破（内1隻はその後自沈）。駆逐艦6隻沈没、3隻大破。

日本軍機の損害 戦闘機12機（内9人脱出） 爆撃機23機（内

35人脱出) 攻撃機30機(80人脱出)

―戦艦神武―

「各方面の艦隊から入電。高杉機動部隊はパナマ運河封鎖を完了。紅玉艦隊はサンディエゴ攻撃を終了、原爆工業も破壊を終了したという報告です。」

その報告を聞いて艦橋に居るものは喜びの声を上げる。だが、皇道艦隊はサンフランシスコを砲撃せねばならない。神武は僚艦の戦艦と航空戦艦、駆逐艦8隻を率いてサンフランシスコへと針路をとった。

―ワシントンD・C. ホワイトハウス―

「大統領。ロスアラモス原爆工場は完全に破壊されました。」

ルーズベルトはそれを聞いて頭の血管が浮き上がるほどの大声で

「何だと!!。技術者達は?」

「幸い、技術者は全員無事として施設を復旧さえすれば再開は可能です。しかし、計画は1年程度の遅れは仕方ありません。」

「そうか。下がってよいぞ。」

側近が下がったところで

「大高め!!!。今に、今に見ておれ! . . . ウ!?。」

「閣下!!!。」

近くにいた陸軍参謀とCIA長官が声を掛けるが、ルーズベルトは力なく手を下ろし、呼吸が止まった。

—第32代合衆国大統領 ヘンリー・ルーズベルト 脳溢血で死亡—

その頃、皇道艦隊は容赦のないサンフランシスコ攻撃を行うべく、サンフランシスコ湾へと突入した。

だが、この時予想外の敵が湾の秘密ドック内に居る事はまだ知る由もなかった。

サンフランシスコ湾脱出

—サンフランシスコ—

「先程傍受したニュースでは尾崎さんは逮捕されたようです。」

輝政が無線室から帰ってきて佐藤元帥に報告する。

「だろうな。だが、アメリカ国民に我々の意思を伝える事が出来たのだ。」

「あと、大統領が死亡したというニュースも入ってきましたが。」

「ルーズベルトが？天罰でも喰らったか。」

「時期に佐藤元帥も喰らうと思いますよ。」

「酷いな。ま、地獄に堕ちるのは変わりないだろうけど。」

「私は天国に行きたいですよ。」

「お前は行けるから安心しろ。」

すると伝令兵が艦橋に入ってきて

「各艦艇は砲撃準備完了。命令を求む。」

「砲撃許可。灰に変えろ。」

佐藤元帥の命令で戦艦と航空戦艦が砲撃を始める。

「駆逐戦隊は潜水艦を発見。追撃を行います。」

艦橋には各部署から矢継ぎ早に報告が届く。

—サンフランシスコ郊外の高台—

「ああ、俺たちの街が。」

目の前で破壊されていく街を見て避難した市民は絶望する。

「くそ、海軍は一体何をやっているんだ!？」

市民は何も出来ない海軍を責める一方である。だが、

「おい、あれは何だ？」

市民の一人が山肌から出てくる数隻の戦艦を見つける。

「おい、あれはユニオンジャック。英海軍だ!!！」

—皇道艦隊—

「!、電探に感あり。敵艦隊接近!」

電探室から予想外の報告が入ってきた

「ばかな!。敵の海上戦力はいないはず。」

「はい。しかし、電探の捉えた大きさから推定して戦艦8隻の艦隊です。」

「護衛艦は?」

「いえ、確認できません。航空戦艦から偵察機が発艦しました。」

敵情確認の為に航空戦艦天照から瑞翔すいしょうが飛び立った。

「敵艦艇発見。艦尾のマストは・・・ユニオンジャック!?!。間違
いありません。英海軍です。」

偵察機からの報告を信じられない佐藤元帥は

「もう一度確認しろ。」

「何度見ても同じです。キングジョージ?世級4隻クイーンエリザ
ベス級4隻の艦隊です。」

「何故英海軍の戦艦がここに?」

「分かりませんが不味いです。直ちに撤退を。」

「分かっている。全艦全速力で離脱。」

実はこの所英海軍はまず独逸の水上戦力よりも潜水艦を脅威と見なして、対潜戦闘に主眼を置いていた。その為、役に立たない戦艦を米国支援でサンフランシスコに停泊させていた。

—英海軍 戦艦アンソン—

「日本海軍は撤退を始めたようです。」

遣米艦隊指揮官のリチャード・バートレット大將は参謀の意見を聞き

「逃げてでも無駄なのに。まあ、直ぐに分かるだろう。」

—皇道艦隊—

「あれは？はっ！両舷停止！！！」

神武は後方の艦艇に注意しながら停船する。その理由は

「遣られたな。」

目の前に輸送船が一行に固定されて留まっていた。

「恐らく、我々が入ったのを見て遣ったんでしょう。如何しますか？」

「砲撃したいが、そんな事をすれば輸送船が湾に着底して完全に動

けなくなるから出来ないし。」

「では、如何します？直ぐに英海軍が追いつきますよ。」

だが、既に捉えられて砲撃を開始された。

「まっ、まずいですよ。幾ら神武型でもここまで集中砲撃されては。」

「後部主砲は？」

「砲撃で砲弾を全て使いました。前部主砲はまだ残っています。」

「馬鹿者が！！。一体何をやっておる。」

「しかし、これでは動けませんよ。」

確かにこのまま動けなければ一方的のに砲撃を受ける事になる。佐藤元帥は

「仕方が無い。伝令兵。」

「はっ。」

「各艦艇に打電。『全艦。我に続け。』急げ！！」

「了解。」

伝令兵は大急ぎで艦橋を出て行く

「何をするおつもりで？」

「任せろ。全速前進！！」

神武は機関が故障するのではないかというぐらいの急加速で輸送船団に向かっていく

—英海軍—

「敵戦艦1隻が輸送船団に向かって行きます。」

「馬鹿め。気でも狂ったか？」

—皇道艦隊—

「行っけー！！。」

神武はどんどん輸送船に向かっていく。後続の艦艇も神武を信じて単従陣で続く。

そして、

メキメキメキ。耳を劈く様な音がして、輸送船が真っ二つになった。

「脱出成功。各艦180度回頭し、一斉砲撃。」

—英海軍—

「ばっ、馬鹿な！？輸送船を真っ二つに折るなんて。」

リチャードは信じられない表情になるが、次の報告で正氣に戻る

「敵艦隊一斉に回頭。わああ！敵の主砲が全て此方に。」

そして、皇道艦隊は一斉に砲撃を始める

「くっそおおお！！」

リチャードの最後の断末魔が艦橋に響き渡り、次の瞬間には艦橋など艦の至る所に命中してアンソンは轟沈する。残りも次々と撃沈されて壊滅した。

—皇道艦隊—

「敵は全滅しましたね。」

「ああ、それで被害は？」

「艦首が損傷しましたが、多少の歪みなので3日もあれば直ります。ほかは特に目立つ損傷はありません。」

「あれほどの砲撃でもか？」

「はい。流石は平賀さんの設計した艦です。」

平賀^{ひらが} 靖彦^{やすひこ}。紺碧会のメンバーで高野に皇道の艦隊思想を持ちかけられて設計。前世で言う造船の神様と言われた平賀 讓^{ゆずる}海軍技術中將である。

「だろうな。これで我々は豪州に上陸できる訳だ。一先ずハワイに帰還しよう。」

皇道艦隊の残った艦艇は帰還の任に就いた。

豪州占領作戦 前編

先の原爆工場破壊作戦の一環としてパナマ運河を再度封鎖した。それにより、豪州へはより一層補給物資が届かなくなった。しかも、イギリスともマラッカ海峡の制海権は日本軍にあるため、補給を受けられない。その為、豪州でのアメリカ軍とイギリス軍の士気は低下の一途を辿った。そんな中、突然大統領の死、これにより士気は殆ど零の状態に陥ってしまった。

—ワシントンD・C. ホワイトハウス—

ここでは、憲法に従って新大統領となったトルーマン大統領はこの戦争の終わらせ方を模索していた。

（私が日本と講和会議を開催するのもよし。しかし、この国の影に潜む連中はそんな私を生かしておくはずがない。）

トルーマンはなんとか日本と講和できないだろうか、側近等との会話では想像できない事を考えていた。

—ハワイ 真珠湾日本海軍基地—

「アメリカの艦艇でもはや太平洋に居る主力艦は零になった。これでいよいよ豪州に乗り込めるわけだ。」

高杉は会議室でこう言い放った。

「はい。マッカーサーを捕虜にしたら如何しますか？」

「無論、米本土へと返すさ。それと忘れてはならんが、民間人には被害が出ないように戦うんだぞ。」

「勿論です。上陸する陸軍と海軍陸戦隊にも厳命しておきました。」

「では、出撃とします。」

高杉は席を立ち、会議室を出て行った。他の指揮官も順次部屋から出て行く。

そして、予定通り深夜の3時に珊瑚海や豪州近海に到着する。

一皇道艦隊 神武一

「夜明けを待つて第一次攻撃部隊は出撃します。ガダルカナル基地航空隊の方も出撃できるようにしています。」

参謀の輝政中佐が佐藤元帥に伝える。

「分かった。しかし、いきなりシドニーに攻撃を仕掛けるとは高杉さんも考えたな。」

シドニーのボンダイ・ビーチに直接上陸を仕掛け、突進作戦でキャンベラの連合軍司令部を占領するというある意味世界一の突進作戦である。

「トラック諸島では空挺部隊が出撃したと電報が届きました。」

「富士計画の一環で生産された大型機か。確か10機で4個大隊は運べるというそうだが。」

「はい。予定に間に合ってよかったです。」

「では、そろそろ此方も出撃と行きますか。」

坂本艦隊は前進して輸送船団をビーチへと向かわせる。高杉、皇道艦隊は攻撃隊を発艦させる。

一空母 青龍一

「旗艦より発光信号。攻撃隊の発艦を命じる。」

「攻撃部隊出撃。」

命令を受けた攻撃隊が各空母、航空戦艦から出撃する。

皇道艦隊第一次攻撃隊 戦闘機136機 爆撃機160機 攻
撃機220機

一戦艦 神武一

「凄い眺めですね。沢山の航空機が一斉に空を飛ぶ姿なんて初めてみましたよ。」

「輝政。作戦は順調か？」

「勿論です。空挺部隊も6時に到着して部隊を降下させますよ。」

「いいか。豪州占領（実質は連合軍本部占領）は1週間でやらなければならない。絶対に遅れてはならん。」

「分かっております。」

燃料の関係で1週間しか留まっていられない。その為、この作戦はスピードが鍵を握っている。

「二式超重戦車がどこまでやってくれるか。」

佐藤元帥はそう独り言を言った。

「敵飛行場視認。戦闘機を優先的に破壊しろ。」

攻撃隊隊長の旭川中佐は空挺部隊の安全を考えて戦闘機を優先的に破壊するよう命じた。

「投下！！」

250kg爆弾が落とされ、駐機されていた戦闘機が破壊されている。

「畜生、^{ジャップ}日本め。」

パイロットは急いで戦闘機に向かうが、次々の破壊されており、のんびり乗機してエンジンを掛ける余裕がない。

次は勿論爆撃機が狙われた。此方は大型の為簡単に破壊をされ、稼動機が無くなった。

「畜生。爆弾を余らせちゃったぜ。」

投下しきれなかった爆弾の捨て場所を探す攻撃隊は

「滑走路へ投下しちまおう。」

そう言って滑走路に爆弾を落とし、使用不能にした。

一方、上陸した部隊は。

「突撃しろ！！。臆病な連合軍など恐れるに足らず。」

上陸部隊指揮官の敷島^{しきしま} 信彦^{のぶひこ}少将は日本陸軍内でも猛将と知られ、ハワイ占領にも貢献している。

ビーチにはM4シャーマンと野戦砲などが在り、これで応戦してきたが、二式超重戦車の装甲は厚い為、何の損害も無いまま上陸を許してしまう。

「くそ、連中の戦車は化け物か？」

75mm砲でも傷一つ付かずに前進を続ける二式超重戦車を見て米

軍は恐怖に吞まれる。

「これでも喰らえ!!」

一人の米兵が120mm野戦砲を放ち、これが二式超重戦車に命中し、停止した。

「やったか？」

停止した戦車を見て米兵は喜びの声を上げるが、次の瞬間には停止した戦車から機銃を浴びて死亡した。

「残念だったな。この戦車の前部装甲は320mmだからそんな小砲では役に立たないよ。」

最後のシャーマンが怒り狂ったのか主砲を撃ちながら突進を始める。

「やる気か？主砲放て!!」

二式超重戦車の170mm砲をシャーマンは耐えられるはずも無く破壊された。

「上陸支援部隊に入電。『我ビーチを占領す。支援に感謝。』」

ビーチを完全に占領した日本軍はシドニーへと突入していった。

豪州占領作戦 中編

シドニーに突入した日本上陸部隊とシドニー突入との絶妙なタイミングで降下した4個大隊はシドニーに駐留する連合軍を混乱させた。

「畜生！。援護の航空機は来ないのかよ？」

先程援護にの為に離陸したという連絡を受けて期待していたB-25とA-20、それと護衛のP-40がなかなか来ないので守備隊は不安と怒りが立ち込めていた。

「日本軍が来たぞー！！！」

突然偵察に出ていた部隊が戻ってきて、守備隊は陣地に入り、反撃を待った。そこへプロペラ音がして

「ようやく来たか。頼むぞ航空隊。ジャップ日本の戦車を蹴散らしてくれよ。」

だが、一人の兵が叫ぶ

「日本の航空機だ！！！」ジャップ

その言葉に驚いて全員が上を向く、そこに見えたのは日の丸を付けた日本の風海であった。しかも、守備隊の構築した陣地に急降下を掛ける。

「退避！！！」

急いで陣地から出て一目散に逃げる。そこへ爆弾が命中し、陣地は破壊された。

「くそ！。味方の、味方の航空機は何処にいるんだよ！？何故来ないんだ！？」

実は来ないのではなく来れないのだ。出撃した爆撃機は運悪く哨戒中の日本偵察機に発見されて戦闘機隊が迎撃に向かって全滅したのだ。護衛機も奮戦したが、機体が旧式のため敵うはずも無く全滅している。

「仕方が無い。シドニーから撤退してキャンベラで迎え撃つ！！」

現地守備隊はシドニーから脱出して一路キャンベラを目指す。即ち、日本軍はシドニーを占領した事になる。

—日本軍司令部—

「連合軍はシドニーから撤退していると哨戒中の偵察機が知らせてきました。」

日本軍司令官の敷島少将はコクリと頷く。それを見た参謀は

「司令。我々は追撃をすべきです。今ここで叩けば後が有利になります。」

「参謀。私もそうしたいが我々の戦車の弱点は何だ？」

参謀はそれを聞いて思い出したように口を閉じた。二式超重戦車は

重装甲で脅威とも言うべき防御力を持っているが、その分遅いのである。一緒に上陸させた97式中戦車では追撃は出来てもシャーマンは壊せない為、出しても損害が増えるだけである。

「海軍に応援を頼んで、航空機で追撃をしてもらおう。」

「しかし、それでは海軍の手柄になってしまいます。」

「手柄を気にしていたら結果を出す事は出来ないぞ。手柄よりも作戦の成功を優先させたまえ。」

史実でも軍令部発表は海軍と陸軍の手柄の奪い合いのようなものである。それが原因で勝機を逃した作戦は幾つかあり、結果を出せないものも多数ある。

直ちにこれは海軍に具申され、航空隊を出撃して逃げる部隊とキャンベラに駐留する守備隊を攻撃すべく出撃した。だが、出撃を終えて暫くすると。

「電探室より艦橋。接近中の敵機確認。機数はおよそ40機。」

艦橋に入った声を聞いて佐藤元帥は

「白鷗と黒鷗に連絡。迎撃隊を出撃させろ！」

知らせを聞いて航空機が軽空母の甲板に並べられる。新型艦上戦闘機「荒鷲」の機体下部に装着されたジェットエンジンに点火させようとする。

「いいですか？30分しか戦えませんよ。それを過ぎると海水浴を

楽しむ事になりますから気をつけて下さい。」

「分かっているよ。絶対に全機撃墜してやるから待っている！」

そう言うのと整備兵は離れる。それを確認したパイロットはジェットエンジンに点火させる。すると、轟音と共に1機、また1機と離陸していく。

「いいか？絶対に艦隊に接近を許してはならんぞ！」

「隊長。敵機確認。大型機15機、中型機10機、戦闘機25機です。」

「了解、こちらでも確認した。全機突撃！！。」

荒鷲は一斉に降下をして、まず隊長機が前方を飛ぶB-17に狙いを定める。

「撃——！！！」

機首に備えられている30mm4門は火を噴いて機体を蜂の巣にする。いくら防御の高いB-17といえど、30mmに耐えられるはずがない。

敵は急いで散開して各機で艦隊に向かうが、葛城の航空管制を受けている戦闘機から振り切るのは困難であり、たどり着けたのはB-25が2機だけである。

「仲間を失ったんだ。その敵を撃たして貰うぞ。！！！」

B－25は神武に向かって突進をしていく。これを見た艦橋にいる佐藤元帥は

「面舵一杯！！。最大戦速！！。」

神武の機関が唸りを上げて右に舵を切る。だが、すでに間に合わず、艦橋にB－25が1機、右舷高角砲群に1機の体当たりを許してしまった。

豪州占領作戦 後編

一戦艦神武 艦橋一

「ウ、ウウン。」

佐藤元帥は敵機の突入の衝撃で気を失っていた。

「くそ、米軍機め。」

佐藤元帥はそう怒りを表すが、直ぐに冷静になって周囲を見渡す。

「凄いな。敵機の突入にこの艦橋は耐えたのか。」

艦橋は窓ガラスは割れているし、天井のパイプ等が落ちてきているが、艦橋自体は無事であった。

「ちよ、長官。ご無事でなによりです。」

突然声が聞こえたのでそちらを振り返ると。

「輝政!!。」

輝政はパイプの下敷きになっていた。幸い、パイプ自体は軽い為特に怪我をしなかったが、それでも頭に喰らっている為起き上がることができない。

「しっかりしろ輝政。」

佐藤元帥はパイプを退かして輝政を起こす。そこへ伝令兵が入ってきて

「長官。大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。それよりも報告を。」

「はっ、右舷第3高角砲に敵機が突入。操作員3名が戦死し、4名が重症です。第2、第4高角砲も爆発の衝撃を受けて砲が折れ曲がり、使用不能です。」

「機銃の方は？」

「格納されていた為被害は受けませんでしたが、何基かは露出できないそうです。」

「分かった。衛生兵を呼んで艦橋に居る負傷者を治療してくれ。」

「しかし、長官。その腕を何とかしなくては。」

「えっ？」

佐藤元帥は気づかなかったが、自身も右腕を負傷している。気づかなかったのは戦場にいるという緊張感と怯みだろうと佐藤元帥は考えて

（俺もまだまだ甘いな）

そう思う。

「それと上陸した部隊の方は？」

「連絡はありませんが、偵察機の報告ではシドニーを占領してキャンベラを目指そうとしているようです。」

「早いな。・・・ここを任せる。」

「はっ。長官は？」

「予備艦橋で指揮を執る。治療の方を頼んだぞ。」

「長官の怪我は？」

「心配いらん。」

そう言って艦橋を後にする。

—上陸部隊—

「敷島少将。キャンベラへの進軍命令が下りました。航空部隊と共同の下でキャンベラの連合軍司令部を占領せよという命令です。」

「よし、全軍突撃！！」

敷島少将は先頭の二式超重戦車に乗り込み命令を下す。指揮官自らが先頭に立って戦場を指揮するのは珍しく、軍令部内でも危険視扱いしているが、彼自身は兵達と同じ危険を乗り越えて勝利の喜びを実感したいと常に言っており、特に危険視していない。

佐藤元帥も彼の事を『危なっかしいが、必ず生きて帰ってくる為信頼できる』と評価している。

「全部隊突撃。1歩も引かずに突進しろ!!!。」

初めに二式超重戦車が突っ込んで敵戦車を破壊し、97式中戦車が突入して歩兵を蹴散らす。後から自動車と歩兵の銀輪部隊が残存する敵戦力を殲滅するというマレー突進作戦を応用した戦術で突撃を行っている。

ーキャンベラまでの第1防衛ラインー

「連中の戦車は化け物なのか？主砲が全く効いていない。」

シャーマンでは二式超重戦車を破壊する事はほぼ不可能であり、史実で日本戦車を苦しめていたシャーマンの姿はそこには無く、無念にも炎上しているシャーマンが多数あった。

「航空部隊は？航空部隊は何処なんだ!？」

連合軍兵は来るわけが無い航空隊をずっと待って戦っているが、向かった航空隊は艦載機に発見されて全て撃墜されており、代わりに日本の航空隊が来た。

「敵さん。今頃淡くっていますね。」

風海と銀星が急降下をして防衛ラインに爆弾を投下する。

「日本の航空機だ!!!。退避!!!!!!!。」

守備隊の怒号が聞こえるが、他の兵は目の前の敵に夢中で聞こえておらず、爆弾はその兵等の付近で爆発し、兵等を肉片に変えた。

「畜生!!。これでも喰らいやがれ!!。」

守備隊は怒り狂ったかのように機銃や持っているライフルを乱射してくるが、戦車にそのような攻撃が通用する筈がなかった。

「敵には可哀想だが、これでも喰らえ。」

二式超重戦車が横1列に並んで主砲と37mm機関砲を放って残りの敵兵をなぎ倒した。

「偵察機からは残りの防衛ラインは撤退してキャンベラに陣地を造っているようです。キャンベラには民間人は既に居らず、攻撃には絶好のチャンスです。」

無線手が皇道艦隊の偵察機から送られてくる情報を敷島少将に伝える。

「攻撃部隊は・・・無理か。」

「はい。もうじき日が落ちますので航空隊は危険です。」

「分かった。我々だけで突入しよう。」

そう言って敷島少将は部隊を前進させた。

—キャンベラへの入り口—

「これより、我々はキャンベラ市内に突入する。我々の任務はあくまでも連合軍司令部の占領であり。決して侵略ではない。その事を皆、頭に入れておいてほしい。」

敷島少将は突入前の最後の訓示を行い。部隊に前進命令を下そうとしたその時

「少将。皇道艦隊から艦砲射撃を行うと通達してきています。突入はそれからとの事です。」

「佐藤元帥。敵を少しは残しておいてくださいよ。」

—戦艦神武—

神武型戦艦と天照型航空戦艦は縦一列に並んで噴進弾の発射用意にたった。

「いつでも攻撃できます。」

「撃て。但し、司令部だけは当てるなよ。」

佐藤元帥の命令を受けて噴進弾が放たれる。それは非常に射程距離が長く、海岸線ではないキャンベラまで優に届いた。

—キャンベラ—

「なっ、なんなんだ!？」

「日本軍の攻撃です!!。」

マッカーサーは副官の報告を聞いて驚く。

「馬鹿な。ここは海岸線ではないのだぞ。連中は一体どうやって攻撃しているんだ？」

「分かりませんが噴進弾が飛んできているようです。しかも大型の。」

「何だと!？」

それぞれの主砲に合わせて配備された噴進弾は通常の主砲ほど威力は無いが、長距離を攻撃できるのでこのような海岸線沿いではない地域も攻撃することが出来る。

そこへもう一人副官が来て

「大変です!。日本の地上部隊が市街地に突入。目下交戦中だそうです。」

「脱出の準備だ。急げ!!。」

マッカーサーは副官にそう命じて車を用意させる。

—日本地上部隊—

「もう直ぐだ。もう直ぐ連合軍司令部だ。このまま突き進め。」

敷島少将は一気に戦車部隊を進めて占領へと向かった。後から歩兵や97式中戦車が続く。

「突入しろ!!。」

司令部前に着いた敷島少将は戦車から降りて歩兵を率いて内部に突入した。内部では連合軍兵がバリケードを張って銃撃してきたが、此方も急いでバリケードを作って応戦を開始した為、双方共に被害が出始めた。

そこへ、敵側の壁が崩れて97式中戦車が現れた

「^{ジャップ}日本!!。」

驚いて97式中戦車に銃を向けるが、その隙に日本軍兵が一気に間合いを詰めて

「動くな!!。」

残った連合軍兵全員の頭に拳銃を突きつける。

「参った。」

連合軍兵は銃を落として降伏した。一步その頃マッカーサーは

「司令部は陥落したそうですよ。」

ハンドルを握る副官は後部座席にいるマッカーサーに言う

「だろうな。とにかく急いでくれ。」

だが、その時上空には

「おい、あれは我が軍の軍用車ではないよな。」

偵察に出ている瑞翔が国道を走るマッカーサーの車を見つけた。

「とにかく場所を報告します。」

後部座席の無線手が地上部隊に連絡をいれて確認する。

「大変です。あれはマッカーサーの車の可能性があります。」

「分かった。確認しよう。」

そう言って機長は乗機を降下させて車の真上を飛ぶ

「おい、敵機が来たぞ！！。急いで振り切れ！！。」

マッカーサーは怒鳴るが、速度差を考えると不可能な注文であった。

「タイヤを狙ってパンクさせます。」

瑞翔は旋回してマッカーサーの車の真正面から、すれ違いざまに機

銃を放つ。

機銃弾はエンジンやタイヤ、更には副官の体に命中して車が横転し停止する。

「くっそ。」

なんとか車から這い出したマッカーサーだが、副官は死亡し、自身も足を負傷して動けなかった。

そこへ報告を受けた敷島少将指揮下の自動化歩兵部隊が到着してマッカーサーを捕虜にする事が成功する。

巨艇、欧州を飛ぶ 前編

豪州ではマッカーサーが捕虜になったと知らせを受けて、各地の守備隊は降伏を始めるが、一部の部隊は徹底抗戦を訴えて反撃するも、二式超重戦車で突撃すれば降伏する部隊があった。それでも交戦した者はどうなったのか想像にお任せする。

一帝都 軍令部一

「高野さん。私の艦隊の旗艦は損傷しまして、3ヶ月は作戦に従事できません。」

「分かっています元帥。少なくとも貴方の主戦場である太平洋に敵艦隊は存在しなくて、暫くは安全ですので修理もゆっくり行えばよいでしょう。」

「確かに現在はそのようですが、今アメリカはトルーマン政権下で着実に海上戦力を補強し始めています。このまま何もしなければまた敵艦隊が現れますぞ。」

「だから落ち着いてください。現在貴方の艦隊の戦艦は修理と電探の改修のためドック入りになっております。それに豪州占領作戦で神武の艦橋に居る者は大勢負傷したと聞いています。彼らの戦線復帰がなければ戦力は無事でも戦線に出せません。」

「分かりました。」

「ところで、ナチス・ドイツの進攻は聞いていますね？」

「はい。既に欧州大陸は殆ど占領されており、残っているイギリスも危ない状態と聞いております。それに前世では成し得なかったソ連侵攻も着実と行っており、衰えを知らないと聞いております。」

「そのイギリスを支援する作戦があるのだが。」

「えっ？」

「実はドイツの原爆工場の位置が特定できたのだ。場所はニュルンベルク、ドイツの防空網のど真中だ。」

「さすがは用心深いヒトラーが指示しただけのことはある。警戒は完璧という訳か。」

「そこで、貴方も富士計画はご存知ですね？」

「ええ、豪州占領のときにもその陸上機が落下傘部隊を輸送してきたので。」

「その水上機がこんどそこを爆撃する計画がある。」

「何だって？」

「既に訓練は終えている。そこで君は紺碧島に飛んでこれを前原に渡してくれないか？」

そう言って高野は封筒を佐藤に渡す。

「ええ。しかし、あそこには滑走路はありませんよ。」

「横須賀に水上機を用意した。それで向かってくれ、話はこっちでしておく。」

「分かりました。」

そう言って軍令部を後にする。

一横須賀 艦艇停泊所一

そこに1機の雷洋が駐機されていた。そこへ一人の飛行兵が来て

「貴方は佐藤元帥ですか？」

「はい、そうです。」

「お待ちしております。私は紺碧艦隊航空隊所属の大竹大尉です。貴方を連れてくるようにと前原長官から言われて参りました。」

「そうか、宜しく頼む。」

そう言って二人は雷洋に乗り込んだ。大竹はエンジンを掛けて離水する。途中、給油を受けて紺碧島へと着いた。

一紺碧島一

「ようこそ紺碧島へ。」

出迎えたのは前原少将であつた。佐藤は雷洋から降りると敬礼をする。

「それでは此方へ。」

案内されたのは紺碧島内にある作戦会議室だつた。

「まずはこれを。」

佐藤元帥は高野軍令部総長から預かつた封筒を前原少将に渡した。

「拝見します。」

前原は封筒を開けて中の命令書に目を通した。

「本気ですか？」

「勿論です。少将の艦隊なら容易に潜入できるでしょう。」

「しかし、まだドイツの方まで行ったことはないぞ。」

「大丈夫です。英国が支援を行いますので、連中も水中まで監視を出来る余裕は無くなりますから。」

「確かにそうかもしれませんが。」

「ドイツは今現在原爆完成に最も近い国です。そして、あの独裁者が超兵器を持ったら世界がどうなるかお分かりでしょう?」

前原の脳裏に黙示録の予言が浮かぶ。それが現実を起こるという想

像をした前原は

「了解しました。早速、目的の海域に潜入させていただきます。」

「では、私はこれで。」

佐藤元帥が扉を閉めたのを確認した前原は

（全く。人類は手を出してはいけない物にまで手を出すのか。）

そう考えるのであった。

次の日、紺碧艦隊は予定通り紺碧島から出撃、目的海域に向けて全速力で向かった。そして、2週間後に完成した富士3機が日本本土を飛び立った。

巨艇、欧州を飛ぶ 後編

飛び立った富士はソビエト連邦の北方を抜けてポーランドに入り、そのままドイツのニュルンベルクに向かう航路であった。

「各機、機銃のチェックを行え。」

富士爆撃隊の隊長である臼井大佐が無線で連絡をする。

「了解。機銃試射始め。」

各機がそれぞれで機銃を試射する。

「すばらしい。流石は天才物理学者と泰山航空工業が生み出しただけはある。」

「司令は今度の対独宣戦布告はどう思いますか？」

「さあな、ただ大高総理も苦渋の決断だと高野総長は言っておられた。今の独逸の技術を甘く見るなよ。聞いた話ではジェット戦闘機やロケット戦闘機までもが実戦に配備されていてイギリス空軍の爆撃機を撃墜し続けているそうだからな。」

「では、今度の英軍の協力って。」

「そうだ。彼等は死ぬ覚悟で我々の囷になってくれるのだ。彼等の為にも作戦を成功させるぞ。」

「勿論です。元より私は失敗など考えられないと思っています。」

—独逸・ポーランド国境—

「そろそろ英空軍が独逸本土へと突入する頃だろう。」

臼井は時計を見て確認する。

—英国空軍 デュッセルドルフ爆撃隊—

「目標まであと少しだ。気を抜かずに警戒しろ。」

爆撃隊はランカスター大型爆撃機とモスキート双発戦闘爆撃機が独逸防空圏内に突入する。それを独逸の防空レーダーが捉えて、近くの飛行場からは

「戦闘機隊、スクランブル発進！！スクランブル発進！！」

空軍基地はレーダー基地から報告を受けて迎撃機の発進準備に入った。

「スクランブル機のME163出撃準備良し。続きME262も出撃準備完了。」

基地司令の命令を受けて、史実の第二次大戦のドイツ空軍最後の砦と言われ、戦史に残る戦果と栄光を刻んだ2種類の戦闘機はエンジンを点火させて迎撃に飛び立った。

「敵機接近!!。」

英空軍の爆撃隊がロケット戦闘機のME163にまず最初の攻撃を受ける。この機体は当時の最高上昇力を持っており、高度1万メートルまで3分少しで到達できる。

「がああああ!!。」

戦闘を飛ぶランカスターからパイロットの断末魔が聞こえたかと思うと、機体から火が出て高度を落としていく。

「迎撃体勢!!。迎撃体勢!!」

すかさずモスキートが迎撃に向かうが、速度差がありすぎて追いつけない。その間にME262がランカスターを襲って損害が出る。

「対空防御!!。対空防御!!。」

ランカスターも備え付けの機銃で応戦するが、俊敏に反応し、運動性能も良好な戦闘機にはなかなか当たらない。

「くっそ、祖国に栄光あれ!!。」

この言葉を最後にランカスターは全滅。モスキートも数機は運よく防空網から逃れたが、それでも片方のエンジンが止まっているなど、帰ってこれたのが不思議な位の損害を出し、二度と飛行が不可能な状態であった。

—富士爆撃隊—

「司令、英国空軍の無線を傍受しまして、壊滅的被害を被ったようです。」

「そうか。だが、よくやってくれた。もうじき原爆工場だ。」

眼下には研究所が見えてくる。

「!!。敵機接近!!。」

目の前には幾つかの黒点が見え、それがだんだん飛行機の形になっていく。

「爆撃手、準備はいいか？」

「いつでもどうぞ。」

爆弾倉を開放して工場の上空に向かう。

「敵機はTa152。真っ直ぐ突っ込んできます!!。」

Ta152。主にジェット戦闘機が着陸時に無防備になるため、そこを狙った連合軍の攻撃で被害が出始めた。それを受けて、この機体は主に着陸時における低高度防空を行うのが主任務であった。だが、本来は高高度迎撃用に開発された機体であり、あまり向いているとは言いがたかった。

「投下!!。」

この作戦の為に開発されたTY爆弾を3機の富士は投下する。それは熱源誘導式で、工場から出る高温の蒸気や煙に誘導されて命中することに成功した。

「全機、防空戦開始!!。」

臼井司令は無線で知らせる。それを待ってましたと言わんばかりに機銃を放ち、敵機を寄せ付けなかった。

「高度2万まで上るぞ。」

司令の指示で各機は2万まで上昇した。流石にTa152はこんな高高度まで届かないため離脱する。

「敵さんは撤退しますね。」

「ああ。」

降下していく機体を見て臼井司令は言う。だが、

「電探に感あり。早いです!!。」

「あれか？」

見えたのはジェット戦闘機だった。ME262とは違い、背負式の単発機である。

「ハインケルHe162だ!!。」

He162。サラマンダーの愛称で知られる独逸の国民戦闘機であり、その由来は一般市民が生産と搭乗を想定した戦闘機開発計画からきている。だが、初期のジェットエンジンでも多く見られたエンジンの不調は本機には致命的であり、ME262のような双発機ならともかく、単発機の為に停止したら不時着、最悪は墜落となった。実際に起きて、死者も出ている

「連中には気をつけろ！！。」

Ta152とは比べ物にならない俊敏な機動力を生かして翻弄するが、次第に慣れた富士の機銃手によって損害が開始した。

「已むを得ん。ロケットブースターに点火だ。」

白井司令はロケットブースターに点火して、各機もこれに続く。

「し、信じられない。あの巨体でこのスピード！？」

ハインケルのパイロットは心底驚いた。

ーベルリン　首相官邸ー

「ゲーリング君。これは一体どういうことだ？」

「も、申し訳ございません総統。」

「東洋の島国なんかには我が帝國が爆撃されるなどあってはならんことだ。」

「仰るとおりです總統。」

「では何故？何故日本軍の爆撃を止められない？空軍は一体何をやっておったのだ！？」

「目下、侵入した英空軍の方に迎撃機を差し向けてしましまして、日本機を対応出ませんでした。」

「言い訳はよい。それで被害は？」

「は、調査中ではありますが、被害は甚大と聞いております。」

そこへ空軍情報参謀が入ってきて

「ハイル・ヒトラー。總統閣下、迎撃に上ったパイロットの写真が届きました。」

空軍参謀は独逸式の敬礼をしてヒトラーに写真を渡す。

「うむ、6発機か。日本は超大型飛行艇を開発したのだな？」

「はい。」

「これが地球の裏側から我が帝國に來たというのか？」

「はい。それに同規模の日本の超大型重爆撃機を目撃したとオーストラリアに潜入させているスパイが言ってきました。初めは冗談と思いましたが、これを見る限りでは恐らく。」

「ゲーリング君。君はたしかこの機は米の五大湖工業地帯を狙うと

言っていないかったか？」

「はい。全く持って不可解な行動です。」

「ゲーリング君。今度日本の航空機に本土侵入されたら、軍法会議に掛けて斬首刑にするぞ。」

「いえ、二度とこのような事態は起きないと誓います。」

それを聞くとヒトラーは電話を取って

「海軍長官を呼べ。」

招かれた海軍長官のヴィルヘルム・フォン・リッペは来るなりヒトラーに

「グラーフ・ツェッペリンの出撃は可能か？」

「艦隊編成は終えており、命令さえあればいつでも。」

「では直ちに出撃だ。南アフリカに配備し、当海域の防衛に当たらせろ。」

「はっ。」

この後、ヒトラーの命令どおり独逸海軍初の航空母艦グラーフ・ツェッペリンは出撃し、南アフリカ防衛任務に就いた。そして、富士爆撃隊は紺碧艦隊の給油を受けて本国へと帰還した。

新編成艦隊出撃、新たなる戦場へ

昭和19年。日本は南樺太にユダヤ人国家の東方エルサレム共和国を建国させた。これによって国際世論は日本に友好的になり、大勢のユダヤ人科学者が日本に協力した。この技術を生かして、英国支援の独逸原爆工場破壊に成功。それにより日英同盟は正式に復活、独逸に本格的な宣戦布告を表明した。

日本は日英同盟成立で印度まで進出。中国共産党と国民党の内乱が続く中国国内にアメリカが支援していた援蔣ルートを遮断。日本は共産党指導者の毛沢東との取り決めどおりに国民党は勢力を失い、中国は共産党指導になった。これにより、中国国民党を支援していたアメリカはパナマ運河復興資金と重なり、莫大な損失を受けることとなった。さらに再編成された独逸海軍航空機動部隊と超大型爆撃機のヨルムンガン드가五大湖工業地帯を爆撃、もはやアメリカの経済的損失は計り知れない状態となった。

—昭和20年 8月14日—

「諸君。我々は遂に念願の日英同盟を復活させることに成功した。だが、独逸軍の進撃は凄まじく、既にヨーロッパとアフリカの北部の一部は占領されている。そこで諸君は遣英艦隊として英国支援と占領された諸地域の解放に従事してもらいたい。」

「まあまあ総長。カレーは熱いうちが美味しいのです。食べながらでも構わないでしょう。」

そう大高首相に指摘されて高野は

「そうですね。では諸君、出撃前の最後の会食だ。遠慮なくやってくれ。」

それを聞いて集まった英国支援艦隊の乗組員は食事を始める。

「ところで諸君。明日は出撃だが、その日は一体何の日か分かるか？」

大高は食事を一時中断して皆に問いかける。

「8月15日。」

そう、前世の昭和20年8月15日、日本は原爆を2発喰らい、15日に時の昭和天皇が戦争の終結。すなわち、玉音放送を行った日である。これを聞いた国民は涙を流し、両膝を着いて泣いたりした。中には絶望のあまり気を失うものまであった位である。だが、海軍厚木飛行場の小園安名大佐は降伏を受け入れずに徹底抗戦を主張して将兵を率いての反乱も起こった。

帰りの車の中で大高は帝都の街並みを見て

（不思議なものだな。前世では、この日は何も無い焼け野原だったのだが、後世では未だに繁栄をしている。）

と思った。

「長官の念願であつた日英同盟も復活しましたね。」

「殆どは貴方のおかげですよ、佐藤元帥。」

「私は何もしていませんよ。」

「まあ、その話は措いとして、独逸の進撃はご存知ですね？」

「ええ、既にヨーロッパ全土を占領されて、アフリカや中東方面にも進出していると聞いています。」

「その通りです。そこで、明日に遣英艦隊派遣を決定しました。」

「へえー。」

「そこで、貴方にはこの艦隊の一つである神風艦隊を指揮していただきたい。」

「ええ!？」

思わず大声を上げてしまう。

「旭日艦隊の支援、神風艦隊をの指揮を一時的に執っていただくたい。」

「しかし、私は皇道艦隊を指揮しているんですよ。他に相応しい人がいるでしょう?」

「いるにはいるのだが、旭日艦隊指揮官の大石元帥が言うには『佐藤佳樹に戦艦と空母を使わせたら右に出る者はいない』と言ってな。」

「はあ。まあ、教官の言うことには逆らえないからな。」

佐藤元帥は海軍士官学校時代に大石元帥の指導を受けており、今でも彼を尊敬している。

「それで、参謀はどうするのだ？ 皇道艦隊から輝政中佐を引き抜くか？」

「いえ、また別の相応しい人間がいます。」

「ほお、太平洋の海神と言われた君が推す人物だ。余程の人物なのだろう。」

「何時からそんな名で？」

「なーに、米軍の暗号を解読したら君の名がそうになっていたんだ。」

「人を軍神や神様扱いはやめてほしいものです。」

「まあな、人を神様扱いするのもどうかとは思いますが、少なくとも私も嫌だよ。」

「日本の神様は天皇だけで十分ですよ。」

「確かにな。それで、その参謀に相応しい人物は今どこに？」

「恐らく、北海道で釣りでも楽しんでるんでしょう。」

「ふむ、出撃は明日だから今から行っても大丈夫だろう。」

―北海道―

「よっと。」

湖の近くで竿のウキを投げて、引きを待っている50代位の男性がいた。両側には北極狐1匹ずつ男性の隣に座っていた。その中の1匹が歩いてくる人物に気づき、そちらへと歩いていく。

「お久しぶりですね、師匠。」

歩いてきたのは佐藤元帥であった。佐藤元帥は片膝を着いて、近づいてきた狐の顎を撫でてやると、狐は気持ち良さそうに目を瞑った。

「誰だ？」

「酷いな、貴方の下で教わった佐藤佳樹ですよ。お忘れですか？」

「知らん。」

「18歳で海軍砲術学校に入った天才と言ってもですか？」

「そんな奴も居ったかな？」

「だから、それが私ですよ。市谷猛元海軍中将。」
いちがやたける

「それで、何の用だ？」

「もう一度、海に出る気はありませんか？ 貴方を神風艦隊の参謀に任命したいと思って来ました。」

「ない。」

「貴方の友人がいる英国を支援する為の艦隊です。」

「！！。 なっ！？」

「ナチス・ドイツの進撃はご存知ですね？ 直に英国もその進撃に掛かり、占領されるでしょう。 そうしたら、貴方の友人とも会えなくなりますよ。」

「・・・分かった。 言っとくが、私は英国にいる友人を助けるために志願したのだからな。」

「分かっております。」

「ところで、狐を連れて行っても構わないか？」

「別に構いませんよ。 私も狐は好きなので。」

— 8月15日 —

旭日艦隊は横須賀から、神風艦隊は呉から出撃準備を終えて出撃の命令を待っていた。

「では暫しの別れだな輝政。」

「長官。」

「皇道艦隊は頼んだぞ。俺が行くまで旗艦を沈めさせないでくれよ。」

「勿論ですよ。新司令長官の谷崎大將は貴方ほどではありませんが、優秀な司令官なので。」

「谷崎なら十分だろう。皇道艦隊第2艦隊の指揮を執っていたんだ、信頼もできるしな。」

「長官。そろそろ時間ですよ。」

佐藤元帥は腕時計を見た。10…00分。

「じゃ、今度会えるのは日米講和後だな。確りと補佐を頼むぞ。」

「お任せ下さい。」

そう言って輝政中佐は敬礼をする。佐藤元帥も答礼をし、神風艦隊旗艦の島鶴のラッタルを上げる。

— 神風艦隊旗艦 空母 島鶴艦橋 —

「諸君。私が本艦隊の指揮を執ることになった佐藤佳樹元帥だ。」

艦橋に入ったと同時に、艦内マイクを使って艦隊の乗組員全員に伝

える。

「我々は旭日艦隊の支援という任務がある。諸君らはそれを全身全霊で励んでもらいたい。以上。」

それと同時に出撃命令が出され、艦隊は出撃を開始する。佐藤元帥は飛行甲板に自分と島鶴の全乗組員を飛行甲板に出して、

「諸君。祖国から暫しの別れである。全員、帽振れー！！」

佐藤元帥の号令で、島鶴乗組員は帽子を離れていく祖国へと振る。出港には前世ほど軍事機密扱いはず、逆に大々的に知らせた為、大勢の見送りの人間が港にはいる。彼らもまた帽子を振るか、手を振っている。他の艦も、艦長が自主的に甲板に出して、祖国との別れの帽振りをしている。

（さらばだ。だが、我々は必ず戻ってくる。恒久世界平和を実現させて。）

今、勇ましい旭日旗を掲げた二つの艦隊は一路、トリスタン・ダ・クーナ島を目指して外洋に出た。

新編成艦隊出撃、新たなる戦場へ（後書き）

感想と評価をお待ちしております。

南アフリカ 通商破壊潜水艦撃沈

改装を終えた紺碧艦隊も対独戦闘の為に紺碧島を出撃する。

その同時刻に、英国領の印度から神風艦隊と旭日艦隊が出撃した。入れ替わりに、日本陸軍の増援部隊を乗せた輸送船団が駆逐艦の護衛の下で到着した。

皇道艦隊の戦艦はドックで改装し、駆逐艦は工作艦で改装が進められているため、現在は天照が旗艦となっている。

一神風艦隊旗艦 島鶴一

「諸君。我々は今からトリスタン・ダ・クーナ島に向かい、旭日艦隊と共に独潜水艦を撃沈する。」

「しかし、日本武尊は戦艦ですよ。対潜戦闘の方は。」

「大丈夫だ。日本武尊は対潜弾も搭載しているから、潜水艦でも安心して撃沈できる。」

「へーえ、流石は対独戦用に造られているだけの事がありますね。」

「では、私はその日本武尊に向かいますか。」

佐藤元帥は日本武尊で大石司令長官と南アフリカでの戦闘方法を討議すべく、島鶴に配備された単座オートジャイロに乗って日本武尊

に向かった。

―旭日艦隊旗艦 日本武尊―

「何時見てもでかいな。島鶴のほうがでかいが、此方は戦艦だけに排水量以上の大きさが感じられる。」

そこへ日本武尊から発光信号が来た

「なになに、後部甲板へと着艦せよ。」

佐藤元帥は言われたとおりに日本武尊の後部甲板へと着艦する。

「お待ちし居ました。私は原元辰、旭日艦隊の参謀長です。」

「どうも、私は神風艦隊司令の佐藤佳樹元帥です。」

「では、長官がお待ちです。」

そう言って案内されたのは長官室だった。

「おお、佐藤君ではないか。士官学校以来か？」

「ええ、一応そうなりますね。」

「はっはっは、大きくなったではないか。アメリカ海軍の艦艇を大量に撃沈したと聞いていてな、やはり俺の見込みは間違っていないかったな。」

「もう一人の教え子である幽霊も良くやっていますよ。」

「前原か、あいつも相当優秀な奴だったからな。今は潜水艦隊の指揮を執っているんだっけ？」

「はい。そして、今頃は紅海辺りに進出しているんでしょう。」

「そうか。ところで、今回の作戦だが、貴官の艦隊は対潜哨戒機で敵潜を索敵し、発見しだい沈めていただきたい。」

「別に構いませんが、そちらは？」

「俺の方も潜水艦を沈める。だが、我々の目的はジブラルタルにいる独戦艦「ビスマルク2世」を撃沈する事だ。」

後世ではビスマルク級は現在4隻おり「ビスマルク」「ティルピッツ」「ビスマルク2世」「ティルピッツ2世」である。更に2隻が建造途中である。

「了解しました。」

それから、コーヒーをご馳走になって、島鶴へと戻った。

それと同時に対潜哨戒機の出撃準備に入らせる。

「雲電の発艦準備整いました。」

航空参謀が伝えると

「直ちに発艦し、艦隊の周囲を警戒させよ。」

命令を受けて、各空母から8機ずつの第一次哨戒隊が出撃する。それらは艦隊の周囲を警戒し、近づく潜水艦を撃沈せよと命じられていた。

「電探に感あり、深度50に敵潜。」

「了解、爆雷投下!!!」

沙良利賀哨戒2号機が早速敵潜を発見して攻撃に移る。

「電探に感健在。敵潜は生きています。現在深度70」

「付近の駆逐艦か哨戒機に救援要請を。」

救援要請を受けて、沙良利賀哨戒3号機が来て、爆雷を投下する。

「電探に感消滅。敵潜の撃沈を確認。」

海面を見ると、潜水艦の破片やガソリン、死体などが浮いてきた。

「戻って武装と燃料を補給だ。」

沙良利賀哨戒2，3号機は爆雷を補給しに母艦へと戻った。

— 旭日艦隊旗艦 日本武尊 —

「敵潜を探知!!!、右舷5000に敵潜。」

日本武尊の電探が敵潜水艦を探知した。

「対潜弾発射準備よし、撃！！！」

艦長の命令で対潜弾が放たれる。それは敵潜の近くで爆発し、潜行不能となった。

—U・970—

「急いで復旧しろ！！」

「だめです。至る所で浸水が始まっています。」

U1970潜の艦長であるヘルマン・オットー少佐はそれを聞いて

「浮上だ。緊急浮上して降伏する。」

「し、しかし艦長。我々は誇り高き独逸軍人です。降伏は認められません。」

「では君はこの潜水艦の優秀な乗組員を無駄死にせよと言うのか？」

「無駄死ではなく、名誉ある戦死です。」

「名誉か、かつてはそんな事もあったな。だが、今の我々の名誉は生きて祖国の土を踏むことだ。戦死で土を踏みたくない。」

「分かりました。緊急浮上！！」

U-1970 潜は浮上をして、モールス信号で降伏を勧告した。

日本武尊VSビスマルク？世 前哨戦

降伏を受けて、日本艦隊はUボートの乗組員を全員捕虜にし、艦長のみを日本武尊の予備士官室に軟禁していた。

そこへ扉を開け、入ってきた将校が

「司令が呼びです。一緒に来てください。」

Uボートの艦長のオットー少佐は将校に言われたとおりに長官室に連れて行かれる。

—日本武尊— 長官室—

「司令、お連れしました。」

扉を開けて、将校とオットー少佐は中に入る。

「どうぞおかけ下さい。」

少将の階級章を付けた人物はオットー少佐をソファに腰掛けさせて。

「オットー少佐、昨日降伏した艦は貴方だけです。昨日我々は13隻の潜水艦を撃沈し、乗組員は全員戦死しています。」

「13隻も!!」

オットー少佐は驚く、そしてコーヒーを注いでいた人物がオットー少佐の所に来て

「コーヒーですが、どうぞ。」

「あ、ありがとうございます。」

オットー少佐はコーヒーを受け取ると、それを一口飲んで

「う、うまい。日本は対潜戦闘だけでなく、コーヒーを注ぐことまでうまいんですね司令。」

司令と言われて、少将の階級章を付けた人物は笑い出す。

「ははは、私は本艦の艦長の富森です。司令なら今貴方と会ったでしょう。」

「え?。」

オットー少佐は驚いて先程コーヒーを渡した人物を見る。

「すみません、隠す積りは無かったのですが。私が旭日艦隊司令の大石蔵良元帥です。」

オットーはそれを聞いて敬礼をし

「し、失礼しました。しかし、司令自らコーヒーをお注ぎになるとは。」

「私以上にコーヒーをうまく注げる人物はいなくてね。」

「それで、何故あのとき我々を沈めなかったんですか？やろうと思えば何時でも出来たのでは？」

「貴方方のプロイセンの騎士道精神があるように、我々にも古くからの武士道精神があります。」

「プロイセンの騎士道精神か。まさかそれを日本艦隊の司令長官から聞くことになるとは。」

「と、言いますと？」

「今の独逸ではナチス党が台頭してからは騎士道精神が失われているんです。変わりに己の名誉や手柄の為には他人を犠牲にする党直属のエリート将校が増えてしまいました。」

「しかし、それはヒトラーの台頭を許した独逸の行く末では？ヒトラーを押し上がらせては貴方方では無いと思いますが。」

「ヒトラーの台頭を、そして第二次世界大戦を起こしたのは我がヨーロッパに広がっていた平和主義でした。第一次大戦で大勢の人命が失われ、二度とこのような戦争を起こさたく無いという願いをヒトラーはつけこんだのです。」

「するろ、ヒトラー一人の責任ではありませんな。」

「司令の思っていることも分かりますが、第一次大戦で敗れた独逸は戦勝国からの莫大な賠償金を要求され、貧困のどん底まで落ちました。あの生活がいかに大変だったのか私は経験をしたので分かります。」

独逸は第一次大戦にて1320億マルクという莫大な賠償金を請求された。それは敗戦して経済がボロボロな独逸にとっても払える金額ではなかった。そして、ドーズ案 ヤング案 ローザンヌ会議を経て30億マルクまで減った。だが、この間にもフランスがベルギーと合同でルール工業地帯を占領するというルール問題が発生し、経済の建て直しは困難になり、ようやく経済が上がってきたという時に世界恐慌が発生するというドイツにとっては非常に不運が重なった。

「我々はあの貧困生活は二度としたくない。それは全ての独逸国民が思っているところです。そして、その中で経済の建て直しを行うといったナチス党が力を伸ばしたんです。」

国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス党）は破綻したドイツ経済の建て直しを掲げ、再軍備による失業者の吸収をドイツ国内に訴えた。そして、1932年11月6日の選挙にて投票率33・1という賛成を受けて政権を獲得し、1933年1月30日にヒトラー内閣を組織。この後からヒトラー内閣の支持率は急上昇を続け、約1年後の選挙では92・2%という投票率を誇った。

「そしてヒトラーは失われた誇りある独逸人を訴えて国力を高め、この大戦に突入していったのです。」

「いや、今日は興味深いお話を聞かせていただきました。いずれ機会があればそれを大高首相にもお話し願えますか？」

「喜んで。それと、私の処分の方は？」

「貴方は我々のために働く気はありませんか？」

「と、とんでもない。いくら私が今の独逸の遣り方に反対でも、祖国を裏切るようなことはできません。」

「なにも祖国に銃口を向けろなんて言っていないですよ。貴方なら分かるでしょう？」

「まさか、偽電等を打って支援しろと？」

「その通りです。」

「……分かりました。」

2日後

「急げ。」

独逸海軍基地付近まで夜間突入した旭日艦隊水雷戦隊は仕掛け魚雷の投下準備を行っていた。

そしてその頃、海軍基地から目を逸らすために神風艦隊が独逸空軍基地を攻撃する。

「そろそろ見えてくるな。」

眼下には独逸空軍基地が見えてくる。

「各機へ、滑走路を優先的に破壊せよ。」

夜間攻撃機 海神は飛行場上空にて爆弾を投下する。それは空中でパラシュートを開き、滑走路上で爆発をする。30機の航空機に襲われて飛行場は使用不能となり、駐機されていた航空機も32機が破壊された。

攻撃が終えた頃、海軍基地に仕掛け魚雷を設置に成功した水雷戦隊は撤退する。

「全く、何て様だ。」

ジブラルタル司令のルドルフ中将は飛行場の壊滅を知り、怒りを露にしていた。

「電話を。」

従兵にそう命じて椅子に着くと、従兵が電話を持ってきた

「復旧の方はどうなっている？」

「目下修理中でありまして、直ぐに出撃はできません。」

「いいかよく聞け、2時間以内に修復できなかつたらゲシュタポに連絡するぞ。！！」

そう怒鳴って電話を切った。

そして数時間後、ヒトラーの命令で新鋭装甲空母グラフ・ツェッペリンを旗艦とする新機動部隊が出撃するが、海中から先程仕掛けた魚雷が機動部隊を襲った。

「ぎょ、魚雷です。」

「急いで回避しろ!!」

「だめです。もう、」

グラフ・ツェッペリンと駆逐艦4隻は瞬く間に被雷し、基地の直ぐ近くで沈むという最悪な光景をルドルフ中将は見ていた。

「な、何と言うことだ!?! あ、悪夢だ。これは悪夢だ!!。」

目の前の現実を到底受け入れられない。だが、

「司令、独逸海軍司令部からです。セウタ海軍基地に停泊中のビスマルク? 世を至急出撃させよです。」

「何だと?」

「どうやら敵戦艦を潜水艦が攻撃して大破させたようです。ビスマルク? 世に追撃を命じています。」

「よし、直ぐに出撃させて撃沈させろ。絶対に逃がすな!!。」

命令を受け、ジブラルタル要塞セウタ軍港に停泊しているビスマルク? 世は僚艦のシャルンホルストを率いて出撃した。

日本武尊VSビスマルク？世 決戦

出撃したビスマルク？世とシャルンホルストはカナリア諸島近海を進撃していた。

「諸君、手柄をあの目立ちたがり屋のゲーリングに横取りされてはならん！！。」

ビスマルク？世に乗艦する独逸艦隊司令官のヨハネス・ゲーテは大声で怒鳴りながら言う。

「いいか、空軍の連中が敵戦艦に対して攻撃隊が飛び立つ前に我々が沈めるのだ！！。」

「了解。」

参謀は頷いてレーダー等に目を向ける。

艦隊はカナリア諸島を抜けて、独逸艦隊は英空軍の哨戒範囲に入る。

「英軍の来襲はあると思うか？」

「可能性としてはありますが、多分大丈夫かと思います。」

「分かった。引き続き、電探には注意している。」

暫く航行を続けると、シャルンホルストの水上電探が敵艦を捕らえた。

「電探に感あり！。北西に敵艦。」

「いよいよか。総員戦闘配置！！」

両艦の艦長は戦闘配置を命じ、最大戦速で日本武尊に向かった。

—日本武尊—

「尊氏に搭載機の発進を命じろ。そろそろ独逸沿岸空軍の来襲があつてもおかしくない海域だ。」

すると電探室から

「司令、逆探に感あり。敵艦隊が此方に向かつております。」

「エサに掛かったようですね。」

「ああ。半潜はじめ。総員、主砲戦用意！！。」

大石の命令で日本武尊は半潜を始める。

「後部偽装炎の準備を急がせろ。」

大石の命令で後部に偽装炎を起こさせ、排煙によって火災に見立てる。

そして同時刻、ジャーナリストを満載した英駆逐艦「ランカスター」が日本武尊の後方海域に到着した。

「おい、あの煙は？」

ジャーナリスト等は日本武尊の後方に煙が発生しているのを見つける。

「それにもう沈みかけているぞ。」

日本武尊は半潜状態であり、知らない者が見ると沈みかけているように見える。そこに艦内マイクが

「日本武尊からジャーナリストへ、一大海戦の様子をお見せします。」

「なんだ。では、あの炎と沈みかけているのは偽装か。」

—日本武尊—

「そろそろ敵戦艦は主砲の射程範囲に入ります。」

「敵、右回頭を始めました。」

「よし、半潜やめ。砲撃戦用意!!!。」

大石は命令を下し、日本武尊は半潜をやめて浮上する。

「最大戦速、面舵一杯。」

日本武尊は右回頭を始める。そして、丁度その時に先行していたシャルンホルストの28cm砲が放たれた。

それは日本武尊の後方に着弾し、水柱が発生する。

「よし、主砲発射!!。」

日本武尊の51cm砲がシャルンホルスト目掛けて放たれる。それは水中弾と零式弾が放たれ、シャルンホルストは慌てて回避運動を始めるが、電探射撃を行った日本武尊の主砲弾は外れることなく艦橋や高角砲群に命中し、水中弾は中央部に命中する。喫水線下の中央部はわずか180mの装甲しかないので、水中弾は貫通して内部で爆発。艦長を含む乗員1669人全員が戦死した。

「一撃で轟沈とは。」

ジャーナリスト等は目の前の光景を信じられない様子で見ている。そして、後方にいたビスマルク?世も

「シャルンホルストは轟沈。信じられない威力です。」

「うろたえるな!!。こうなったら独逸海軍の維持を見せろ。シャルンホルストの弔い合戦だ。」

ヨハネス・ゲーテの命令でビスマルク?世は最大戦速にて日本武尊に向かっていく。

そして、ビスマルク?世は主砲射程内に入り、砲撃を始める。しかし、水中噴進機を備える日本武尊にはなかなか当たらない。

「Z弾と零式弾を時間差で発射してくれ。」

大石は砲撃指揮所に命じる。命令を受けて、零式弾がまず放たれて、続き、Z弾（拡散弾）が放たれる。

「敵砲弾接近！！。」

「まずい。」

ビスマルク？世は回避を始めるが、零式弾が推進器の真上の甲板に命中し、後部装甲の一部が吹き飛んで、推進器も1基が使用不能となった。そして、速力が落ちたビスマルク？世にZ弾が襲った。

空中で拡散したZ弾はビスマルク？世の上部甲板に命中し、機銃員や高角砲員など甲板に出ていた者は全員戦死。艦橋など上部構造物にも襲い、砲撃指揮所や煙突にも被害が及んだ。

「くっそ。」

ゲートは殆ど露天艦橋になった艦橋から日本武尊を見る。もはやここまでと思い

「総員退艦の準備をしろ。」

しかし、日本武尊から発光信号を受ける。『我、貴官の奮戦に敬意を示す。海戦は終わった。貴官の無事なる航行を祈り、本艦は現海域を離脱する』

「我々を見逃すというのか？」

そう言いながらも、ビスマルク？世は反転してセウタ軍港を目指して敗走した。

ーランカスターー

「全く、あの艦が見方でつくづく良かったと思いますよ。」

副長は艦長を見ながら言う。

「ははは、確かな。そういう意味では同盟に踏み切った政府を支持するよ。」

そこへ日本武尊からの発光信号を受ける。『ランカスターへUボートの来襲の恐れがある。本艦はこのまま貴艦の護衛をシエラレオネまで護衛する。』

日本武尊に護衛をされながら、ランカスターとそれに乗ったジャーナリスト等は帰港した。翌日、本海戦の様子は各国に新聞という形で配布された。勿論、独逸第三帝国占領下の国や自国では購入を禁じたが、入ってくる情報まではとめられず、独逸の圧政に苦しむ国々は大いに勇気付けられた。

日本武尊VSビスマルク？世 決戦（後書き）

次回は、新神風艦隊の司令長官を任せた佐藤元帥が皇道艦隊指揮官に戻ってきます。（神風艦隊指揮官時の参謀も連れて）

戻ってきた提督。新装皇道艦隊出撃

ビスマルク？世との決戦に勝利し、神風艦隊はイギリスを目指していた。その理由は

『神風艦隊司令長官の佐藤佳樹元帥殿。貴官には再び皇道艦隊指揮官を任命する為、本国への帰還を命じる。イギリスに連絡機が待機しているので、参謀と共に日本へ帰国されたし。』

軍令部総長 高野

五十六より』

こんな電文が送られてきたからである。

「短い就任でしたね。」

「市谷少将、貴方には出番がなかったですね。」

「なーに、教え子の成長を見ただけでも十分だよ。」

市谷猛は海軍に復帰するなり、現役時代の中将ではなく少将の階級を与えられた。

「それよりも狐はどうしたんですか？」

市谷の隣には1匹しか狐が居ない。

「ああ、部屋で寝ているよ。こいつだけは先に起きちまってな。」

「そうですか。」

暫く海上を眺めていると、イギリスが少しずつ見えてきた。

「両舷微速。面舵5°。」

島鶴は右回頭を始め、

「取り舵15°。」

右に少し舵が切れた所で逆旋回を始める。こうすることで島鶴の巨体は旋回半径を縮めて、丁度良いポジションで入港する事ができた。入港すると、港からカメラのフラッシュが島鶴に当てられる。どうやら島鶴の入港を聞いた新聞記者等が港に集まっていたようだ。

「英雄扱いでしょうか？」

「いや、我々はその英雄を支援している影の艦隊だよ。」

佐藤元帥は冷静に、聞いてきた水兵に答える。

タラップで降りると、そこには何と英国女王とチャーチル卿が居た。

「これは女王陛下とチャーチル国家首相殿。」

全くの予想外の2人が居たので佐藤元帥は少し混乱する。後から降りてきた市谷は

「チャーチル海軍大臣、お久しぶりです。」

市谷はチャーチルと握手をする

「これはこれは市谷海軍少将さん。駐英武官以来の再会ですね。」

「え？え？えええ！？」

佐藤元帥は驚く、イギリスに友人が居ることは聞いていたが、まさかチャーチル卿だったとは思ってもよらなかった。

「ところで、お二人はどのようなご用件で？」

「貴方にこれを授与したくて。」

取り出したのはメリット勲章とヴィクトリア勲章だった。

「こ、こんな最高栄誉の物を貰ってもいいんですか？」

メリット勲章は日本では山縣やまがた 有朋ありともや大山おおやま 巖いわお、東郷平八郎が受賞している軍事の功績や科学、芸術など文化的や公共の福祉に貢献のあった人物に送られる勲章である。

ヴィクトリア勲章は敵前において勇氣を示した兵士に与えられる、最も受賞が難しい勲章の一つである。

どちらもこれ以上ないくらいの名誉な勲章であり、この二つを貰える日本人は後世世界でも初めてだろう

女王陛下自らが佐藤元帥に勲章を付ける。付けた瞬間にカメラのフラッシュは一斉に佐藤元帥と女王陛下に当てられる。

その後、佐藤と市谷は飛行場へと向かう。そこには高野総長の言うとおりに富嶽が待機していた。

「佐藤元帥と市谷少将ですね。お待ちしておりました。」

少佐の階級を付けた陸軍将校が待っていて、佐藤元帥等と共に富嶽に乗り込む。

乗り込むを確認すると、富嶽はエンジン出力最大で滑走をし、ハワイに向けて飛び立った。

半日飛び、ハワイに到着すると輝政が居た。

「佐藤提督、ご無事で何よりです。」

「ああ、そっちこそ変わったことはなかったか？」

「はい。兵等も普段どおりの訓練に励んでいますよ。アメリカ軍も艦艇が無い為に攻撃もしてきませんし、暇で暇です。」

「まあ無理もないよ。それに近々アメリカ国内でクーデターを起こす計画があるらしい。指導者はハリエット・アイゼンハワーで、リガンやマッカーサーも参加するそうだ。」

「えっ、どういことですか？」

「表向きには政権を力で手に入れることであるが、裏ではトルーマン自身がこの計画を承認したんだよ。理由は海の目によるトルーマン暗殺と国内経済の乗っ取りを阻止することだ。」

「そんなことが。」

「ああ、その為に我々は高野総長の言うトルーマン政権の支持率を下げる為にも再度アメリカ本土を攻撃することになった。と言っても、これもトルーマンが日本政府への密電で命じたことだが。」

「トルーマン大統領はそんなにも危険な状態なんですか？」

「ああ、上院にも下院にも海の目の連中がうようよ居るそうで、誰が敵で、誰が味方か分からん状況のようだ。」

「大統領も大変ですね。」

「所詮はトルーマンも連中にとっては操り人形みたいなものだ。要らなくなれば直ぐに謀殺されて代わりを造る、連中の得意技だよ。」

実際にアメリカ大統領の暗殺事件では謎が多い事件が沢山ある。ルーズベルトの突然の死や、ケネディー大統領の暗殺。その他リンカーンやマッキンリーなど、大統領は突然命を狙われて死亡している。しかも、犯人も実際に殺害したのか疑問に思う者達ばかりである。

「では、出港の準備をしてくれ。それと、大佐への昇進おめでとう。」

「あ、ありがとうございます。」

輝政は大佐へと昇進されていた。それも、佐藤元帥が補佐をしていた功績を高野に知らせ、大佐へと昇進を申請していたからである。

そして翌朝

「錨上げ。」

神武の錨はゆっくりと上がっていく。

「両舷微速前進。湾の入り口へと向かえ。」

湾を出た皇道艦隊第1艦隊と第2艦隊は陣形を整えてロサンゼルスへと向かった。ちなみに、皇道艦隊第3艦隊はインド洋へと向かう輸送船団を護衛しており、第4艦隊はバルト海にて通商破壊を行っている。

ロサンゼルス沖海戦及び、ロサンゼルス砲撃

出撃した皇道艦隊は最大戦速でロサンゼルスを目指していた。

「輝政、空母と航空戦艦に航空機の準備をさせておけ。」

「え？どうしてですか？砲撃だけで十分だと思うのですが。」

「ついでに、日系人強制収容所の門を壊してやるんだよ。」

「なるほど。」

そう言って輝政は艦隊電話で命じる。

—ロサンゼルス沖—

「航空隊発艦」

空母「青龍」「水龍」はポストン強制収容所へ。空母「黄龍」と「赤龍」はツールレイク強制収容所へ。空母「紫龍」と「緑龍」はマインザナル強制収容所へ。航空戦艦「天照」と「八岐大蛇」はヒラリバー強制収容所へ。航空戦艦「素戔鳴尊」「奇稲田姫」はトパーズ強制収容所へと攻撃隊を送る。強制収容所は他にも存在するが、航続距離の問題でこれが限界であった。

日系人強制収容所は前世でもアメリカが作り、日系人や日本人を強制的に収容していた施設である。前世ではとくに無くなっていたが、後世ではまだ戦争が続いているので存在している。

出撃した航空隊は編隊を組んで、それぞれの目標へと飛行を始めた。

「それでは、我々も接近するのでしょうか。」

「はい。」

神武はさらに速度を上げてロサンゼルスへと接近する。そして、ロサンゼルスに近づいたところで

「撃ち方はじめー！」

神武型戦艦の61センチ砲が轟音と共に一斉掃射される。

「す、凄いすな。噂には聞いていましたが、これが61センチ砲の威力ですか。」

艦橋に居る市谷は驚く。

「わが国はこれ程までに大口径の主砲を積んだ戦艦を建造できたのですな。」

「はい。これも、高野長官のお陰です。」

ロサンゼルスを中心街にあるビル群まで砲弾が飛んで行き、街中は大パニックになる。

「な！？なんだ！！。」

「沖合いの戦艦が砲撃です。」

「くっそ。軍は一体何をやっているんだ!?!。」

市民は反撃を行わない軍を避難するが、当面の軍は何もしないではなく、出来ないのだ。なぜなら、大西洋にはようやく大型空母2隻が就役し、航空隊の訓練を行っている。だが、太平洋には一切大型戦闘艦は存在していない。

— 神武 艦橋 —

「砲撃やめ。」

佐藤元帥が砲撃やめを命令する。

「何故でしょうか?」

「しばらく避難の時間をやる。」

「なるほど。」

そこへ、電探室から連絡がもたらされた。

「電探室より艦橋へ。右舷より重巡洋艦4隻、軽巡洋艦2隻、駆逐艦8隻の艦隊が接近中。距離はおおよそ40000。」

「電探連動だ。艦尾に撃て!。」

佐藤元帥は慌てずに冷静に命令を下す。艦尾を狙うのは、舵を破壊

して戦闘を行わせないためである。

主砲が敵艦隊の方角に向けられる。

「発射!!。」

神武型戦艦4隻から一斉に全門発射がなされ、敵艦隊の方角で水柱と火柱が昇る。

—アメリカ襲撃艦隊旗艦　重巡洋艦「ヘントセレナ・バーング」
艦橋—

「被害は？」

艦隊司令のオーレット少将が参謀に聞く。

「は、重巡洋艦は本艦を残して全滅。軽巡洋艦は2隻とも機関区をやられて航行不能。駆逐艦は2隻沈没。」

「まさか、一撃の攻撃でここまで。」

その時、神武からの発光信号を受ける。

「敵艦より信号『我、貴艦隊の勇氣ある行動に敬意を示し、勧告する。直ちにこの海域より離脱せよ。受けられない場合は貴艦隊を全滅させるまで砲撃を続行する。』以上です。」

「な!?!なにを馬鹿な事を。敵に信号だ『その要求は受け入れられず。我、貴艦隊を刺し違えてでも攻撃を続行する』と。」

―神武 艦橋―

「やはり、敵は受けられないか。」

市谷は佐藤元帥に言う。佐藤元帥は双眼鏡から目を外し

「はい。ただ、そう来なくては張り合いが無い。」

「それよりも如何しますか？」

今度は輝政が聞いてきた

「砲撃だ！。全滅させる。」

「はい。」

命令は実行され、今度は駆逐艦5隻が沈没する。もはや、重巡洋艦1隻と駆逐艦1隻しか戦力は無い。

「もう一斉射だ。」

佐藤元帥は容赦なく命じ、主砲が放たれた。結果は全滅。

「海面に敵艦隊の乗組員が漂流しておりますが。」

「今此方に駆逐艦は何隻居る？」

「は、作戦海域に突入しているのは10隻ですが。」

「4隻を救助に向かわせろ。ただし、拳銃を向けたなら射殺しろ。」

「りよ、了解しました。」

命令で駆逐艦4隻が漂流者の救助に向かう。幸いにも、拳銃を向けた者はおらず、合計で189名が救助された。

―神武 艦橋―

「そろそろかな。」

と、その時に通信室から

「長官、日系人強制収容所の攻撃隊から『我、同胞を解放す。同胞、強制収容所から脱走し、各都市へと逃げた』だそうです。」

それを聞いて、佐藤元帥は安堵のため息を付き

「砲撃開始。」

砲撃が再び始まる。ビル群は崩落し、ロサンゼルスシンボルと言えるハリウッドサインが破壊された。

「弾種、霰弾に変更。」

今度は霰弾で砲撃を開始し、街は火の海になっていく。弾薬を完全に使い果たした所で

「全艦へ、ハワイへと帰還する。」

艦隊は燃え盛るロサンゼルスを尻目に、ハワイへと帰路についた。

「ホワイトハウス」

「大統領、国民が大統領解任しろと叫んでおりますが。」

「いいんだ。」

トルーマンはそう言って、側近に退出を促した。全員出たのを確認し、電話を掛けた。相手は

「ミスター・オオタカ。貴方のお陰で、私の支持率は予想通りに下がりました。感謝いたします。」

「いやいや。しかし、貴方も悪い人だ。まあ、国を守る為には仕方なかったようですけど。」

「はい。これで、クーデターを起こせばそちらの支持が上がり、私は楽々とアイゼンハワーに政権を譲れますよ。」

「ええ。それで、クーデターの方は？」

「本人の話ではもうすぐ決行されると言っておりますが。」

「それでは、クーデター成功後に我々と講和。一気に対独逸戦争へ

の突入ですな。」

「はい。そして、この大戦を終わらせる道筋は立てておいでですか？」

「勿論です。」

「それを聞いて安心しました。」

トルーマンは電話を切って、椅子に座りなおした。しかし、この時に海の目の魔の手が着々と近づいている事をトルーマンはまだ知らなかった。

日米講和成立

1週間前

―独逸総統官邸―

「それで、これはどういう事だ？」

ヒトラーは目の前に居る独裁最高総監の使いと名乗る男の渡した文書を読み、その内容の不可解な点に驚く。

「米大統領、トルーマンの暗殺を貴方方にやってもらいたい。」

ヒトラーは暫く考えたような格好をとり

「君等がそれを望むのなら、余は構わんぞ。」

「ありがたき幸せです。」

ロサンゼルス砲撃の一日前

―ワシントン ホワイトハウス―

そこに、一台の車が止まった。そして、その車から出てきた人物は

「ハリマンさん、あの節はどうもありがとうございました。」

「ミスターオザキ、自由の身になれてよかったですな。」

あの時、大胆にもアメリカ首都にパラシュート降下してアメリカ国民に戦争停止を訴えた尾崎だった。

「ところでハリマンさん。今この国で何が起きているんですか？」

「大陰謀だよ。政権の乗っ取りのな。」

「え？」

「とりあえず、大統領執務室に急ごう。」

—大統領執務室—

「大高首相宛ての密書ですか？」

「そうだ。」

執務室にてトルーマンは大高首相宛ての密書を尾崎に渡した。

「我が国は、いやホワイトハウスさえも独逸諜報部の手先が浸透してきている。それ故に、君にこの大役をお願いしたいのだ。」

「分かりました。この命に替えてもこの密書は大高首相に渡して見せます。」

「ありがとう。君の事はリーガン提督に話してある。これから、ノーフォークの海軍基地にハリマン君と共に行ってもらいたい。」

2日後

ーノーフォーク海軍基地ー

尾崎は今朝ロサンゼルスが砲撃されたと言うニュースを耳にしている。そして、朝一にノーフォークへと出向いた。

「貴方がリーガン提督ですか？」

「ええ、そう言う貴方はオザキさんですね？」

「はい。」

「急いで乗ってください。もうじき出港ですよ。」

再建されたばかりの機動部隊所属の空母「スペリオン？」と大型最新鋭航空母艦「ハボクック」で編成された部隊が修理されたパナマ運河を通ってハワイに到着した。

ーハワイ 真珠湾海軍基地ー

「いやー、リーガン提督。また会えて嬉しいです。」

出迎えたのは佐藤元帥だった。

「此方でもです佐藤元帥。」

現在、インド洋作戦発動で真珠湾には艦隊は存在していない。そし

て、本日付をもってハワイはアメリカに返還されることになった。

「我々が最終便です。我々は独逸が進撃してくる印度にこれから向う事になります。」

尾崎は日本に向う2式大艇に乗り、離陸した。

―日本 横浜海軍基地―

ここは、皇道艦隊の戦艦が錨を下ろして待機している。航空戦艦はオーストラリアに降り、潜水艦はバルト海等で通商破壊を行っている。残りはインド洋に居る独潜水艦の排除を行っている。

（4年ぶりの日本か。）

尾崎は久しぶりに日本に帰ってきて懐かしさを感じる。そして、帝都に居る大高首相にトルーマンからの密書を届け、自分は新聞記者の仕事に戻った。

―帝都 首相官邸―

「木戸外相、良い知らせだ。」

大高は木戸外務大臣にトルーマンからの密書を渡した。

「ほう、トルーマン大統領は健康を理由に辞任を表明する事になっている。」

「ああ、しかし急がねばならん。紺碧艦隊の前原の報告では独逸本国から大型の潜水艦が出港したと聞いている。これが世に言うトルーマン暗殺計画の為の潜水艦の可能性が高い。」

「トルーマンが暗殺されれば、憲法どおり下院議長が大統領になる。それだけは避けたいとトルーマン大統領は言っ来ている。」

「ワシントンD・C沖」

「浮上。」

紺碧艦隊が発見した大型潜水艦は浮上をし、独逸特殊暗殺用爆撃機マグニの発艦準備に入った。

「マグニ1号機出撃、続き2号、3号も急げ。」

出撃したマグニは編隊を組み、ホワイトハウスを目指して飛行を開始した。数分飛行し、首都を捉える

「誘導弾投下。」

投下された誘導爆弾はホワイトハウス目指して飛行を続ける。30秒後

誘導弾はホワイトハウスに命中し、ホワイトハウスは崩壊した。

一帝都 首相官邸一

「それは本当ですか!？」

木戸外相の報告に驚く

「はい。ホワイトハウスは爆破され、死傷者も多数出ております。しかし、トルーマン大統領の安否は不明です。」

「分かりました。」

そして、大高は記者会見を開いた。そして、その最中に側近からの報告を受け

「最後に、皆さんにご報告があります。たった今入電があり、米国にてクーデターが成功し、新政権が発足した模様です。」

「クーデター?それはどういう事ですか総理?。」

「詳しくはまだお話できませんが、我々大日本帝国と亜米利加合衆国新政権とでは本格的な終戦。すなわち、日米講和が成立いたしました。」

その瞬間、記者たちは大いに盛り上がった。

翌日の新聞の見出し

亜米利加にて新政権樹立。トルーマン大統領は引退を表明、新大統領

領にアイゼンハワーが就任。これに付き、日米間での講和が成立。

印度戦線 1

対米講和前から、独逸ロンメル軍団は同盟国中東を通過して印度制圧為に侵入していた。そして、その少し前の佐藤元帥が神風艦隊司令長官を解任された辺りに独逸はイギリス本土に上陸していた。

—シンガポール—

「それで、私は印度の熊谷長官の援護というわけですか。」

シンガポール軍港に神武と天照が入港している。どちらも巨大であるため、軍港の出口の所に2隻とも係留されている。

「ええ、その為に航空戦艦と空母の艦載機を総入れ替えしたのですから。」

「しかし、高野長官。我々は空母や航空戦艦主力の艦隊ではありません。それは、本来の皇道艦隊運用計画に反しているのではないですか？」

「それは分かっている。しかし、その強力な艦隊をどうしてもインド洋に置いておきたいのだ。坂本艦隊はマダガスカル方面の支援を行っているし、上村艦隊はバルト海にて作戦行動中です。」

「上村艦隊？」

「上村洋平（前世でいう上村彦之丞）中将指揮の艦隊です。」

「上村さんが？」

「ええ、そういう訳なので艦隊が足りないのです。ですから、インド洋にて航空支援を行っていただきたい。」

「分かりました。」

佐藤元帥は神武に昇っている長官旗を降ろし、天照に長官旗を翻した。

—インド洋—

「長官、あれが。」

「ああ、戦略空母建御雷だ。」

「最大級の空母ですね。」

高杉航空機動部隊と合流した皇道艦隊は航空機の発進準備に取り掛かった。

—インド国内—

「来たぞ！右前方に敵戦車群。」

カムフラージュしておいた野戦砲がタイガー戦車の軍団に砲撃を行う。

「こちら、G中隊。敵戦車約500両が此方に接近中。空軍の支援を求む。」

戦車も繰り出して戦うのだが、装甲の分厚いティーガー？（100ミリ砲などの強化版）は砲弾を弾き返し、イギリス戦車を次々撃破する。

「此方G中隊。敵戦車は極めて強力なり。」

応戦をするが、装甲を破壊する事ができずに被害が増え続けた。

「こちら戦車部隊。空軍に連絡、うるさい野砲を破壊してくれ。」

地上の戦車部隊の報告を聞き、上空を飛行していたスツーカー？が爆弾と機銃で野砲を沈黙させた。

「こちら歩兵大隊。敵の戦車は怪物だ！！。野砲や対戦車砲が全く効かない！。航空支援を。」

各方面にてこの報告が続くが、英空軍の航空機は全て出計らっており出撃させる事が出来ずに各方面軍は全滅した。

ー日本・イギリス司令部ー

「閣下、このままでは戦線の建て直しは困難になります。至急、各

方面へ撤退命令を。」

日本陸軍の熊谷長官はマウントバッテン大将に全方面軍の撤退を具申をする。

「撤退などは考えていない。ただ、戦線の建て直しは考えている。」

「なら、ボンベイにいる三個師団をシャルガーオンに向わせて敵の両側を衝くべきです。」

「ボンベイを見捨てると言うのか!？」

「幸いな決断です。ボンベイを守るよりシャルガーオンにて敵を挟撃する事が出来れば、我々は優位に立てます。」

一方、日本陸軍の戦車大隊は100両ほどは独逸の戦車軍団約150両を相手にしていた。

「発射!。」

指揮官の敷島中将は完璧な統率で敵の戦車軍団を圧倒しており、しかも性能で勝っている二式超重戦車と四式重戦車はティーガー?との主砲を弾き返し、逆に撃破し続けている。

「凄いな。」

四式重戦車と二式超重戦車は半分ほどを撃破したところで後退を始める。追撃を仕掛けたいが、弾薬が尽き掛けた為に防御陣地から撤退した。日本側の損害は四式重戦車12両だけであり、ほぼ大勝利

に近い戦果を上げた。

―日本軍司令部―

「長官、敷島中将より大勝利の報告です。敵虎戦車の半数を撃破、我が方の損害は四式重戦車12両のみ。」

「やはり、二式超重戦車の損害は無しか。」

熊谷は報告を聞いて安心する。

「はい。あんな戦車の装甲を破れる戦車は存在しませんので。」

「戦艦の主砲にも耐えうる戦車開発のコンセプトは要らなかったんじゃないか？」

「しかし、そのお陰で損害は今のところ殆ど報告されておりません。」

「せいぜい航空機の急降下爆撃に耐えられるか耐えられないかだからな。」

「では、夜間作戦の為の準備を頼む。それと、航空艦隊に撤退を支援させてくれ。」

「了解しました。」

―皇道艦隊―

「熊谷長官から航空支援の要請です。」

伝令兵が言ってくる。

「航空機の方は準備完了です。」

輝政は佐藤元帥に報告する。

「市谷少将、兵等は夜戦に慣れておりますか？」

「はい。皆、夜戦の訓練も受けていると聞きます。十分ではないでしょうか？」

「夜間攻撃機だから戦果は期待できるが、まあいいだろう。」

佐藤元帥は航空部隊を出撃させる。高杉艦隊からは空中作戦機が出撃した。

印度戦線 2

夜間攻撃に飛び立った心神と龍戦改が撤退支援の為に攻撃し、高杉機動部隊から飛び立った空中作戦機からの情報を受け取り、葛城の航空管制を受けて目的地へと飛行した。

ーシャルガーオンー

撤退した連合軍に変わり、ドイツ軍が入城し、一大拠点を構築して戦線拡大の準備をしていた。その夜間、皇道艦隊から飛び立った攻撃隊が奇襲を仕掛けたのだ。

「な、何事か!!」

慌てて飛び起きたリップス少将は外へ出る。すると、日の丸をつけた日本軍機が駐車している戦車に向かって爆弾を投下するのを見る。

「航空隊は何をやっているんだ!?!」

「そ、それが、夜間の迎撃は非常に困難でして、迎撃は不可能だと返信してきております。」

「全く、弱気な空軍を持つと苦労するよ。」

完璧な奇襲は損害が非常に少なかった。現にこの作戦参加機で損失は発艦失敗の2機だけであった。

逆にティーガー戦車12台とパンター戦車10台を破壊した。

一天照――

「攻撃は成功のようです。」

輝政が葛城からの報告書を読む。

「ドイツの戦車多数を撃破して、我がほうに損害無しと報告もあります。」

市谷も近くに来て

「交代の高杉艦隊から攻撃機が飛び立ちました。夜明けには熊谷司令官の指揮で陸上砲弾も砲撃を開始すると連絡です。」

「分かった。」

「砲撃開始！！」

野戦砲がボンベイ方面に進撃する戦車軍団に砲撃を開始する。しかし、突然最右翼で砲撃を行っていた野戦砲陣が沈黙した。

「な、何があった。」

「分かりません。ただ、沈黙前に爆発があったと報告が。」

「爆発だど！？」

「はい。どこからか砲撃を受けたものと思われます。」

そして、数分後には中央の野戦砲陣が沈黙した。そして、戦車軍団の一部が野戦砲の方に向かってくるのが見えた。

「た、退避――！」

熊谷は偵察装甲車で離れ、砲撃を行った兵も急いで逃げて行った。

――天照――

「ちょ、長官。砲撃陣地が破壊され、ボンベイ方面に敵が移動を開始しました。高杉艦隊の航空機が現在これを食い止めております。」

「砲撃陣地が破壊？ 一体どういう事だ？」

「報告には砲撃を受けたとありますが、詳細は不明です。」

輝政は報告書を一通り読み上げる。

「砲撃とは興味深い。印度洋には敵戦艦はいない。すなわち、陸上から放たれた事になるな。」

「しかし、一体何処から？」

佐藤元帥は机に地図を広げる。印度から中東までの地図だった。

「恐らくは、ここかな。」

佐藤元帥は地図の一点を指す。その場所はカラチ。パキスタン南部の都市で、国内一の都市である。

「ここから、ボンベイまで。」

「ああ。状況から見てここ以外考えられん。」

列車砲を運用するなら土地が確りとしている必要がある。印度の地面は砲撃するのには向かないのだ。その為、出来る限り近づけて、尚且つ鉄道の走る場所で絶好な砲撃位置はカラチ以外に考えられなかった。

「カラチに攻撃機を送ろう。」

皇道艦隊はすぐさま攻撃隊を編成し、発艦させた。一方、高杉艦隊は毎回攻撃隊を送っては収容を繰り返して撤退の援護を行っている。損害こそ少ないが被弾機は増える一方だった。

「そろそろ航空機の本格的な修理が必要ですよ。」

「分かっておる。その為に神鶴型を2隻連れて来たんだよ。」

高杉は艦隊に随伴する2隻の戦時大量増産空母を指差す。神鶴の中には航空機の修理用部品と修理用の道具等は揃っており、それを使って収容機の中から深刻な損傷を負った機体を回収して修理を行っている。

「なかなか補給を受けられないからな。航空機の消耗を少しでも減らそうとする策だ。」

高杉は修理された航空機が飛び立っていくのを見る。再び、損害を負って帰ってくるの事を想像すると嫌な気分だが、仕方が無いことでもあった。

「とにかく、熊谷長官には撤退を急いでもらわねば。」

熊谷の部隊はそれと頃ではなかった。

「急げ！！再び砲撃が来るぞ。」

砲撃の中を撤退しているのだ。何処から飛んでくるかも分からない物は恐ろしいのだ。

「伏せろー！！」

しかし、撤退途中の二式超重戦車に命中して破壊された。初めて、兵士らは無敵と考えていた戦車が破壊される光景を見た。

「安全な物なんて無い。急いで撤退するんだ！！」

部隊は南へ南へと撤退をしていく。戦線再構築の意味でも損害は出来る限り抑えたかった。

―天照―

「まだ、列車砲を発見できないのか？」

「はい、未だに報告はありません。」

佐藤は焦った。もし、自分の勘が間違っていて、それによって大勢の者が救われる時間を失っていたらと考えてしまう。そこへ、思わぬ報告が届けられる。

「敵潜水艦の反応あり！！」

「なに！！」

佐藤はさらに慌てた。今、攻撃を受ければ天照はやられると。

「まずいな。」

しかし、突然水柱が上がったかと思うと、潜水艦撃沈を意味する艦内物が浮かび上がってきた。

「一体どうしたんだ？」

「分かりませんが、魚雷の推進音が突然現れました。」

「ああ、分かった。」

佐藤は焦ってはいたが直ぐに状況を読み取った。恐らくは前原の紺碧艦隊のお蔭だろうと考えた。

「ソナー室、対潜ソナー音でモールス信号を打ってくれ。『貴艦隊の撃沈見事なり。我、貴艦隊に救われた皇道艦隊司令長官である。救助に感謝の意を称す。』と。」

「富嶽号」

「皇道艦隊から対潜ソナーを使ってモールスで感謝の言葉を言われてますよ。」

「分かっているさ艦長。それよりも警戒を厳重にしろよ。この辺に敵潜の存在を確認され以上、警戒厳重は当然だ。」

印度戦線 3

―カラチ―

「畜生、一体何処に列車砲があるんだ!？」

パイロット等も焦り始めていた。なかなか見つける事が出来ず、ただ時間だけが過ぎていく。

「隊長、あれを見てください。」

「何？」

編隊長は後席にいる偵察員の指差す方向に目を向ける。そして、

「間違いない。列車砲を確認した。」

双眼鏡に移った物は、紛れもなく独逸の列車砲だった。ドーラよりも巨大で、非常に長い砲身。そこから放たれる巨砲弾は如何なる物でも破壊し尽くす。まさに、

「怪物。」

そう形容できる物だった。

「隊長、編隊全員攻撃チャンスは一度だけです。それを外すと帰還出来る燃料がありません。」

「分かっている。操縦手、チャンスは一度きりだ。敵さんをあつと

言わす急降下を頼むぞ。」

「了解。」

心神全34機が編隊を組んで列車砲へ向かう。列車砲の周りにある対空陣地から機銃や高射砲が放たれ、編隊の周りに着弾してくる。

「す、凄い対空砲火です。目を開けてもらえません。」

「油断するな!!、少しでも降下タイミングを逃せばアウトだ。」

何機かは対空砲を喰らって撃墜されたが、無事に列車砲「チュール」上空に到達した。

「行くぞ!!急降下!!」

心神は角度60度で一斉降下をする。未だに周りでは対空砲や機銃が飛んでくるが、急降下しだした機体はそんなものを物ともせず以降下する。

「目標よし。投下!!」

一斉に爆弾を投下し、急上昇へと移行する。爆弾は、見事にチュールへ命中。積まれていた弾薬にも引火して爆発、崩壊した。

「全機よくやった。もう燃料に余裕がないから祝福は帰還してからだ。」

攻撃に成功した心神は帰還していく。この攻撃で心神8機を失ったが、独逸軍はそれ以上に痛手を被った。

―セイロン島―

「何とか撤退が完了しました。」

熊谷の部隊は印度南方要塞まで後退し、一旦補給地のセイロン島で部隊の補充を待っていた。二式超重戦車の損害は熊谷にとっても大きかった。四式重戦車でも独逸戦車を撃破できるが、二式超重戦車は日本戦車兵の誇りでもあった。だから、何とか補充して反抗を挑みたかった。

「本土からは神鶴と風鶴が二式超重戦車の補充28台を送ってくるそうです。」

二式超重戦車はその自重から通常の輸送艦での輸送はまず不可能だった。そこで、神鶴型戦時量産空母の格納庫に乗せて輸送している事が多い。

「分かった。届き次第、反攻作戦を開始する。」

「了解しました。それと、アメリカから中古機購入したB29は戦果を挙げていますよ。独逸の補給部隊を爆撃しては補給路を寸断しています。」

「そうか。富嶽の大半は欧州方面に行ってしまったのだ。それで、何とかするしかあるまい。」

―天照―

「帰ってきました。」

攻撃を終え、帰還してきた心神と護衛の龍戦改が第二飛行甲板に着艦している。天照型は中央に巨大な格納庫を持っており、その左右に一本ずつ飛行甲板を備えている。その為、発着艦を同時に行うことも可能だった。

「列車砲も沈黙させたので、これで安心して地上部隊は作戦を行いますね。」

「そうだな。」

輝政は着艦してくる航空機に手を振っている。大佐の階級だが、彼はまだ28歳。若すぎる大佐だ。

「明日、セイロン島へ私は上陸する。オートジャイロを用意しておいてくれ。」

「了解しました。」

―富嶽号―

「では、私は明日セイロン島へ上陸する。そしたら紺碧艦隊は一度泊地に戻って新旗艦と共に戻ってきてくれ。」

前原もセイロン島へ上陸する予定だった。

「了解しました。司令気を付けてくださいよ。」

「分かっているとも。」

印度戦線 4

―セイロン島―

「それで、撤退には成功したが、2式超重戦車を含め、戦車の損害は多数と。」

熊谷の居る司令部に來た佐藤元帥は陸軍の損害を鑑みるに、反抗は戦車到着後でなければならぬと判断した。

「すみません。撤退支援していただいたのでこれだけの損害で済みましたが、それでも2式超重戦車の損害は大きいです。」

「やはり、あれは戦車兵の誇りだからな。」

「はい。戦車兵も意気消沈してしましまして。航空兵力は未だ善戦中でして、空の制空権は問題ありません。」

「制海権も今のところは無事です。海上補給線の確保も出来ておりますし、戦車の補充は問題ありません。」

護衛には、皇道艦隊の第三艦隊が就いており、そう簡単に対潜ラインを越えることは出来ない。

「ドイツ軍に対しては海上に居る高杉艦隊と共同で攻撃を行っております。少しずつですが、戦力を削ぐ事に成功しております。」

「それは有り難い。我々の戦力が戻るまで、何とか敵を喰い止めていただきたい。4式重戦車の補充は既に終わっていますが、2式超

重戦車はそう簡単に補充が利きませんので。」

「分かっております。」

―セイロン島 海軍基地―

「熊谷は2式超重戦車の補充が完了次第、反攻に出るそうだ。」

佐藤元帥は、陸軍司令部に行った帰りに海軍基地に居る前原少将に会った。

「そうですか。我々は海底部隊なので、反攻の支援は出来ません。」

「搭載機での掩護も？」

「搭載機での攻撃は出来なくもないですが、打撃力が足りません。」

雷洋と春嵐改が数機で攻撃しても大した戦果にはならない。数合わせにしても少なすぎる。

「まあ、そうだろう。」

「それで、そちらとして今後の方針は？」

「そうだな。・・・一応、反攻の支援は行うつもりだ。その準備が整うまでは、潜水艦狩りでもしているよ。」

「では、我々も旗艦が到着次第行います。」

「それまでは？」

「色々と、会わねばならない人が居ます。」

「そうか。では、また今度。」

「はい。」

そう言って佐藤元帥は立ち上がり、基地を後にする。

―天照―

「お帰りなさい、佐藤元帥。」

着くなり、輝政が出迎えた。

「司令部はどうでしたか？」

「どうもこうも無い。2式超重戦車に損害が出て、戦車兵は意気消沈。反抗は、第三艦隊の護衛している神鶴と凧鶴に積まれている2式超重戦車が到着してからだ。」

「戦力基盤の崩壊が起きましたね。あの、2式超重戦車が。」

「120？砲だ。そんな物、戦艦でも耐えれんよ。」

「知ってたんですか？」

「噂程度だ。東機関の暗号解読で存在と大体の性能は分かっていた

が、まさかここまで出っ張ってくるとは思わなかった。」

「じゃあ、あれを使用しだすと言った独逸陸軍印度方面軍司令は相
当な狐ですね。」

「狐……もしかして。」

「？」

「ロンメルだ。砂漠の狐と言われた、ロンメル元帥が指揮を執って
いるんだ。」

「あの、ロンメル將軍ですか？」

「そうなる、厄介だな。」

―シャルガーオン 独逸軍司令部―

「元帥、各方面の目標が達成されました。作戦の、第一段階は完了
です。」

「そうか。チュールを遣られたのは予想外だが、まあ問題は無いな。
」

司令部に居るロンメルは部下等を見て言う。

「後は、どうやって南下するかだ。下手な南下では海上に居る艦隊
から支援を受けれてしまうからな。」

「我々の艦隊で数を減らすというのはどうでしょうか？」

「Uボートで彼らの艦艇に攻撃できるとは思えん。現に、アフリカ方面では多数の潜水艦が返り討ちに遭い、バルト海でも多数の潜水艦が撃沈されている。」

旭日艦隊と神風艦隊がアフリカ方面で、芬蘭支援艦隊と皇道第4艦隊はバルト海で大暴れをし、総数100隻近くを撃沈している。

「陸軍力で、我々は押すしかないのだ。」

ロンメルも分かり切っていた。有力な陸軍力を持つ独逸は陸の戦いで無敵を誇ることを。

「進撃用燃料も十分です。連合軍に追撃を。」

「分かっている。各部隊に伝え、進撃開始とな。」

「了解。」

印度戦線 5

―セイロン島―

「熊谷司令、ドイツ軍が侵攻を始めました。」

通信将校がドイツの無線を傍受して熊谷に知らせる。

「分かった。重戦車隊を出して応戦させろ。洋上に居る艦隊にも支援要請をするんだ。」

「了解しました。」

―天照―

「セイロン島の日本軍司令部より支援要請です。」

「支援要請？何故、この時に。」

駆逐艦が海底に潜んでいるUボートを沈めた時に突然の支援要請。

「ドイツが、侵攻を開始しました。歩兵部隊や戦車隊が出撃したので、その上空で爆撃と制空権確保を要請してきています。」

佐藤元帥は悩んだ。ここで、支援機を飛ばせば敵潜の発見に使う対潜哨戒機も爆装で飛ばす必要がある。

「空母『青龍』と『水龍』から泰皇と閃電改を飛ばせ。」

命令を受け、二空母からそれぞれ攻撃隊が飛び立った。

「司令、本当にあれだけで宜しいのですか？」

輝政大佐が長官室へ長官公室へ入った佐藤元帥の後を追って入り、そこで話しかけた。

「参謀長、艦載機だけでの攻撃ではないのだよ。」

「え？」

「神武を含む戦艦部隊がシャルガーオンのドイツ軍司令部を砲撃する。そうすれば混乱して支援機の必要性は薄れてくる。それに、大高総理はある作戦を実行に移し始めているしな。」

「ある作戦？」

「まだ詳細は話せん。しかし、本大戦の中で一番重要な作戦だと言う事だけは言っておく。」

「分かりました。」

「神武に居る市谷少将に攻撃目標とその詳細は伝えてある。上手く、やってくれるだろう。」

— 神武 —

「噴進弾込め!!」

艦長の鈴木大佐はシャルガーオンまで届く61?噴進弾を込めさせた。

「主砲、砲角80°、仰角32°に備え。」

砲術長が目標までの距離を測定し、それをコンピュータに入力して最適な角度を導き出す。

「艦長、砲撃用意。」

艦橋に居る市谷は目標を捉えた主砲を見ながら、艦長に指示を出す。

「発射用意!!」

砲術長が伝声管で伝える。全員が耳を手で塞いだ。

「司令の狐は良いんですか?主砲を放ったら音で鼓膜を破りますよ。」

「耳栓をさせておる。それに、長官室でぐっすりと寝ているよ。」

「分かりました。発射!!」

轟音が響き、61?噴進弾は砲身から離れ、ロケットエンジンに点火して滑空する。

「命中まで、5分って所です。」

「電探に感あり!!」

「機数は？」

「30機。」

「たったの30機で世界最強の戦艦に挑む勇氣は誉めてやろう。」

「噴進弾を発射しますか？」

「いや。久しぶりに対空迎撃任務だ。無誘導噴進弾とバルカン砲だけで遣り合おうではないか。」

「了解しました。対空戦闘!!」

兵員がそれぞれの持ち場に着き、攻撃隊を今か今かと待つ。暫くし、向かってくる攻撃隊を捉えた。

「各員、対空防御はじめ!!」

その瞬間、バルカン砲と噴進弾が放たれる。

「うわああ!! 敵に噴進弾あり!!」

戦闘を飛ぶアラドブリッツが噴進弾の直撃を受け、撃墜された。

「畜生、各機散開して攻撃せよ。」

散開し、それぞれの目標目指して飛行する。

「無理に敵機を追うな。指定された空域だけを防御し続ける。」

「しかし、それじゃ効率よく敵機を撃墜できませんが。」

砲術長が艦長に意見を申し出るが

「馬鹿者！！もう機銃の旋回速度だけで敵機を追い続ける事など出来るか。追っている間に別の敵機が侵入して攻撃を成功させる。それなら、この艦の周りを幾つかの空域に区切って、そこを各対空銃座に守らせればよい。」

「敵機、左舷より急降下！！！」

「取り舵一杯！！！」

急降下してくる3機のアラドブリッツが神武を捉えた時に、取り舵を切った。

「ちい、目標が逸れていく」

「上昇させろ。」

急いで操縦桿を引いたが、ここで致命的なミス。爆弾を切り離さなかった。

「そ、操縦桿が動かない。失速する。」

急降下したら、何が何でも爆弾を切り離さなければならなかった。しかし、この機体は爆弾を切り離さずに上昇したため、操縦桿が固まり、失速してしまった。

「お、落ちる。助けてくれ!!」

海面に激突し、バラバラになった。

「可哀そうに。爆弾を切り離さないからそうなるんだ。」

その様子を艦橋から見ていた市谷はパイロットの未熟さに気付いた。

「敵のパイロットは殆どが新米だな。」

「シャルガーオン ドイツ陸軍基地」

「攻撃隊は全滅しました。進撃させた戦車隊も航空支援を受けた日本戦車隊に壊滅。敗走してきています。」

ロンメルは、その報告を聞いて帽子を取る。

「参謀長、全軍に一時撤退命令を下せ。我々は、時期を見誤った。」

「司令、何やらこちらに向かってくるものを電探が捉えました。」

「何? 航空機か?」

「そんな。音速に到達しているのですよ。距離、500・・・400・・・300。近づいてきます。」

ロンメルは窓の外を覗いた。すると、もう目前まで迫っていた。

「た、退避!!」

司令部を噴進弾が直撃。威力は主砲弾より低い為、司令部が崩壊するだけで済んだ。しかし、そこに参謀やロンメルの生死は不明であった。

印度戦線 6

―セイロン島―

「熊谷司令、シャルガーオンのドイツ陸軍司令部の崩壊を陸軍航空隊の偵察機が撮影してきました。」

セイロン島にある日本陸軍司令部にこの報告が届けられた。

「では、攻勢に少しずつ出るぞ。2式超重戦車は受領したな?。」

「はい。海軍の空母が運んできました。」

「宜しい。では、少しずつ戦線を押し返すぞ。アメリカ、イギリス軍司令部にも通達せよ。」

「了解しました。」

熊谷は司令部を出て、指揮車の方に向かった。チュール砲の被害を運よく受けなかった数少ない車両である。

「諸君、少しずつ戦線を押し返すが、まだまだドイツ軍が精強であることを忘れるなよ。」

ドイツの戦線は非常に広い。その分、数多くの地形で戦っている為、インドの地形に慣れない日本軍には多少だが分が悪い。それに、2式超重戦車はインドの地形にはどちらかと言うと適していない。元

々、中国や欧州などの整備された土地で戦う事を前提に設計されている為、インドの様に砂の地形で戦う事は想定されていない。

「4式重戦車と、6式中戦車が何処まで戦えるか。」

二式超重戦車は前述のようにインドの地形には合わない。しかし、4式重戦車と6式中戦車は違う。元々、ドイツとの戦闘を想定されている為に全地形に対応できる余裕のある設計が成されている。二式超重戦車は速度の強化ばかりで地形に対応できる装備をしてこなかったのが裏目に出てしまった。

（ここの狭まった谷を通る筈なのだが。）

熊谷は双眼鏡を使ってドイツ軍の進撃途上にあると思われる谷を見ている。その谷には爆弾が仕掛けられており、谷を抜けると戦車が待ち構えている。

（そろそろ……見えた。）

双眼鏡にドイツのパンター戦車を先頭に進撃するドイツ機甲師団が確認できた。

「至急、戦車隊に攻撃命令を出せ！撤退したら谷を爆破する。」

そう言って熊谷は双眼鏡で再びドイツ機甲師団を見る。

（奴ら、司令部の破壊を知らないのか？だったら、好都合なのだが。）

「撃て!!」

待ち伏せしていた二式超重戦車は一斉に主砲を発射する。

「後退。」

撃った後は装填の為に後退する。続いて、二式超重戦車の間から4式重戦車が顔を見せて主砲を放つ。そしたら、後退して6式中戦車と続く。

「これが、織田信長が長篠の戦いで見せた鉄砲3段撃ちを現代版に改良した砲撃3段構えだ!」

織田信長が新兵器として鉄砲とそれを効果的に使った鉄砲3段撃ちで、当時最強を誇っていた武田騎馬隊を見事に壊滅させたのは有名な話である。

「いいか、撃ったら後退し、後ろにいる戦車は前進して撃つ。そして後退だ。このリズムを崩すな。」

日本戦車隊は一糸乱れぬ行動で進撃するドイツ戦車を破壊していく。ドイツは入れ替わる日本戦車に混乱して狙いを定められないでいる。

「敵の攻撃が激しい。後退だ。」

ドイツ戦車部隊指揮官は慌てて後退命令を下すが、

「爆破しろ！」

双眼鏡で見ていた熊谷がすぐさま命じる。谷は爆破され、脆くなった谷は崩壊して退路を塞ぐ。

「くそ。」

退路を断たれ、成す術を無くしたドイツ戦車隊が選べる選択肢は2つ。突撃か、降伏である。

「降伏しよう。」

制空権はドイツには無い。従って、航空支援が受けられない今、降伏以外を選ぶのはちよつとした勇気が必要である。しかし、素直に負けを認めるのはもっと勇気が必要である。ドイツ戦車隊指揮官は、ある意味では臆病者。しかし、ある意味では優れた指揮官であった。

「ドイツ戦車隊は降伏しました。」

無線手から報告を受け、熊谷は安堵する。取りあえず、一つの戦車師団を無力化できたのだから。

「イギリスも、一個師団を降伏させた模様。アメリカは半数を撃破して逃げられたん模様です。」

「そうか。まあ、仕方がない。アメリカは、戦車戦の経験が乏しいから逃がすのも無理ないよ。」

欧州に上陸していない今、アメリカにとって本格的な戦車戦はインドが初めてであった。経験がこれ程までに影響を及ぼすものだと、熊谷は改めて理解する。

「分かった。しかし、まだ敵は居る。数は今回でかなり減らしたが、敵の総兵力が不明な今、勝っているのか負けているのか分からん。しかし、この戦闘の勝利者は我々連合軍であることを宣言する。」

熊谷は今回の戦闘をこう評価した。

―天照―

「陸軍より報告。ドイツ機甲師団2個半お壊滅させた模様です。」

通信兵が艦橋へ伝令に来る。

「分かった。ご苦労。」

「対潜哨戒2号機より、Uボート撃沈の報告。」

旧式化した風海？には爆雷やソナーを装備して対潜哨戒機として任務に就いている。ジェット機に追い回されない限り、風海でも十分対応できるので偵察機としても未だに活躍している。

「これで、総戦果を累計してUボート200隻を超したな。」

「敵も、よく200隻も投入してきましたね。」

「それを沈める我々も凄いよ。」

輝政が感心したように言うので、佐藤元帥が付け加える。

「対潜哨戒8号機より、Uボート撃沈。」

通信室より報告が入る。

「また、一隻増えたぞ。」

「ですね。」

輝政が戦果報告書に一を足す。

「電探に、敵機反応!」

これも、対潜哨戒中に毎回やってくる。史実のアメリカ軍程ではないが、皇道艦隊乗組員は定期便と称して訓練気分で撃退しているのが現実である。

「総員、戦闘配置。」

「敵はアラドブリッツとTa152ですか。」

珍しく、護衛には防空戦闘機が就いていた。まあ、ドイツ軍戦闘機はどれも防空戦闘機と言ってしまえばそれまでだが。それでも、Ta152は航続距離が長い方である。

「噴進弾、攻撃はじめ。」

対潜哨戒機を上げている為、戦闘機の発艦が出来ない今、装備されている防御火器で迎撃するしかなかった。

「やはり、増設されている噴進砲は効果抜群ですね。」

飛行甲板の周りには特に念入りに装備された噴進砲が守っている。下手な高角砲より、よっぽど命中が期待できる噴進砲の方が兵士らの間でも信頼されている。

「あ、また一機撃墜しましたよ。」

噴進砲の直撃を受け、翼が根元から取れて落下していく。

「いい加減、定期便も諦めたらいいのに。」

佐藤元帥も、いい加減うんざりしている。全く戦果も上がっていないのに、繰り返し繰り返し攻撃しているドイツ空軍司令部への怒りも込み上げてくる。自分が、ドイツ空軍パイロットなら出撃拒否もしていただろう。

「神武に6式誘導噴進弾をVLSに装填命令。」

佐藤元帥は神武秘匿兵器の一つ。現在で言う巡航ミサイルの装填を命じた。

「目標はドイツ空軍司令部、発射!!」

神武の甲板から、6式誘導噴進弾が発射された。

ードイツ空軍 インド方面軍司令部ー

「また、日本艦隊に差し向けた航空部隊が壊滅しました。」

帰還した航空機を窓越しに見ながら、ドイツ空軍インド方面軍司令官のシュラービック中将は悪態をつく。

「帰還した者を全員軍法会議に掛けてやる!!。敵艦に、まだ一発の命中弾を与えていないではないか!？」

未だに、皇道艦隊への戦果報告が届いていない為、何としても自分らが最初の戦果を挙げようとシュラービックは躍起になっている。なのに出撃の度に航空機が再起不能なまでの損害を受けて帰ってくるのに、敵の損害報告は全くないのだ。

「中将殿、海上から一機、帰還してきました。」

「そいつの被害状況は？」

「いえ、応答がありません。変ですね、識別信号が敵も味方も示していないんです。」

「故障か？」

「いえ、機械は正常です。もうじき、外に見えるでしょう。」

シュラービックは窓際に行き、外を見る。そして、信じられないものを見た。

「逃げろ!!」

これが、彼の最後の言葉だった。6式誘導噴進弾は入力されたデータに基づき、一直線にシュラービック中将の居る管制塔へ直撃したのだった。

印度戦線 7

―天照―

「印度に進出したドイツ空軍はこれで混乱するな。」

ドイツ空軍の印度司令部を破壊した皇道艦隊は、熊谷司令宛てに電文を発信する

『我、これより航空支援を再開する。』

この電文は熊谷司令の乗る偵察装甲車が受信。熊谷も、これを読んだ。

「攻撃隊、発艦」

天照を始め、航空戦艦から攻撃隊が発艦した。

―青龍―

「殲鬼、発艦用意良し。」

空母艦隊に配備された35mm高速機関砲を搭載した噴式艦上対地攻撃機が、飛行甲板にズラリと並べられている。

「発艦!!」

空母から合計120機の殲鬼が発艦し、白鷗と黒鷗からは護衛の噴式零戦が飛び立った。

―ドイツ軍 野戦司令部―

「補給を急がせろ。」

ドイツ軍が燃料や弾薬の補給を行っている所を悪夢が訪れた。

「お、おいあれ。日本軍機だ!!」

低空に侵入して接近した先ほどの航空戦艦を飛び立った攻撃隊は、補給作業中の戦車や補給物資に襲いかかった。

「一気に掛かるぞ。」

心神は、一気に急降下を掛けて爆弾を投下した。80機から投下された250?爆弾計640個は補給作業中の戦車に命中し、損害8割を記録。残る80機が補給物資に投下。こちらも、損害9割を記録する大惨事となった。

「任務完了、離脱する。」

護衛機が無い為、直ぐに離脱しなくては混乱しているとは言え、迎撃機が上がってきかねない。

「電探に感あり。」

案の定、電探が敵機を捉えた。

「ハインケルのジェット機を先頭に、後方にTa152。完全な迎撃戦闘機隊だ。」

どちらもドイツ空軍が世界に誇った最高の迎撃戦闘機。この両機を、インターセプター迎撃機に用いたと言う事は、ドイツも焦っていると言う事だ。

「逃げ切るぞ。ついてこい。」

最高の性能を持つ僚機も、低空。空気抵抗も高く、史実通りの性能を出しきれない。しかし、追いつくには十分だった。

「追いつかれる、か。」

振り返ると、既に後方に迫ってきている。

「捉えたぞ、日本軍機。開戦以来、我々は負けてきたが、今日は勝ちだ。」

ハインケルのジェット機で先頭を飛んでいたパイロットが引き金に指を掛けると

「電探に感、だど？」

別方位に別編隊を捉えた。

「あれは、日本軍機か？」

現れたには頭が大きい単座の戦闘機だった。

「不格好だが、先に迎撃する。レシプロ機なら、恐れるに足らん。」

心神の迎撃をやめ、新たに現れた戦闘機へ目標を変更する。

「うまく、引きつけられたな。」

煽動を駆るパイロットは、囀覚悟で出撃。迎撃を行おうとした。

「上手く、時間を稼ぐぞ。」

全員、覚悟を決めて敵機に立ち向かう。

「捉えた。」

旋回戦では煽動が圧倒的に優位に立った。五式戦闘機の数と武装を強化した改良型である煽動は、旋回戦ではどの戦闘機にも劣らない力を持っていた。

「くそ。振り切られた。」

しかし、速度ではハインケルの方が優位。後ろを取ろうと旋回するが、加速で振り切られてしまう。

「性能は噂以上か。」

ハインケルの性能は噂以上だった。そのため、キルレートは5…2を記録してしまった。しかし、T a 152との戦いは2…7を示すほぼワンサイドゲームとなった。

「すまん。」

撃墜されたのを遠くで見ていた心神のパイロット等は、撃墜されたパイロットに敬礼する。

―天照―

「佐藤元帥、陸軍が迎撃を行ってくれなかったら我々は大変なことになっていました。」

輝政は長官室へ入って話す。

「君の気持も分かる。しかし、今日は最後の攻撃だった。だから、補給基地よりも動く目標を優先してしまったのは反省している。」

「最後の、攻撃？」

「今日で、我々の印度作戦支援任務は終了する。後は、神風艦隊が後を引き継ぐそうだ。」

「では、我々は？」

「欧州。そこが、我々の戦場となる。」

「長官は2度目ですね。」

「そうだ。正直、英国はかなり不味い。本土に上陸され、軍備も備えも殆どされていなかったロンドン陥落。仮政府首相のチャーチル卿が北部にて徹底抗戦を訴え、連合軍司令部もアイスランドへ移動した。」

英国本土へ上陸したドイツ軍は電撃的侵攻でロンドンを陥落。その後は少しずつではあるが確実に北部へ迫っている状況だった。

「旭日艦隊と合同で、イギリス支援を行う様に命じられている。どの道、本艦隊と旭日艦隊。この両艦隊が揃って初めて、連合艦隊の主力艦隊となるのだからこれが本来の姿となる。」

元々、皇道艦隊は旭日艦隊の為の実験艦隊と言う意味もあった。艦隊指揮のノウハウや巨艦建造技術、それに電隊などの電子装備。それらを踏まえ、対潜能力を高めた艦隊が旭日艦隊と言う事になる。

「では、久しぶりに古巣へ戻るか。初代天皇陛下の名を持つ、戦艦『神武』へ」

「はい。将旗も下させます。」

「そうしてくれ。」

輝政は長官室を出て、移動の為の準備を始める。

（陸軍の犠牲、私は無駄にはしない。今回の損害は全て、護衛を欠いた私の責任だ。それを担い、そして散った陸軍の戦友の事を、私は忘れやしない。）

と、心で誓うのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1607q/>

皇道の艦隊

2011年10月25日23時06分発行